宮沢賢治「文語詩未定稿」評釈六

信時　哲郎

84　〔聖なる窓〕

聖なる窓
そらのひかりはうす青み
汚点ある幕はひるがへる
　Oh, my reverence!
　Sacred St. Window!

大意

聖なる窓
空の光は薄青く
汚点のあるカーテンがはためいている
　おぉ、おれの崇高さよ！
　聖なる、窓よ！

モチーフ

「「東京」ノート」の「一九二一年一月より八月に至るうち」と書かれた項に書かれており、散文「図書館幻想」と共通するアイディアがあることからも家出上京中の経験を詠んだものだろう。「〔われはダルケを名乗れるものと〕」（「未定稿」）とも密接な関係があるが、「聖なる窓」から注ぐ太陽光の崇高さ（reverence）を称えながら、それが自分自身にも「崇高が照り返されている」ことの実感を綴ろうとしたもののようだ。

語注

my reverence　英語で「私の畏敬」の意。「聖なる窓」を讃えての言葉だろう。原稿に「1921.11.一」（家出上京から花巻にもどった直後の大正十年秋）と記されている散文「図書館幻想」は、上野にあった帝国図書館（現在は当時の建物の一部を生かした国立国会図書館国際子ども図書館）を舞台にしたとされるが、そこには「室の中はガランとしてつめたく、せいの低いダルゲが手を額にかざしてそこの巨きな窓から西のそらをじっと眺めてゐた」とあり、関係が深そうだ。賢治は「ダルゲ」に透き通った声で「西ぞらの／ちぢれ羊から／おれの崇敬は照り返され／（天の海と窓の日覆ひ。）／おれの崇敬は照り返され。」という『春と修羅（第一集）』の「雲とはんのき」中の一節を歌わせているが、図書館の「巨きな窓」や「my reverecence」を和訳した「おれの崇敬」が

あることなどから、これらの作品には密接な関係があると思われる。また『春と修羅（第一集）』所収の「樺太鉄道」の印刷用原稿にも「崖にならぶものは聖白樺（セントベチュラアルバ）／（O, my reverence, Sacred St. Vetura alba!）」とある。

評釈

「「東京」ノート」に書かれた下書稿㈠、黄罫（22 0 行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（鉛筆でⓎ）の二種が現存。ただし下書稿㈠と㈡に内容上の大きな違いは認められない。また、『新校本全集』によれば「歌稿〔A〕」の裏表紙には次のようなメモがあるという。

Oh, My reverence
Oh, my
cred（sacred の頭が欠けたと見られる）
St. Window

大きな窓から西の空を見て、その崇高さから、「聖なる窓」（Sacred St. Window）という表現が自然に洩れたという経験を詠んだのだろう。

下書稿㈠は「「東京」ノート」の「一九二一年一月より八月に至るうち」と書かれた項に書かれているが、和暦にすれば大正十年一月から八月、すなわち賢治が無断で上京し、アルバイトをしながら国柱会や上野の帝国図書館に通い、創作活動を始めた時期にあたる。となれば、本作が「「東京」ノート」では二つあとに書かれている「〔われはダルケを名乗れるものと〕」の下書稿㈠と同じように帝国図書館が舞台になっていると考えるのは自然だろう。

和辻哲郎は「自叙伝の試み」（「中央公論」中央公論社 昭和三十二年一月～昭和三十五年一月）で、帝国図書館の印象について「わたくしは机の上に開いた書物から目を離して、時々天井を仰ぎ、そこにぶら下がっているシャンデリヤをながめた。こんなに高い天井の下に坐るのは生まれて初めてだとしみじみ思った。そうして何ともいえない幸福な気持ちになった」と書き、また芥川龍之介は自伝的小説「大道寺信輔の半生」（「中央公論」中央公論社 大正十四年一月）で帝国図書館の印象として、「高い天井に対する恐怖を、大きい窓に対する恐怖を、無数の椅子を埋め尽くした無数の人々に対する恐怖を。が、恐怖は幸ひにも二三度通ふうちに消滅した」と書いている。

和辻は明治二十二年、芥川は明治二十五年生まれなので、明治二十九年生まれの賢治とは、ほぼ同世代だ。兵庫

県神崎郡砥堀村（現・姫路市）生まれの和辻はともかく、東京で生まれ育ち、一高から東大に進学した芥川をも圧倒した天井や窓を擁する帝国図書館であれば、岩手県で生まれ育った賢治が、恐れ、崇めたのも無理はないだろう。散文「図書館幻想」で賢治も「そこの天井は途方もなく高かった。全体その天井や壁が灰色の陰影だけで出来てゐるのか、つめたい漆喰で固めあげられてゐるのかわからなかった」と書いていることから、「聖なる窓」は、決して大仰な誇張ではないだろう。

「めくらぶだうと虹」は原稿用紙の使用状況などから大正十年秋頃に書かれたとされる短篇童話で、後に「マリヴロンと少女」に改作されるが、ここには「どうか私のうやまひを受けとって下さい」という言葉があり、「おれの崇敬は照り返され」に似ている。「聖なる窓」から差し込む光に向かって「my reverence」と綴られる本作の状況とも近い。

「めくらぶだう」は、現われた虹にむかって「どうか私のうやまひを受けとって下さい」と声をかける。虹は「うやまひを受けることは、あなたもおなじです」と答えるが、「めくらぶだう」は「私の命なんか、なんでもないんです。あなたが、もし、もっと立派におなりになる為なら、私なんか、百ぺんでも死にます」と言う。虹は自分の命の方がずっとはかないのに、と答え、さらに「本たうはどんなものでも変らないものはないのです」としながら、「すべて私に来て、私をかゞやかすものは、あなたをもきらめかします。私に与へられたすべてのほめことばは、そのまゝあなたに贈られます」と言う。めくらぶだうは「私を教へて下さい。私を連れて行って下さい。私はどんなことでもいたします」と縋り付くが、虹は「いゝえ私はどこへも行きません。いつでもあなたのことを考へてゐます。すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすむ人は、いつでもいっしょに行くのです。いつまでもほろびるといふことはありません」と言って、消えていく。

いくつものテーマが交錯し、言葉も多義的で捉えどころのない感じを受けるが、帝国図書館における太陽と賢治の対話だとしても、さほど違和感がないようにも思われる。

奥本淳恵（「宮沢賢治「雲とはんのき」について 〈北ぞらのちぢれ羊から／おれ崇敬は照り返され〉を中心に」「国語国文論集33」安田女子大学日本文学会 平成十五年一月）は、「めくらぶだうと虹」の場合、〈私〉の〈崇敬は照り返され〉ているのだとする。ただ、虹に照り返してもらった崇敬に自足することができず、自分を連れて行って欲しいと懇願しているのだ、という。

それでは〈ちぢれ羊〉から照り返される〈おれの崇敬〉はどうだろうか。先にも述べたように〈おれ〉の崇敬の対象は、〈ちぢれ羊〉の向こうにある天への、あるいは〈ちぢれ羊〉を照らしている天の光へのものであろう。天を半ば遮る幕のように広がる雲から〈おれの崇敬〉が照り返されるということは、〈おれの崇敬〉は天に充分には届いていないと考えられるのではないだろうか。そのイメージの言い換えが即ち〈天の海と窓の日おほひ〉であろう。〈窓の日おほひ〉即ち窓の内側にかかっているカーテンは、〈天の海〉と〈おれ〉を遮る存在である。

たしかに『春と修羅（第一集）』所収の「雲とはんのき」を見ると、

こんなにそらがくもつて来て
山も大へん尖つて青くくらくなり
豆畑だつてほんたうにかなしいのに
わづかにその山稜と雲との間には
あやしい光の微塵にみちた
幻惑の天がのぞき
またそのなかにはかがやきまばゆい積雲の一列が
こころも遠くならんでゐる
これら葬送行進曲の層雲の底
鳥もわたらない清澄な空間を
わたくしはたつたひとり
つぎからつぎと冷たいあやしい幻想を抱きながら
一挺のかなづちを持つて
南の方へ石灰岩のいい層を
さがしに行かなければなりません

とあり、とても「おれの崇敬」が成就されたような形跡は見えない。また、「「東京」ノート」の五一頁でも「ひとの崇敬は照り返され」の詩句に続けて「日はしづみ／屋根屋根に／藍晶せきの粉末が撒かれ／さびしくひるがへる天竺木綿」ともあることから、崇敬よりも、むしろ自身の抱える問題や状況の暗さ、わびしさの方が目立っているようにも感じられる。

ただ、同じ「「東京」ノート」の二〜三頁前の四八・四九に書かれた本作の下書稿㈠は、「聖なる窓」から注ぐ光から受けた感動と喜びが書かれているとしか読みようがないように感じられる。崇高なる太陽光を称えるということは、すなわち自分自身をも称えることになっていたのではないだろうか。

最終形態とほぼ変わりがないが、下書稿㈠をあげてみる。

聖なる窓
そらのひかりはうす青み
汚点ある幕はひるがへる
……Oh, my reverence!
Sacred St. Window!

「めくらぶだうと虹」には虹と「めくらぶだう」の次のようなやりとりが描かれる。

その頃、私は、どこへ行き、どこに生まれてゐるでせう。又、この眼の前の、美しい丘や野原も、みな一秒づつけづられたりくづれたりしてゐます。けれども、もしも、まことのちからが、これらの中にあらはれるときは、すべてのおとろへるもの、しわむもの、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないいのちです。わたくしでさへ、たゞ三秒ひらめくときも、半時空にかかるときもいつもおんなじよろこびです。」
「けれども、あなたは、高く光のそらにかかります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌ひます。」
「それはあなたも同じです。すべて私に来て、私をかゞやかすものは、あなたをもきらめかします。私に与へられたすべてのほめことばは、そのままあなたに贈られます。ごらんなさい。まことの瞳でものを見る人は、人の王のさかえの極みをも、野の百合の一つにくらべやうとはしませんでした。それは、人のさかえをば、人のたくらむやうに、しばらくまことのちから、かぎりないいのちからはなして見たのです。もしそのひかりの中でならば、人のおごりからあやしい雲と湧きのぼる、塵の中のたゞ一抹も、神の子のほめ給ふた、聖なる百合に劣るものではありません。」

精神病理学者・木村敏は、感覚器官から得た視覚や聴覚などを統合する器官として共通感覚を想定した。その感覚が不調に陥ると、時間認識や空間認識を初め、美しさ、楽しさ、重さ、軽さなど、いわゆる人間らしい感覚を感じられなくなり、それが離人症ではないかとした。賢治は時に「私の感情があまり冬のやうな工合で、燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれた」(関徳弥宛書簡大正十年八月十一日)というように離人症的な体験をしたことも明らかになっているが、それはむしろ賢治にとって異常な状況であったために記録したのであろう。かつて

「序論 宮沢賢治の手ざわり 文字から声へ」(『五十篇評釈』)で次のように書いた。

共通感覚不全の病が離人症であったが、もし、この共通感覚が並外れて鋭敏な人がいたらどうなるだろう。離人症患者の「世界」が生気のないものであったとすると、共通感覚の働きが盛んであれば、その逆、全てのものが生気に満ち溢れて感じられることになるだろう。つまり空や風、森、湖、太陽、石などが自分に向かって迫ってくるように感じられたり、動植物と会話ができるように感じられたり… そう、文学活動の初めから一貫して、命なきものの生命感、声なきものの声を書き綴ってきた宮沢賢治の「世界」とは、まさしくこの非・離人症的世界だったのである。そして心象スケッチとは、賢治が自らの共通感覚を通して感じた何か、ただ、世界の手ざわりとでも言うしかないような何かを表現した言葉だったのである。

つまり「めくらぶだう」も「虹」も、対等の存在であり、「めくらぶだう」は、自分のすばらしさについて、たまたま自覚ができていないに過ぎないだけで、どちらも違いはないのだ。同じように「聖なる窓」から感じた日光のすばらしさは、日光だけが素晴らしいわけではなく、自分自身もすばらしいものだ、ということになる。

では「汚点ある幕」とは何か、と問われるかもしれないが、これは「めくらぶだうと虹」における虹の言葉を用いれば「この眼の前の、美しい丘や野原も、みな一秒づつけづられたりくづれたりしてゐます。けれども、もしも、まことのちからが、これらの中にあらはれるときは、すべてのおとろへるもの、しわむもの、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないいのちです」とあるとおりで、目の前の、削られやすく、崩れやすい現象のことを指すのだろう。

この世のあらゆる存在は美しく耀き、敬いを投げかけ、また、敬いを受け取っている。ただ、それでも命は短く、病むこともあれば傷つくこともある。それでも宇宙全体に漲る宇宙生命体と言うべきものは生気に満ちている… 法華経における永遠の生命体であるブッダと、その時々に生まれ変わり、死に変わるブッダのようなものだろうか。『春と修羅 (第一集)』の序で、賢治は「せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です／(ひかりはたもちその電燈は失はれ)」と書いているが、ここではそれを別の表現で言い換えているようにも思われる。

ちなみに「汚点ある幕」は、実際には帝国図書館のカーテンに染みがあった、ということではないかと思われる。

赤田秀子は自身のブログ「帝国図書館（上野図書館）③」（「イーハトーブ・ガーデン」https://nenemu8921.exblog.jp/8250929/）で、国際子ども図書館の写真とともに、「ミュージアムの窓。当時のままを復元しているが、カーテンは締め切りで、室内の照明は蔵書をいためないよう配慮されている。／賢治が〔聖なる窓〕と　歌った窓である。／「汚点ある幕」とは、内側の装飾部分のことであろう」としているが、「締め切り」であったとすれば、そこから空が見えることはなかっただろう。

また須田浅一郎（「聖なる窓　上野図書館の現況」「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報４　水仙」宮沢賢治学会イーハトーブセンター　平成四年三月）の報告によれば、「窓にはカーテンもなく、かつては燦然と輝いていたシャンデリアも取り外された跡を残すだけです」とのこと。カーテンもシャンデリアのように取り外されたのか、当時から無かったのかはわからない。

ただ『帝国図書館概覧』（帝国図書館　明治三十九年）の「閲覧室ノ一部」とある写真によれば、窓にはカーテンのようなものがかかっているように見えるし、田山花袋「上野の図書館」（『東京の三十年』博文館　大正六年六月）には、帝国図書館ではなく、その前に使われていた東京図書館での経験だろうが、「五銭出して、後には私は二階の特別閲覧室に行った。大きな硝子窓、白いカアテン、外にざわざわ動いて見える新緑、キラキラする日影、その窓際で、私は終日長く本を読んだり空想に耽つたりした」と書いていることを思うと、新設の帝国図書館にもカーテンがあった可能性もありそうだ。

本篇は未定稿「〔われはダルケを名乗れるものと〕」と同じ「「東京」ノート」に書かれている。関連作品である散文「図書館幻想」などとも密接な関係にあり、単独での評価もしにくいように思われる。次章も参照されたい。

先行研究

須田浅一郎Ａ「聖なる窓　上野図書館の現況」（「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報４　水仙」宮沢賢治学会イーハトーブセンター　平成四年三月）
福島泰樹「上野公園」（『宮沢賢治と東京宇宙』日本放送出版協会　平成八年十二月）
須田浅一郎Ｂ「賢治が一番しあわせだったとき」（『宮沢賢治に酔う幸福』近代文芸社　平成十年三月）

村瀬甲治「「図書館幻想」論 宮沢賢治における書記／読書行為の空間構成」（「日本近代文学71」日本近代文学会 平成十六年十月）
松田司郎「賢治とユング（3） 夢とヴィジョンの向こうに透視したものは」（「ワルトラワラ27」ワルトラワラの会 平成二十年五月）
宮川健郎「あけがたの食堂の窓／そらしろく」（『〔評釈〕宮沢賢治短歌百選』地人館 令和五年八月）
杉浦静A「文語詩「〔われはダルケを名乗れるものと〕」の生成」（『宮沢賢治 生成・転化する心象スケッチ』文化資源社 令和五年十月）
杉浦静B「「東京」ノート」の「公衆食堂（須田町）」（『宮沢賢治 生成・転化する心象スケッチ』文化資源社 令和五年十月）

85 〔われはダルケを名乗れるものと〕

われはダルケを名乗れるものと
つめたく最后のわかれを交はし
閲覧室の三階より
白き砂をはるかにたどるこゝちにて
その地下室に下り来り
かたみに湯と水とを呑めり
そのとき瓦斯のマントルはやぶれ
焔は葱の華なせば
網膜半ば奪はれて
その洞黒く錯乱せりし

かくぞわれはその文に
ダルケと名乗る哲人と
永久（とは）のわかれをなせるなり

大意

私はダルケを名乗る者と
冷たい最後の別れを交わして
閲覧室の三階から
白い砂をはるかにたどる心地で
図書館の地下室にまで降りてきて
交互に湯と水とを飲んだ
その時にガスのマントルが破れて
炎はネギの華のようになったので
網膜の機能は奪われてしまって

その部屋は黒く乱れているように感じられた

こうして私はその文に
ダルケと名乗る哲人と
永遠なる別れをしたのであった

モチーフ

帝国図書館においてドイツの仏教学者であるパウル・ダルケの著書と永遠の訣別をしたという経験を書いたもの。関連作品において、賢治はダルケに「西ぞらの／ちぢれ羊から／おれの崇敬は照り返され／（天の海と窓の日覆ひ。）／おれの崇敬は照り返され。」と歌わせていたが、同じ詞の登場する「雲とはんのき」では「北ぞらの」に書き直され、それに対応するかのように、詩文に「南の方へ石灰岩のいい層を／さがしに行かなければなりません」とあったことを思うと、本作における賢治の心性は「西ぞら」から「東」に向いていたことを示しているようにも思える。「東」を向くとは、西洋志向から東洋志向に改めることを意味するとともに、舞台となった帝国図書館の「東」にあった国柱会を意味していたようにも思われる。

語注

ダルケ　ドイツ人の医者であり仏教学者でもあったパウル・ダルケのことだろう。賢治はダールケ、ダルゲ、またダールケ博士と書いたメモも残している。大正十三年にヨーロッパ初とされる仏教寺院を設立し、田中智学の三男・里見岸雄はドイツで会見し、その会見記が国柱会の機関誌「天業民報」の大正十三年二月十一日～十七日まで連載されている。作家・岡本かの子もダルケの寺院を訪ねたようで、昭和五年十一月十三日の「読売新聞」（朝刊）に記録があり、また後年、小説「褐色の求道」（『老妓抄』中央公論社 昭和十四年三月）に、「日本人の名前の沢山書いてある参詣者名簿に私も義務だけにペンで名前を書き入れて帰った」ともあるので、日本でもかなり知られた存在だったようだ。賢治の蔵書に高桑純天訳『仏教の世界観』（甲子社書房 大正十五年十月）があり、須田浅一郎（後掲B）や木村東吉（後掲）、秋枝美保（後掲C）、水野達朗（「『春と修羅』の世界観とダルケ受容」「宮沢賢治研究 Annual 16」平成十八年三月）らは、原著もしくは訳書でこの本を読んだと推定するが、賢治テクストに初めてダルケが現れたのは「1921. 11. -」の日付がある散文「ダルゲ」（後にタイトルは「図書館幻想」に修正）であり、翻訳書が刊行されるより前である。原著は既に帝国図書館に収められていたようだが、これを

読んだにしても、賢治がどういうきっかけでこの本に接したかは明らかにされていなかった。水野達朗（「大正七年三月の保阪嘉内書簡における「勉強」」「賢治研究109」宮沢賢治研究会 平成二十二年三月）は「精神界」の大正六年七月・九月号にダルケの翻訳が載ったことから、家出上京以前に賢治がダルケの名前を知った可能性を示したが、続いて杉浦静（「散文「ダルゲ」から口語詩「ダルゲ」へ」『宮沢賢治 生成・転化する心象スケッチ』文化資源社 令和五年十月）が、古くは森鷗外による明治四十四年十月の「椋鳥通信」での言及から水野のあげた「精神界」に載った翻訳「死と生」、渡辺海旭「欧米の仏教」（『仏教大観』丙午出版社 大正七年十一月）における紹介、「出離」の翻訳が載った大正八年六月～八月の「禅学雑誌」、そして大正九年十一月～大正十年三月までダルケの著『宗教及び道徳としての仏教』の第一章が「原始仏教」として雑誌「法爾」に連載されたことなどをあげている。杉浦によれば「法爾」の発行元である浄土真宗系の信仰団体・正信会の正会員には「岩手 宮沢政治郎」があったというので、賢治の家にも届いていたことは確実だという。賢治はこれらのうちどれかを参考にして、本作の舞台となった帝国図書館でダルケの英文か独文による著作に触れたのだろう。ダルケのことを賢治の親友だった保阪嘉内だとする説も菅原千恵子（後掲）を初めとして広く普及しており、大正十年には嘉内が見習士官として上京し、賢治とも会っていることから、その可能性もないわけではない。ただ嘉内説の最も大きな理由として、嘉内と賢治が大正十年に訣別したとされていることが背景にあるようだが、その根拠となった保阪宛の賢治書簡に「或はこれが語での御別かも知れません」といった言葉があったものの、実際は大正七・八年の書簡であったことが明らかになり、また大正十年のものとされていた理由も保阪庸夫・小沢俊郎『宮沢賢治 友への手紙』（筑摩書房 昭和四十三年六月）を編む際に「山場を作りたかったから」持ってこられていたようで（栗原敦「「時期推定書簡存疑」（『新校本宮沢賢治全集』書簡集編集作業から）のうち」『宮沢賢治探究 上』蒼丘書林 令和三年七月）、ダルケとの訣別を嘉内との訣別に直結させる論は主張しにくくなっている。それでも大明敦（「「ダルゲ」とは誰か 「図書館幻想」試論」「賢治研究108」宮沢賢治研究会 平成二十一年十二月）は、恩田逸夫（「宮沢賢治『初期作品』攷」「四次元20」宮沢賢治友の会 昭和二十六年七月）が、「Darge（恐らく独逸語であろう。粘土の下の湿地・泥炭の意の複数）」としていたこと（後に人名であったと改めている）、またドイツ語の dalk は「まぬ

け、愚か者」（賢治と嘉内を含む盛岡高等農林学校の友人たちによる徒歩旅行を「馬鹿旅行」と名付けていたことがある）、さらに英語のダークにも通じることから、嘉内が劇で「全智の神ダークネス」を演じたこともあげて、発想の背後に嘉内がいたのではないかとしている。また加藤碩一（後掲）も、散文の最終部分に「白堊系の砂岩の斜層理について」とあることを、賢治が地質用語を使って嘉内に交流の継続を求めたが、拒絶されたために二人は訣別することになったのだろうとしている。この他に平尾隆弘（「詩集『春と修羅』の成立」『宮沢賢治』国文社 昭和五十三年十一月）は田中智学を当てはめているが、榊昌子（「宮沢賢治は東京で何を書いたか」『宮沢賢治「初期短篇綴」の世界』無明舎出版 平成十二年六月）が、「作品の背景に、パウル・ダールケへの反発があるのは間違いないにしても、それだけではない要素が含まれているのも確かである」とし、「当時作者が抱えていた、信仰、異界、そして文学の問題のアレゴリーと読めないこともない」としたのは納得できるところがある。ただ、散文や口語詩から文語詩未定稿に改稿されると、木村（後掲）や杉浦（後掲B）も指摘するように幻想から現実的なものに変わっており、その中に「かくてぞわれはその文に／ダルケと名乗る哲人と」とあれば、もはや幻想ではなく、現実のドイツ人仏教学者・ダルケの文章への反発が対象になっていたという以外に解釈しにくくなっている。では、ダルケの文のどのような部分から、賢治が「永久のわかれ」をしたかについてだが、ダルケの寺院を訪ねたこともある岡本かの子は「褐色の求道」（前掲）で、「買つた著書を少し頁を繰つて見たりしたけれども、此の寺の創立者に到底本筋の仏教の知識や心験があつたやうには思はれない。例の印度から直接独逸に取入れられた原始経典にいささか触れるところがあり、それに西洋人得意の独断を交へて自己満足の宗教を考え溜めたものらしい」と書いて、小乗仏教を重視し、大乗仏教に理解が乏しい点を批判しているが、同じように賢治も思ったのではないかと考えられる。大角修（「図書館幻想」「雲の信号9」千葉賢治の会 平成二十四年十二月）は、ドイツに十二年間留学経験のある浄土宗の僧侶・渡辺海旭が「欧州の仏教は、大学教室の仏教だ、専門家や研究家の書斎仏教だ、くたけた処で社交家や芸術家のサロン仏教位であらう」（「惣説」『欧米の仏教』前掲）と書いたことなどを引用しながら、「ただし、学問においては渡辺海旭も欧米の印度学・仏教学を高く評価していた」とし、日本の近代仏教学は「原始仏教」を本来のものだとして、中国や日本の大乗仏教は後世に追加されたもので、釈迦

の真説ではないという地点に立っているのだとする。これは賢治も同じで、だからこそ、その憧れが「図書館幻想」において「今度こそ会へるんだ」といったダルゲへの出会いを心待ちにする「おれ」に反映しているのだと思われる。大角はさらに、「しかし、寺々に受け継がれ、実際に生きている仏教から言えば、それは「信仰の仏教」ではない。「書斎仏教」「サロン仏教」であるということになる」という矛盾を書くが、この矛盾の中に立たされたのは賢治も同じであり、だから「冷ややかにわら」（「図書館幻想」）うのみのダルケに対して、賢治は文語詩において「永久のわかれをなせる」と書くことになったのではないかと思われる。したがって本作は、近代的、科学的に仏教を捉えようとした西洋人への憧憬を断ち切って、東洋的な大乗的信仰を貫こうとした、という心の歴史を書こうとしたものだと解することができるように思われる。

閲覧室　上野公園にあった帝国図書館（現在は当時の建物の一部を生かした国立国会図書館国際子ども図書館）の閲覧室のこと。明治三十九年九月落成。『帝国図書館概覧』（帝国図書館 明治三十九年）には「第三層ニ上レバ普通閲覧室（百三坪余）アリ皆床ニハりのりあむヲ張リ詰メ而シテ各層ヨリ書庫ニ通ズルヲ得其扉ニハ鉄戸ヲ開閉シテ防火ノ用ニ供ス」とある。

白き砂　秋枝美保（後掲Ａ）は「三階の図書室から地下室に下りる間の空間を「白い砂」を渡ってくるとイメージしている。この「白い砂」は、西洋と東洋の間にある中央アジアの砂漠を連想させる」とするが、『帝国図書館概覧』（前掲）には「階段室及廊下ハ磨キ白丁場石ヲ敷キタリ階段室石造階段ヨリ第二層ニ上リ大理石及人造石ノ廊下ヲ経テ目録室（三十一坪余）特別閲覧室、婦人閲覧室（五十二坪余）ニ入ル更ニ廊下ヨリ鉄製階段ヲ攀ヂ第三層ニ上レバ普通閲覧室（百三坪余）アリ皆床ニハりのりあむヲ張リ詰メ而シテ各層ヨリ書庫ニ通ズルヲ得其扉ニハ鉄戸ヲ開閉シテ防火ノ用ニ供ス」ともあることから、実際の階段や廊下の床に用いられていた石について書いていたようにも思える。「白丁場石」とは神奈川県湯河原町産出の安山岩のことで、白石、相州みかげ石などとも呼ばれたという（山下浩之・笠間友博「神奈川県湯河原町に産する通称〝白丁場石〟の岩石学的特徴」「神奈川県立博物館研究報告 自然科学44」神奈川県平成二十七年二月）。「大理石及人造石」の色については不明。また、関連作品である散文「図書館幻想」に「白

堊系の砂岩」とあることから、白い岩、白い砂が連想されたのかもしれない。

地下室　『帝国図書館概覧』（前掲）によれば「地下室ハ本館書庫及仮設建物ヲ通ジテ凡三百二十坪アリ閲覧人待合所、食堂、下足置場、便所、物置、乙部図書一部ノ貯蔵場ニ使用スルノ目的ナリ」とのこと。閲覧室から地下の食堂まで降りて、湯と水とを飲んだということなのだろう。

瓦斯のマントル　ガス燈を効率よく、明るく使うための装置。希土類の金属塩を袋状の繊維にしみこませたもの。十九世紀末、電灯が普及するまで世界的に普及し、今日でもキャンプ用のランタンなどに用いられている。マントルが破れたためにネギの華のような炎が出て、光度も落ちたのだろう。東京ガスの「銀座から140年「ガス燈が照らした東京の街」展」の「企画展配布チラシ」（平成二十六年九月十三日～十二月二十三日）によれば、

「大正のはじめに電球も技術革新があり、「タングステン電球」が量産されるようになると、電燈の方が完全に優位に立ちました。しかし東京の街中では、先にガス燈が広く普及していたこともあり、すぐには大きく切り替わることはありませんでした。けれども、１９２３年（大正１２）９月１日に起きた関東大震災により、被害を受けた街や建物が復興していく中、あかりとしては電燈が選ばれ、ガスの炎はあかりから、調理や温水、暖房などの熱源用途へ利用方法が変わってゆきました」とある。

洞黒く錯乱せりし　「洞」は地下室であることから、マントルが破れて部屋全体が暗くなったことを洞窟に喩えたのであろう。秋枝（後掲Ｃ）は「マントルの耐用年数は尽きて、一瞬の輝きを見せた後焼き切れたのである。そのまぶしさに、眼がくらむ様が「網膜半ば奪はれた」状態であろう。その後、眼球、また地下室は闇黒のたれ込める「洞」となり、突然の暗闇に「錯乱」する精神状態が捉えられている。そして、それはやがて押し寄せる深い虚無の深淵を連想させる。それは熱した精神が突如覚めた後にくる深い虚無である」とする。一方で杉浦（後掲）は、「破れたマントルからの「葱の華」のごとき焔の耀きと凝視による眩暈は、新鮮な感覚的体験としてスケッチされたのではなかったか。しかし、これが、最終形態に至って、「かくてわれはその文に」と終結部が置かれた時、焔と眩暈の体験に意味が与えられることになったのである。つまり、閲覧室からの退出以降のすべてを「かくて」と受けることで、ダルケとの別れは対峙の場面のみから拡大されたのである。即ち、焔と眩暈のイ

メージが、ダルゲとの別れの象徴として機能することになった」と読み込む。が、本稿では暗順応について正確に記述しようとしたものだと解したい。賢治は岩波茂雄に宛て、「六七年前から歴史たその論料、われわれの感ずるそのほかの空間といふやうなことについてどうもおかしな感じやうがしてたまりませんでした。わたくしはさう云ふ方の勉強もせずまた風だの稲だのにとかくまぎれ勝ちでしたから、わたくしはあとで勉強するときの仕度にとそれぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました」として、「あなたがお出しになる哲学や心理学の立派な著述とを幾冊かでもお取り替へ下さいまあすならわくしの感謝は申しあげられません」（大正十四年十二月二十日）と書いたが、ここでは地下室のガス燈のマントルが、湯と水を飲んだ時に破れたために、網膜の作用によって、いっそう地下室が暗く感じられたという案順応の作用について「科学的に記載して置」こうとしたのではないかと思われる。暗順応については、例えば「京阪地方照明行脚（一）」（「マツダ新報第９巻２号」東京電気株式会社 大正十一年五月）に、「吾人の眼は常に光に対して自ら調整する能力を有して居る。これは瞳光の開放縮少及び網膜上に於ける適応作用に基くものである。夫故昼間の如く非常に明るい所に於ても又夕方のやうな薄暗い所に於ても能く物体を見ることができる。併しながらこの調節作用には多少の時間を要するものである。暗きに対する網膜の適応作用を暗順応（Dark adaptation）と称しこれは輝いた光が視界より除かれてから数分の間に徐々に行はれ、遂にその状態に適当する視覚を得るやうになる」と書かれていたように、当時から広く知られた現象であったようである。賢治は網膜の作用について関心を持っていたようで、「〔雲を濾し〕」（「未定稿」）では飛蚊症と思われる症状を、また、散文「台川」でも「網膜が感じたゞけのその光だ」と、できるだけ正確に網膜について書こうとしていたことにも通じていよう。

評釈

散文「図書館幻想」、それを口語詩化した「ダルゲ」が関連作品。「「東京」ノート」の四九・五十頁に書かれた下書稿㈠、黄罫（22 0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（赤インクでⓕ）の二種が現存。

「「東京」ノート」の四八・四九頁には関連作品「〔聖なる窓〕」があり、また五一頁には散文中でダルゲが歌う歌詞「〔西ぞらのちゞれ羊から〕」があり、五六頁にも「◎図書館　（ダールケ博士）」のメモがある。また「〔西ぞら

のちゞれ羊から」の歌詞は『春と修羅（第一集）』の「雲とはんのき」にも「西ぞら」が「北ぞら」に換えられて掲載されている。また阿部孝の採譜（宮沢清六の記憶から『新校本全集』では一部改訂）が残っていることから、賢治が人前でも歌っていたことが推定できる。

まず散文「図書館幻想」から見ていくことにしたい。

おれはやっとのことで十階の床（ゆか）をふんで汗を拭った。そこの天井は途方もなく高かった。全体その天井や壁が灰色の陰影だけで出来てゐるのかつめたい漆喰で固めあげられてゐるのかわからなかった。

（さうだ。この巨きな室にダルゲが居るんだ。今度こそは会へるんだ。）とおれは考へて一寸胸のどこかが熱くなったか熔けたかのやうな気がした。

高さ二丈ばかりの大きな扉が半分開いてゐた。おれはするりとはいって行った。

室の中はガランとしてつめたく、せいの低いダルゲが手を額にかざしてそこの巨きな窓から西のそらをじっと眺めてゐた。

ダルゲは灰色で腰には硝子の蓑を厚くまとってゐた。そしてじっと動かなかった。

窓の向ふにはくしやくしやに縮れた雲が痛々しく白く光ってゐた。

ダルゲが俄かにつめたいすきとほった声で高く歌ひ出した。

西ぞらの
ちゞれ羊から
おれの崇敬は照り返され
（天の海と窓の日覆ひ。）
おれの崇敬は照り返され。

おれは空の向ふにある氷河の棒をおもってゐた。

ダルゲは又ぢっと額に手をかざしたまゝ動かなかった。

おれは堪（たゑ）へかねて一足そっちへ進んで叫んだ。

「白堊系の砂岩の斜層理について。」

ダルゲは振り向いて冷やかにわらった。

原稿には「1921.11.-」の日付があり、タイトルも当初は「ダルゲ」とあった。一九二一年と言えば大正十年であり、その十一月なので、東京から花巻に帰った頃のものだろう。

これが口語詩に書き換えられて「ダルゲ」となる。

鉄階段をやっとのことで

おれは十階の床をふんだ
ここの天井はずゐぶん高い
ぜんたい壁や天井が灰いろの陰影だけでできてゐるのか
つめたい漆喰で固めあげられてゐるのかわからない
けれども　さうだ　この巨きな室にダルゲが居て
こんどこそもう会へるのだ
おれはなんだか胸のどこかが熱いか溶けるかしたや
　うだ
七米も高さのある大きな扉が半分開く
おれはするっとはいって行く
室はがらんとつめたくて
猫脊のダルゲが額に手をかざし
巨きな窓から西ぞらをじっと眺めてゐる
ダルゲは陰気な灰いろで
腰には厚い硝子の簑をまとってゐる
ダルゲは少しもうごかない
窓の向ふは雲が縮れて白く痛い
ダルゲがすこしうごいたやうだ
息を引くのは歌ふのだ
　西ぞらのちゞれ羊から
　おれの崇敬は照り返され
（天の海と窓の日覆ひ）
　おれの崇敬は照り返され
空の向ふに氷河の棒ができあがる
ダルゲはもいちど小手をかざしてだまりこむ
もう仕方ない　おれはひとあしそっちへすゝむ
　（えゝと、白堊系の砂岩の斜層理について）
ダルゲがこっちをふりむいて
おゝ　ひややかにわらってゐる

内容的に大きな変化はなさそうに思えるが、散文のタイトルに「図書館幻想」と付けられたことからもわかるように、事実そのままではないのだろう。帝国図書館が舞台のようだが、「十階」とあるところがまず虚構（幻想）であり、実際は三階建てである。ダルゲなる人物が日本語で歌を歌い出したり、唐突に白堊系の砂岩について「おれ」が語り出すというのも、幻想ならではのことだろう。

ダルゲの歌う「おれの崇敬」とは、童話「めくらぶだうと虹」において、めくらぶだうが憧れの存在である虹に向かって「どうか私のうやまひを受けとって下さい」と声をかけたのと似ており、このやりとりが英文で書かれているのが文語詩未定稿「〔聖なる窓〕」で、「Oh, my reverence!／Sacred St. Window!」とある。「めくらぶだうと虹」の制作時期は大正十年秋頃とされているので、大正十年に帝

国図書館の窓外を見て感じた啓示のようなものが、この詩句になったのかもしれない。

賢治は日常的に、この詞に不思議なメロディを付けて歌っていたようで、その譜は『新校本全集６』にも収められている。しかし、「今度こそ会へるんだ」と出会いを期待していながら、「せいの低い」あるいは「猫脊の」とマイナスイメージで形容されるダルゲ、文語詩では「永久のわかれをなせるなり」と書かれるダルケには、いずれにしてもふさわしい歌詞であるようには思われない。

ところで「雲とはんのき」では、この詞は次のようにして登場する。

雲は羊毛とちぢれ
黒緑赤楊のモザイツク
またなかぞらには氷片の雲がうかび
すすきはきらつと光つて過ぎる
《北ぞらのちぢれ羊から
おれの崇敬は照り返され
天の海と窓の日おほひ
おれの崇敬は照り返され》
沼はきれいに鉋をかけられ
朧ろな秋の水ゾルと

つめたくぬるぬるした蓴菜とから組成され
ゆふべ一晩の雨でできた
陶庵だか東庵だかの蒔絵の
精製された水銀の川です
アマルガムにさへならなかつたら
銀の水車でもまはしていい
無細工な銀の水車でもまはしていい
（赤紙をはられた火薬車だ
あたまの奥ではもうまつ白に爆発してゐる）
無細工の銀の水車でもまはすがいい
カフカズ風に帽子を折つてかぶるもの
感官のさびしい盈虚のなかで
貨物車輪の裏の秋の明るさ
（ひのきのひらめく六月に
おまへが刻んだその線は
やがてどんな重荷になつて
おまへに男らしい償ひを強ひるかわからない）
手宮文字です　手宮文字です
こんなにそらがくもつて来て
山も大へん尖つて青くくらくなり
豆畑だつてほんたうにかなしいのに
わづかにその山稜と雲との間には

あやしい光の微塵にみちた
幻惑の天がのぞき
またそのなかにはかがやきまばゆい積雲の一列が
こころも遠くならんでゐる
これら葬送行進曲の層雲の底
鳥もわたらない清澄な空間を
わたくしはたつたひとり
つぎからつぎと冷たいあやしい幻想を抱きながら
一挺のかなづちを持つて
南の方へ石灰岩のいい層を
さがしに行かなければなりません

非常に解釈の難しい詩だが、天沢退二郎（「空間の変貌『春と修羅』における「風景とオルゴール」詩群の展開」『宮沢賢治《論》』筑摩書房 昭和五十一年十一月）は本作をもって「すでに「屈折率」から「春と修羅」「永訣の朝」「オホーツク挽歌」という一連の、とりかえしようのない北方志向の生の一サイクル――ほとんどひとつの「生の全体」を生きおえてしまった詩人は、いま第二のサイクル――ほとんど終ることのない《南方の方へ》、「余生」へと出発しようとしているのだから」と書いた。たしかに前半で「北ぞらのちぢれ羊から／おれの崇敬は照り返され」と書かれながら、後半では「これら葬送行進曲の層雲の底／鳥もわたらない清澄な空間を／わたくしはたつたひとり／つぎからつぎと冷たいあやしい幻想を抱きながら／一挺のかなづちを持つて／南の方へ石灰岩のいい層を／さがしに行かなければなりません」とあり、不本意ながら南に行かざるを得ないのだという実感が書かれているようにも思われる。

この「北」と「南」が、ただの偶然でないことは、「図書館幻想」や「ダルゲ」では「西ぞらのちゞれ羊」として掲載されていた詩句が、ここだけ「北ぞらのちゞれ羊」に、しかも「雲とはんのき」の「詩集印刷用原稿」の段階で「西」が「北」に書き換えられていることから、かなり明確な意図があっての改稿であったことが窺える。

また、この「雲とはんのき」は天沢（前掲）も書くように『春と修羅（第一集）』の冒頭に収められた「屈折率」と「一種のヴァリアション、書きかえ詩篇にあたる」とも考えられる。

七つ森のこつちのひとつが
水の中よりもつと明るく
そしてたいへん巨きいのに
わたくしはでこぼこ凍つたみちをふみ

このでこぼこの雪をふみ
向ふの縮れた亜鉛(あえん)の雲へ
陰気な郵便脚夫(きやくふ)のやうに
（またアラツディン、洋燈(ラムプ)とり）
急がなければならないのか

どちらも「のに」を使って、最後には「行かなければなりません」、「急がなければならないのか」とあり、また奥本淳恵（「宮沢賢治「雲とはんのき」について〈北ぞらのちぢれ羊から／おれ崇敬は照り返され〉を中心に」「国語国文論集33」安田女子大学日本文学会 平成十五年一月）が書くように、「ちぢれ羊」と「縮れた亜鉛の雲」も重なっている。「小岩井農場」などにも縮れ雲は登場するが、奥本はこうした例から縮れ雲は「何か不安な心理状態や、異様な情景が暗示されている場合が多い」と指摘する。

さて、そうしてみると「図書館幻想」や「ダルゲ」における「西ぞらの／ちぢれ羊から」（「窓の向ふにはくしやくしやに縮れた雲が痛々しく白く光ってゐた」などとも書いている）についても、不本意な方向への転換、そして「不安な心理状態」があったものと考えてもよいように思われる。

「おれ」が西に憧れていたのは、ダルゲに対して「こんどこそもう会へるのだ／おれはなんだか胸のどこかが熱いか溶けるかしたやうだ」と思う心情に明らかで、それは西洋の科学や学問に憧れる気持ちだと言い換えてよいだろう。しかし、それに魅かれながらも「おれ」の向かわなければいけない道は、東方に、つまりアジアにあったということではないだろうか。

「ダルケ」についての語注で、大角修（「図書館幻想」「雲の信号9」千葉賢治の会 平成二十四年十二月）の論を引用しながら、日本の近代仏教学は「原始仏教」が本来のもので、中国や日本の大乗仏教は後世に追加されたものであって、釈迦の真説ではないというのが明らかになったものの、「しかし、寺々に受け継がれ、実際に生きている仏教から言えば、それは「信仰の仏教」ではない。「書斎仏教」「サロン仏教」であるということになる」という矛盾の中にあることについて書いた。これは賢治が西の明るい光に憧れながらも東に向かうこと、ダルゲに冷ややかに扱われ、東への転換を余儀なくされるのは仕方ないのだ、ということを意味していたのではないだろうか。所詮は図書館における「幻想」ではあったのかもしれないが、「おれ」の向かうのは西方ではなく、東方であることをダルゲ

に別れを告げることで、小乗仏教から大乗仏教を選んだことを象徴させたように感じられる。

そして、賢治が意図していたのか、あるいはたまたまだったのかは定かでないながら、帝国図書館のちょうど東方には国柱会本部があった。

賢治は友人の宮本友一に「今は午前丈或る印刷所に通ひ午后から夜十時迄は国柱会で会員事務をお手伝しペンを握みつゞけです、今帰ったところですよ」（大正十年三月十日）と書いていることを思えば、帝国図書館を後にして、国柱会館に向かったということも、実際にあったかもしれない。

さて、ここで文語詩について考えていくことにしたい。まず下書稿㈠とされる「東京」ノート」に掲載されたものをあげる。タイトルの「われはダルケと名乗れるものは」の「は」は書き誤りであろう。

われはダルゲを名乗れるものは
つめたく最后のわかれをかはし
白き砂をはるかにはるかにたどれるなり
その三階より灰いろなせる地下室に来て
われはしばらく湯と水とを呑めり
そのとき瓦斯のマントルはやぶれ居て
焔は葱の華をなせるに
見つや網膜の半ら奪ひとられて
その床は黒く散乱せりき
（白き砂をはるかにはるかにたどれるなり）

文語詩になると閲覧室から出た後のことが書かれるが、十階にあったはずの閲覧室は三階になるなど、幻想ではなく現実に近づいているようにも感じられる。木村東吉（後掲）は「かつて寺田透が指摘して以来、口語詩から童話へと構成されていくのが賢治作品の通常の流れとされているのですが、ここには逆方向の流れがあることも、注目されるところです」と書くが、たしかにその通りかもしれない。

未定稿ではなく、文語詩として定稿に向かうのであれば、さらなる虚構化が施され、幻想的なものになった可能性も否定はできないが、杉浦（後掲）は「さらに推敲が進められた時、散文「ダルゲ」を口語詩化した「ダルゲ」をさらに文語詩化する形で取り込み、スケールの大きなダルケとの別離詩篇として構築されるかたちで、「想は定ま」っていったかもしれないのである」と書いている。

文語詩の最終段階である下書稿㈡は次のようなもので、Ⓘが付されている。

われはダルゲを名乗れるものと
つめたく最后のわかれを交はし
閲覧室の三階より
白き砂をはるかにたどるこゝちにて
その地下室に下り来り
かたみに湯と水とを呑めり
そのとき瓦斯のマントルはやぶれ
焔は葱の華なせば
網膜半ば奪はれて
その洞黒く錯乱せりし

かくぞわれはその文に
ダルケと名乗る哲人と
永久(とは)のわかれをなせるなり

二連構成となるが、第二連の内容は一連の再確認／強調である。ここには「その文にダルケと名乗る哲人」とあるので、杉浦（後掲）が書くように、「この詩の舞台は（帝国）図書館であり、そこで「その文にダルケを名乗る哲人」とは、書物から形象した人物にほかならず、具体的にはダルケの書物に書かれている言説内容に別れを告げたということになる」ということになろう。

ましてや、散文や口語詩の段階と違って、「体験した事実を再構成する方向で手が入れられていった」（杉浦）のだとすれば、ダルゲと書かれていた時は幻想的で、ダルケと書かれると現実的になるといった違いはあったにせよ、これらの作品においてはドイツの仏教学者であるパウル・ダルケが取り上げられていたということについては疑う余地がないように思える。

もう一つ付け加えたいのは、散文や口語詩の段階では西洋の近代・科学と東洋の信仰が対比されていたと書いたが、文語詩になるとこの東西の対比、また実際の方角としての帝国図書館の西側の光が降り注いでいた方向と、国柱会のあった東方の対比が目立たなくなっていることについてである。

しかし、文語詩でも、三階の閲覧室から地下室に、しかもガスのマントルが破れ、網膜には闇の中の洞窟に見えたと書かれており、光から闇へ、天から地へ、という差が強調されている。これは「七つ森のこつちのひとつが／水の中よりもつと明るく／そしてたいへん巨きいのに」「急がなければならないのか」という「屈折率」と同じ構造であり、また、「雲とはんのき」において「こんなにそらがく

もつて来て／山も大へん尖つて青くくらくなり／豆畑だつてほんたうにかなしいのに」「わたくしはたつたひとり／つぎからつぎと冷たいあやしい幻想を抱きながら／一挺のかなづちを持つて／南の方へ石灰岩のいい層を／さがしに行かなければなりません」というのと同じ構造を保っている。

西洋と東洋、光と闇といった対立については未定稿ということもあって、うまく整理しきれていないままだったのかもしれないが、この後の推敲はこうした方向でなされたのではないか、とも思えるのである。

ただ、やはり東京での着想、つまり岩手県外での取材ということからⓉまで付けられていても定稿化はされなかったようである。賢治の個人史にとっても重要な転換点であったようにも思われるが、あるいは個人史的に重要すぎる事件であったからこそ、自伝的要素を省こうとしていた定稿には選ばれなかったという側面もあったかもしれない。

先行研究

小倉豊文「宮沢賢治の読書」（「イーハトーヴォ復刊６」宮沢賢治の会 昭和三十年八月）
須田浅一郎Ａ「聖なる窓 上野図書館の現況」（「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報４ 水仙」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成四年三月）
須田浅一郎Ｂ「「宮沢賢治の仏教」と呼び得るもの」（『宮沢賢治の仏教』りん書房 平成五年十月）
福島泰樹「上野公園」（『宮沢賢治と東京宇宙』日本放送出版会 平成八年十二月）
菅原千恵子「「図書館幻想」のダルケとは誰か」（『宮沢賢治の青春』角川書店 平成九年十一月）
木村東吉「宮沢賢治の図書館イメージ 「図書館幻想」をめぐって」（「短期大学図書館研究 21」私立短期大学図書館協議会 平成十三年六月）
秋枝美保Ａ「「われはダルケを名乗れるものと」」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラーノ 平成十四年七月）
秋枝美保Ｂ「心象スケッチ「雲とはんのき」における「手宮文字」の意味 国家主義的熱狂からの離脱」（『宮沢賢治の文学と思想 透明な幽霊の複合体 開かれた自己「孤立系」からの解放』朝文社 平成十六年九月）
秋枝美保Ｃ「心象スケッチ「雲とはんのき」における「ダルケ」の影 西洋的仏教受容の意味」（『宮沢賢治の文学と思想 透明な幽霊の複合体 開かれた自己「孤立系」からの解放』朝文社 平成十六年九月）

沢口たまみ「賢治をめぐる女性たち」（『宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニティー 平成二十二年四月）
加藤碩一「「白亜系の砂岩の斜層理」とは？」（「宮沢賢治研究Annual 27」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成二十九年三月）
杉浦静「文語詩「〔われはダルケを名乗れるものと〕」の生成」（『宮沢賢治 生成・転化する心象スケッチ』文化資源社 令和五年十月）

86 県道

鳥居の下の県道を
砂塵おぼろにあとひきて
青竹（あをたけ）いろのトラック過ぐる

枝垂の栗の下影に
鳥獣戯画のかたちして
相撲をとれる子らもあり

大意

鳥居の下の県道を
砂ぼこりをもうもうと立てて
青竹色をしたトラックが走っていく

栗の木の垂れ下がった枝の影では
鳥獣戯画のような姿で
相撲をとっている子どもたちもある

モチーフ

神社の鳥居の前に県道ができたことによって生じた聖と俗の空間的な「境」（下書稿に付されたタイトル）、そこをトラックが行き過ぎるという時間的な「境」を描こうとしたのだろう。賢治は近代的科学の発展を農業技術者としても期待していたはずだが、古来から聖なるものとして引き継がれてきた信仰が、科学によって脅かされるとするなら、反対したい気持ちもあっただろう。「境」というタイトルは、単純に跳び越すべきものとしてではなく、留まらざるを得ないものという両義的なものとして解すべきかとも思われる。

語注

県道　県が敷設・管理する道路のこと。島田隆輔（後掲）は「道路の格を意識しているようにみえる」と書くが、

「五十篇」には「村道」があり、また同じ「五十篇」の「〔月の鉛の雲さびに〕」の下書稿㈣のタイトルも一時「国道」とされていた。口語詩になると「春と修羅 第二集」に「九九 〔鉄道線路と国道が〕 一九二四、五、一六、」や「四〇二 国道 一九二六、一、一四、」、また「三三一 凍雨 一九二四、一〇、二四、」は『現代日本詩集（一九三三年版）』（詩人時代社 昭和八年四月）に収録された際には「県道」のタイトルが付されていた。背景には大正八年四月に道路法の公布があったと推定できる。内閣書記官都市計画調査会幹事の肩書のある池田宏の談話（「道路法の由来と其精神」「自動車２―６」帝国自動車保護協会出版部 大正八年六月）によれば、道路は古来より交通運輸において重要なものであったが、鉄道や河川が優先され、統一された法規がないまま等閑視されてきた。しかし「特に最近に於ては自動車の使用が盛んになつて来て、交通運輸界に一大革命を齎らした。此の場合、怎うしても道路の実質、延長、橋梁の荷重力等、惣じて道路といふものに対し改良を加へねばならぬことゝなつた」ために、全国の道路を統一して整備することが急務となって公布に至ったのだという。これまでは国道、府県道、里道の三分類だったものが、里道が郡道、市道、町村道に三分されて五分類になり、「国道とはたとへば東京より神宮に至るとか、師団に至るとか、大都会に至るとか、若しくは軍事上の目的の為めに築造せられてゐるもの等をいふので、是れは勿論第一級に属する道路である。府県道とは県内の各幹線道路とか、枢要なる港湾に達する線、若くは大なる鉄道停車場に至る線抔をいふもの、郡道とか郡内に於いて前者と同一の位置にある線、市道とはいふまでもなく市制の敷かれてゐる都会内の道路、町村道は、町村内に於いて前者と同一位置にある道路をいふのである。道路を以上の五級に区分して系統的に之れを統一し、全国に道路網を張るのを原則としてゐるのである」とされた。岩手県では十四線が増えて三十七線が県道となっているが、それまでの道路状況について前内務大臣水野錬太郎は銀行集会所の道路改修会の席上で次のように述べたのだという。アウトルック誌によれば、「日本には殆ど道路らしい道路も無く、橋も無い、泥濘の中を、急勾配の坂路を多数の労働者が重い荷を運ぶ有様は殆んど酸鼻の情景で実に人道上の大問題である」と書かれたことを読み上げ、「これ等国辱的の外観はどうにもせよ悪道路から蒙る経済上の損失は如何する、東京市中だけで一日に輸送される総ての貨物は千五十万噸で六百三十万円の輸送費を要し一噸一哩六十五銭だが若し道路を改良すれば四百

七十二萬五千円で済み一噸一哩四十五銭に減ずる、その他自動車のタイヤ、衣服履物の損害を軽減する事を算入する時は道路改良の必要は固より言を俟たぬと力説し」たことを紹介している（「道路の無い日本」「自動車２―５」帝国自動車保護協会 大正八年五月）路の無い日本）。日本国内において自動車は明治末年から普及を始めるが、関東大震災で鉄道が大きな打撃を受けたことから自動車の利便性が強く認識され、また、フォード社やゼネラルモーターズ社等の自動車製造技術の向上と日本でのノックダウン方式での販売が影響したこともあって大正年間に急増している。『通運読本〃通運史〃第二巻』（通運業務研究会 昭和三十一年三月）によれば、大正五年における全国のトラックは二四台だったが、大正十年には八八九台、十三年には三〇五八台、十五年には七八八四台と激増している。しかし、同書によれば、トラックの「新調費用・維持費において、荷馬車とトラックの間には相当な開きがあり、しかもフォードの寿命は、普通使用で二カ年間であったから、年支出費用の差は、さらに大きかった。／そのために、トラックの数がふえたとはいえ、一般の集配には荷牛馬車ないし荷車を利用し、急送品にのみトラックを利用するというのは、当時の通運業者の実際であったようである」としている。楢崎俊雄の「農村道路論」（『現代道路論』巌松堂書店）は昭和八年四月の発行だが、『トラックは農村生活に革命をもたらす』と云つても過言では無いのである。農夫の利潤増加、市場拡大、生産増加、財産価値の騰貴、農業労働問題の解決彼れ及び彼れの家族の生活の快適、之等はトラックに依り齎される」と書いている。つまり賢治が没する昭和八年になっても、まだ農村においてトラックが常用されるには至っていなかったことになる。賢治は鉄道マニアと言っていいほどに鉄道を愛し、新線・新区間が開業すると即座に乗りに行っていたことが確認できるが（信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治」「賢治研究96」宮沢賢治研究会 平成十七年七月）、今日の鉄道ファンとは異なり、車両や駅舎などにはほとんど興味を示していないようで、むしろ鉄道によって人々の利便性や経済性が大幅に向上することを慶び、そこにロマンを感じていたように思われるが、そうだとすれば農村経済にも役立つ可能性の高い道路網の拡充やトラック輸送の増加についても前向きに考えていた可能性が高い。島田が賢治のことを「道路の格を意識しているようにみえる」としているのも、こうして地上交通の拡充を心待ちにしていたためであるように思う。

枝垂の栗　島田（後掲）は「ここは老樹を想像するよりも、栗の実がすずなりのさまを見立てたとみたい。舞台の季節は秋と想定しておく」とする。下書稿㈠に「こゞれる松の森」という語句とともに「枝垂の栗」の語句があったが、同時に「稲田にはかにあわたゞし→稲穂にはかにあわたゞし」とあったことから、舞台は秋であったということでよいのだろう。ただ、島田は「こゞれる松」について、『言海』の「凍リテ凝ル」を引き「「松の森」が寒さで縮こまっているようにみえる」とし、「稲田（稲穂）にはかにあわたゞし」とあったのを、「冷たい夏を終えた秋の、異変をかかえた稲田の後継に見えてくる」と書いている。あり得ないことではないが、栗の実が鈴なりにできていたのだとすると、冷夏を描くつもりはあまりなかったように思える。

鳥獣戯画　京都の高山寺に伝わる四巻ものの絵巻。平安末期から鎌倉初期に鳥羽僧正によって描かれたとされる。内容や画風から全巻が同一の人物によるものとは、されていない。甲巻には動物たちが擬人化されて描かれており、中でも蛙と兎が相撲をとる姿は有名で、賢治は子どもたちが相撲を取る様子を鳥獣戯画にたとえたのだろう。島田（後掲）は、仏教との関り、ことに五月女晴恵の博士論文「「鳥獣人物戯画」甲・乙巻の研究」（東北大学 平成十六年三月）から、法華経信仰と関わる可能性について指摘する。

評釈

無罫詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（タイトルは「境」。藍インクで右端に①、また右肩にも赤インクによる①がある）、黄罫（22 0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡の二種が現存。

下書稿㈠の初期形態は次のとおり。

大なる枝垂の栗の木の下にて
鳥獣戯画のかたちして
相撲をとれる子らのあり

日雲に入れば
稲田にはかにあはたゞし

こゞれる松の森の下
石の鳥居のその前を
砂塵おぼろにうちひきて
青竹いろのトラック走る

三連を一連に、二連はそのまま、一連を三連にするという指示が書かれているが、二連は削除して、田園風景が舞台から消し、一部の詩句を修正して下書稿㈡に改変している。

島田隆輔（後掲）は、「鳥居」を花巻市高木にある高木岡神社ではないかとし、賢治が神社の位置する旧天王（キーデンノー等と呼ばれる）を「経埋ムベキ山」の筆頭に挙げていること、境内には「法華経一字一石塔」もあり、また先住民族が住んでいたらしいことなどから「県道の向こうにある鳥居からは、先住民族がかつて生活していた久田野で、そこは縄文時代以来の厖大な時間が堆積している非日常の空間であり、いわば聖なる時空間だというのではないか。すると、その県道上にトラックが走るのは生きた人間の経済活動であるから、そこからこっちが人域で、日常の、世俗的な空間ということになろうか」とする。

ただ「鳥居の下の県道を」あるいは「石の鳥居のその前を」とあるのに、「県道／国道２８３号線から南方向に３００㍍あまりも離れたところに位置」している高木岡神社をモデルとするのは無理があるように思う。「下」という言葉の解釈にもよるのだろうが、せめて神社とトラックが同時に見えるような場所でないと、こうした詩にはなっていかないのではないだろうか。もちろん虚構化されている可能性もあろうし、複数の場所が複合された場合も考えられるので、モデル地は、あくまでも解釈の際のヒントとしてのみとらえておくことにしたい。

ところで下書稿㈠には「境」というタイトルがあったが、これについてはどう考えるべきだろうか。

島田（後掲）も「境」とタイトルがあったことを重視し、「県道を「境」として、彼岸と此岸とに分けられている」とするが、たしかにそう言えると思う。ただ、県道が彼岸と此岸という二つの場所の「境」にあったというだけでなく、そこをトラックに駆け抜けさせたのは、過去と未来という二つの時間の「境」も意識していたからではないかと思う。

岩手県内での道路整備は大正後年には整い始めており、島田は『昭和五年国勢調査岩手県』の産業別人口をあげて、自動車運輸業者が岩手県総数で六三八人いたうち、盛岡市が一一四人、郡部では五二四人であったことを示している。ただ、島田は「「トラック」の登場は、この辺境のそれでも近代化されつつある一端をのぞかせていよう。けれども、それは疾駆してただ村人たちの前をとおりすぎてゆく存在として、ここではとらえられているようにみえる。短絡して言えば、近代化というものが、この風土に根

をおろすところまできていない、この人域の現状が露わになるのである」とする。

語注にも書いたように、たしかにトラックの導入は初期費用がかさむだけでなく、当時は寿命も短かったのだというので、岩手の農村に普及するには、まだまだ時間が必要だったと言わざるを得ない。しかし、聖なる空間が俗に侵食されていったように、近代は良くも悪くも辺境にもやってくる。今は聖なる空間で、鳥獣戯画の時代と同じように相撲を取っていた子どもたちも、やがてトラックを運転し、俗なる空間を駆け抜けていくことも予想されていたはずだ。

今日的な視点からすれば、聖なる環境に俗が入り込んで道路網が拡充され、トラックが走り回るようになることを環境破壊だとして否定的に取る場合も多いかもしれない。しかし、自分の手や足を使って行っていた伝統的農業から、機械を使い、トラックに乗り、化学肥料をも使うという近代的農業への変化は、農村への技術指導を行っていた賢治は、どれだけ望んでいたのかは、考えておく必要があるだろう。

ただ、本作を読んで、トラックを礼賛し、科学技術万能の時代を待望しているように思えないのは、「鳥居の下の県道を／砂塵おぼろにあとひきて／青竹いろのトラック過ぐる」という景観に一抹の寂しさが感じられるからではないかと思う。

賢治は鉄道網や道路網の拡充、トラックの利便性が人々に幸福をもたらすだろうこと、そして機械の普及や科学技術の応用が農村の生活を安定させることを信じて疑っていなかっただろう。

しかし「科学に威嚇されたる信仰」（思索メモ１）と書き、「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い」（「農民芸術概論綱要」）とも書き、また「信仰と科学とのいづれによって行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです」（小笠原露宛書簡下書㈣ 昭和四年）と書いた賢治にとって聖なる場所が侵食され、科学に置換されていく様子を一〇〇パーセントに喜んでいたわけではないだろう。そう考えれば「境」とは、単にそれを跳び越せばよい存在だというわけではなく、その前で留まるべき存在でもあるとして、両義的にこの語を使っていたようにも思えるのである。

先行研究

島田隆輔「県道」（『《文語詩稿》未定稿の研究／無罫用紙詩群篇・訳注（稿） 遺稿２・４番」〔未発表〕 平成二十九年六月）

87 「かくまでに」

かくまでに
心をいたましむるは
薄明穹の黒き血痕
新らしき
見習士官の肩章をつけ
なが恋敵笑ひ過ぐるを

大意

これほどまでに
心を傷つけさせるのは
夕空の黒い血痕とも言うべき
新しい
見習士官の肩章を付けて
自分の恋敵が笑いながら歩いて行くことである

モチーフ

下書稿は「「東京」ノート」に書かれているが、位置からすれば大正十年の夏、盛岡高等農林学校時代の友人・保阪嘉内と東京で会ったとされる時期と重なるが、保阪はまさに見習士官であった。ただ、保阪が「恋敵」であったと言い得る事実は見つかっていないことから、「恋敵」は比喩として捉えるか、また保阪以外の人物をモデルとして捉えるべきであろう。あるいは、その両方であった可能性についても考えてよいかもしれない。トルストイに『コサック』という小説があり、日本でも早くから紹介されていたが、状況に似たところがあることから、関連があった可能性についても考えておくべきだろう。

語注

薄明穹　『定本語彙辞典』には「薄明の夜空。賢治の好んだ語の一」とある。

見習士官　『日本国語大辞典』によれば「旧陸軍で、士官学校・航空士官学校・予備士官学校を卒業した者が少尉に任官する前、曹長の階級で、本務に必要な勤務を習得する期間の職名」。肩章については「金線一本に星三つの肩章（のちに襟章となる）は曹長（下士官）と同じで、襟に見習士官だけがつける襟章（座金）を階級章とは別につけていた」とのこと。また、一年志願兵という制度があり、士官学校の卒業生でなくても、「徴兵令に基づいて、旧日本陸軍の兵役に服する者のうち、当時の

中等学校以上の卒業の資格を有し、陸軍の予備・後備の将校となることを志願し特定の試験に合格して、服役中の諸費を支弁し、一年間現役に服する者。また、その制度」があった。本作のモデルは賢治の盛岡高等農林学校時代の友人である保阪嘉内だとされることが多い。保阪は盛岡高等農学校を除籍処分となるが、中学校を卒業しているためにこの制度を使うことができた。賢治は書簡で保阪のことを「一年志願兵」「保阪志願兵」「見習士官」と呼んでいる。『定本語彙辞典』には「各学校に軍から派遣されていた配属将校の「将校適任」のお墨つきをもらった者に限り（操行不良者はもらえなかった。退学処分になった保阪嘉内が志願兵になれたのは中学で「将校適任」をもらったいたからにちがいない）」とある。

評釈

「「東京」ノート」の四九頁に書かれた下書稿㈠、黄罫（22　0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（右肩に藍インクでⓉ）の二種が現存。内容はほとんど変化がない。

下書稿㈠は「「東京」ノート」の「一九二一年一月より八月に至るうち」の項に収められている。ここに書かれた詩篇は大正十年の家出上京の際のもので、杉浦静（後掲）が書いているように、ほぼ時系列の順に並んでいると思われるが、直前に書かれた「日過ぎ来し雲の原は／さびしく掃き浄められたり」は、文語詩未定稿「叔母枕頭」に改められ、そこに「七月はさやに来れど」とあることから、大正十年の七月から八月までに書かれたものだということになる。

大正十年七月三日に、賢治は保阪嘉内に宛てた書簡で「あなたの貴重な日曜日を私の所へお潰しになってはあまりお気の毒です。見習士官なら外泊でせう」と、荏原郡目黒町（現・目黒区大橋）にあった近衛輜重兵大隊に書き送っていることから、本作と保阪に関係がありそうである。

この時、賢治と保阪が会ったのかどうかはわかっていない。ただ、保阪の日記には次にようにあったという。

七月十八日　晴
宮沢賢治
面会来

保阪庸夫・小沢俊郎の『宮沢賢治　友への手紙』（筑摩書房　昭和四十三年六月）には、この斜線の意味を「予定だったが来なかった、来たが会えなかった、会ったが心に期待していた「面会」とは背いた気持だった、などと考え

られるが、その中の第三の意味にとれないだろうか」としている。保阪宛の賢治書簡に「既に先日言へば言ふ程間違って御互に考へました」等とあったためだというのだが、この書簡は現在『新校本全集』などでは大正七年のものとして扱われている。大正十年のものだとされていたのは保阪庸夫が「あの本に山場を作りたかったから」だとのことであり、あまり信用はできない（栗原敦「「時期推定書簡在疑」（『新校本宮沢賢治全集』書簡集編集作業から）のうち」『宮沢賢治探究 上』蒼丘書林 令和三年七月）。

ただ、これをもって賢治と嘉内が訣別したということにはならないとしても、二人の面会が嘉内にとって不本意なものだったという可能性は十分にある。なにがしかの対立が生まれ、それが見習士官であった嘉内を「恋敵」として書いた可能性も考えられるからだ。しかし、それが嘉内と賢治が実際の恋のライバルであった可能性はあまりないように思う。

賢治は嘉内に「盛岡以来アナタハ女デヒドク苦シンデヰラレタデセウ」（大正九年七月二十二日）と書いているが、盛岡高等農林学校の「アザリア」の同人だった小菅健吉（「小菅健吉と「アザリア」の仲間」『氏家町史 史料編 近代の文化人』さくら市 平成二十三年三月）が、アメリカの留学先から保阪に向かって「公娼がないのだから一寸困る、やっパリ女がゐないと淋しいからなあ、公娼ぢあなくってもさ、Sでもウエトレスでも高いので困る上ニ要領を得させぬからなあ」（大正八年四月）と書き、また同年十月にも「なんダか女が恋しい様な気がする、何しろ日本と異って、女ニ接する折がないからだ、白婦人はゐてもSなどハゐないから、とニ角仏様の様な禁欲生活をせねばならぬから」と書いていることを思うと、小菅や嘉内にとっての「女」とは、娼妓などを指す場合が多かったようで、女性観や売買春について、賢治とはあまり話が合わなかったように思われるからだ。もしかしたら、こうした「たはれめ」を生んだ社会状況に批判的であった賢治が嘉内と議論したことがあったのかもしれないが、当時の通念としては男性が女性を「買う」のは普通のことだとされていたことを思えば、その可能性は低い。

「恋敵」を比喩であったとすれば、大正十年一月二十日に賢治は嘉内に向かって「大聖人御門下といふ事になって下さい」、また同年二月十八日にも「至心に願ひ上げます どうか世界の光栄天業民報（信時注・国柱会の機関紙）をばご覧下さい」と書き送って講読を呼び掛けているが、嘉内が国柱会に関心を持つことはなく、賢治がそうしたことを不本意に思って「敵」と呼んだのかもしれない。

ただ、見習士官を嘉内だと断定してしまうのも問題がないことはない。後には弟の清六も見習士官となるし、賢治の周りにはこうした肩書の人も決して少なくはなかったように思われるからだ。

ともあれ、今のところは東京での経験を踏まえたもので、保阪嘉内の可能性がある、という以外に言い得ることはないように思う。

ところで、賢治も読んでいたことが知られるロシアの文豪トルストイには、自伝的な小説『コサック』（一八六三（文久二）年）があり、ここには「黒い血痕」「見習士官」「恋敵」を思わせるものが登場する。「コサック」という語も、賢治は「〔一七一〕〔いま来た角に〕一九二四、四、一九、」の下書稿で使っていることから、検討の必要はあるように思われる。

ちなみにコサックとは民族集団の名前ではなく、ウクライナやロシアなどで活躍した騎馬に巧みな戦士集団のことで、辺境警備や領土拡張に駆り出され、日露戦争や第一次大戦にも参加しており、日本でもよく知られていたようである。

トルストイの『コサック』を初めて翻訳したのは田山花袋で、明治三十七年十一月の『哥薩克兵』（博文館）である。中村白葉（『トルストイ全集3』河出書房新社 昭和四十八年三月）によれば、『コザック』は、ロマン・ローランによってトルストイの青春の歌とたたえられ、ツルゲーネフによって、「かつてロシヤ語で書かれたもっとも美しい物語」と呼ばれている」とのことであり、花袋も「私の最初の翻訳」（『東京の三十年』博文館 大正六年六月）で、「拙いヒイド翻訳」としながらも、「夥しく感動させられ」、「ラスコニコオフの心理描写よりも却つて此方の方が好いやうに私には思はれた」と書いており、当時の日本の青年たちにも広く知られ、愛された作品であったようで、賢治が読んでいた可能性も高そうだ。

ロシアの貴族社会での生活に倦み疲れていたオレーニンは、新しい生活を始めようとコーカサスに士官候補生（英文ではcadet）として向かう。コーカサスの大自然の中で知り合ったエローシカ爺さんと猟やワインを通じて馴染んでいくが、その一方で美人との誉れが高いマリアンカに、婚約者であるコサック兵・ルカーシカがいることを知りながらも恋心を抱く。ルカーシカはチェチェン人との闘いで銃弾を受けて血まみれになるが、その現場に立ち会っていたオレーニンは村に戻るとマリアンカに突然求婚する。しかしマリアンカは拒否。この地を去ることになったオレーニンは、マリアンカとの別れの後、ふと後方を振り返ってみると、エローシカ爺さんと話をしているのが目に入り、

もう自分のことなど忘れていたようだった、と感じたところで小説は終わっている。

花袋訳では見習士官や士官候補生といった語を見つけることはできなかったが、「恋敵」や「黒い血痕」にあたるエピソードが登場していることから考えれば、関係性は高いのではないかと思う。

ただ文語詩にあるように「見習士官」が「恋敵（＝ルカーシカ？）」の前を「笑ひ過ぐる」といったことは書かれていない。あるいは瀕死の重傷を負ったルカーシカをよそにマリアンカに求婚する行為を「笑ひ過ぐる」に匹敵する行為だとして書いた、ということなのかもしれない。

しかし、もしトルストイの『コサック』がモチーフになった作品であったとしても、「「東京」ノート」に、なぜ書かれていたのかは分からない。賢治が上野の図書館あたりで日本語訳か英訳の本を読んだか、あるいは東京で「コサック」が上演されていたといったこともあったかもしれない。英語版の wikipedia によれば一九二八（昭和三）年に映画化されたとのことだが、家出上京中の大正十年にこれを見ることはできないわけであり、残念ながら『コサック』説を決定打であると言い得るだけの根拠は見つかっていない。

先行研究

恩田逸夫「宮沢賢治における大正十年の出郷と帰宅 イーハトヴ童話成立に関する通説への検討を中心に」（『宮沢賢治論1』東京書籍 昭和五十六年十月）
沢口たまみ「賢治をめぐる女性たち」（『宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニティー 平成二十二年四月）
杉浦静「「東京」ノート」の「公衆食堂（須田町）」（『宮沢賢治 生成・転化する心象スケッチ』文化資源社 令和五年十月）

88 隼人

あかりつぎつぎ飛び行けば
赭ら顔黒装束のその若者
こゝろもそらに席に帰れり

街覆ふ膠朧光や
夜の穹窿を見入りつゝ
若者なみだうちながしたり

大森をすぎてその若者ひそやかに

写真をいだし見まもりにけり

げに一夜
写真をながめ泪ながし
駅々の灯を迎へ送りぬ

山山に白雲かゝり夜はあけて
若者やゝに面をあげ
田原の坂の地形を説けり

赭ら顔黒装束のその隼人
歯磨などをかけそむる

大意

車窓に街の灯りがつぎつぎに飛んでいくと
赤ら顔で黒装束の若者が
心もここにあらずの状態で席に戻って来た

街を覆ったコロイド状の光や
夜空を見入っては
若者は涙を流すのであった

大森を過ぎるとその若者はひそかに
写真を取り出して見守るのだった

まことに一晩中
写真を眺めながら涙を流し
車窓には駅の灯が映っては消えていく

山々に白雲がかかって夜が明けると
若者は次第に顔をあげて
田原坂の地形を説明した

赤ら顔で黒づくめの衣装を着たその薩摩隼人は
歯磨きなどをしはじめた

モチーフ

父・政次郎と関西への旅に出た際、乗り合わせた鹿児島出身の若者の行動をスケッチしたもの。黒装束を葬儀に参列するための服装であったとすれば、西南戦争にも関わりのあった祖父の葬儀のために帰郷する若者を描いていたのかもしれない。大正時代になっても西南戦争の激戦地・田原坂にこだわる士族意識に、岩手県平民の賢治としては、驚かされるところもあったかもしれない。若者に対する悪意

を抱いていたというより、エキゾティシズムを描こうとしていたように感じられる。

語注

隼人　古代の南九州で大和朝廷に長く服属せず、しばしば反乱も起こしたとされる人々。『世界大百科事典』には「日本の古代国家が中国の中華思想に倣い、東北部に居住する蝦夷（えみし）と、西南部に住む隼人を、東夷、北狄、南蛮、西戎に擬定した政治的意図による面も見落としてはなるまい」とあるように差別的な扱いを受けていた。『日本国語大辞典』では「薩摩隼人」の説明として、「（上代、薩摩地方に住んで勇猛、敏捷で知られた隼人一族に擬して）薩摩国の武士をいう。また、近代では、一般に鹿児島県出身の若者にいう場合もある」とする。ここでは鹿児島県出身と思われる若者のことを指す。

黒装束　「賢治研究140」（宮沢賢治研究会 令和二年三月）の「読書会リポート」では、「「黒装束」はお坊さん、喪服、単に黒い服を着ていたのか。「赭ら顔」なのは酔っていたから」とあり、「賢治研究149」（宮沢賢治研究会 令和五年三月）の「読書会リポート」では「「黒装束」の若者は、マントをはおった学生であろうか」とされている。『日本国語大辞典』では「黒色の装い。黒色の衣服を身にまとうこと。また、その人。闇に紛れやすいところから、多く盗人、忍者などの衣装として象徴される。黒支度。黒仕立」とあり、『デジタル大辞泉』には「頭から足元まで、黒い衣服を着けていること。また、その人。黒支度」とある。どこか忍者のような存在が思い浮かぶが、東京から鹿児島に向かう夜汽車で、写真を見ながら若者が一晩中涙を流し続けたのだとすれば、故郷の鹿児島に、近親者の葬式に列席するために黒い喪服を着た青年がいた、ということなのではないかと思う。ただ、セレモニーコラム編集部（「知っておきたい葬儀の知識」https://www.sougi.info/column/column_076）によれば、日本では白い喪服を着るのが一般的だったが、「白い喪服の伝統が変わり始めたきっかけが明治維新でした。／1878（明治11）年に、「維新の三傑」の1人で、現代でいうところの首相にあたる、初代内務卿を務めた大久保利通が暗殺されます。その大久保利通のご葬儀は、多くの諸外国の国賓から注目されました。それを考慮した政府から、「会葬者は喪服を黒で統一するように」とのお達しがありました。／また、1897（明治30）年の皇室のご葬儀に列席した欧米諸国の賓客たちが、ヨーロッパ王室式の黒い喪服を揃って着

用していたのを見た政府首脳部は、日本人の会葬者にも黒い喪服をしつらえさせました。／これらをきっかけとして、上流階級の人々の間で、黒を国際標準の喪服の色として認識する気風が広まり、1915（大正４）年の皇室令により、宮中参内の喪服は、帯締め・帯揚げ・足袋は白で、それ以外は黒を着用することが正式に定められました」。「しかし、この時点ではまだまだ庶民には、黒の喪服は縁遠いもの」であり、「第二次世界大戦によって日本中に戦死者が急増し、貸衣装屋で喪服を借りる人も急増しますが、借りる頻度が増えたことで白い喪服は汚れが目立ち、直ぐに使い物にならなくなってしまいました。そこで、貸衣装屋は、汚れが目立たず手入れのしやすい黒の喪服を揃えるようになりました。その後、手入れのしやすさや喪服を黒に統一している欧米諸国の影響もあり、急速に黒い喪服が庶民にも広まっていきました」とのこと。「黒装束」という言葉は、今日ならば「黒い喪服を着た若者」と言えるところが、まだ大正年間には黒い喪服が一般的ではなかったために、こうした言葉になったのかもしれない。また、西南戦争の際、官軍側の軍服は上下ともに黒で、「黒装束」と言ってもよさそうな出で立ちだったが、状況からして「若者」が官軍と同じ軍服のようなものを着ていたとは考えにくい。もっとも西郷隆盛の下野とともに鹿児島に戻った士族たちも、政府と同じ黒い軍服を着ていた者もあったようで、この人たちに肖ろうとして黒装束の軍服を着たということもあったのかもしれない。

田原の坂　読み方は「たばるのさか」。『日本大百科全書』によれば「熊本県北部、熊本市北区植木町豊岡の田原地区にある三池往還の坂道。玉名平野に連なる木葉（このは）川流域の低地から、いわゆる肥後台地の西端に上る途中にある一の坂、二の坂、三の坂の総称。侵食谷であるため、標高のわりには曲折した急崖が随所にみられ、西南戦争（1877）では、この地形的特徴から官軍・薩軍入り乱れての白兵戦の舞台となった。激戦地跡は一部、田原坂公園として整備され、田原坂資料館、弾痕の家のほか、社会福祉会館、サイクリング・ハイキングロードなども設けられ、地域社会のカルチャーセンター的性格も担っている」とのこと。西南戦争は明治十年一月に鹿児島県の私学校派の士族たちが西郷隆盛を擁して起こした反乱。明治政府の様々な改革に対する士族の経済的・精神的な不満から起こったものだが、反乱軍である薩軍の勢力は三万、対する官軍は五万八千と圧倒しており、明治十年九月二十四日鹿児島市の城山が陥落し、西郷らが自刃して終結した。大正十年に「若者」と呼ばれるよ

うな存在は、もちろん西南戦争の時代には生まれていない。賢治の父の政次郎も、当時はまだ三歳でしかない。田原坂での戦いの経験をしたのは「若者」の祖父の時代だろう。しかし、その時代に写真を一般人が撮ることは極めて稀であっただろうことから、西南戦争の生き残りの祖父の写真（若者の着ていた「黒装束」が喪服であったのだとすると、この祖父が死去したために帰郷したのかもしれない）だったのではないかと思われる。

評釈

「歌稿〔B〕」に収められた短歌802～804を発展させて文語詩化したもの。黄罫（22 0行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「隼人」。右肩に藍インクで㋐）が一種現存。

まず短歌からあげておきたい。

802　赭ら顔、黒装束のそのわかものいそぎて席に帰り来しかな。

803　コロイドの光の上に張り亘る夜の穹窿をあかず見入るも。

804　品川をすぎてその若ものひそやかに写真などをとりいだしたるかも。

これらの短歌は「歌稿〔B〕」の「大正十年四月」の項に収められたもの。家出上京中に父・政次郎が賢治を訪ね、一緒に関西に出かけることになった際に作られたのだろう。また「夜はあけて山々に白雲かゝり／さつま隼人」との書き込みもあった。

「歌稿〔B〕」には「801　父とふたりいそぎて伊勢に詣るなり、雨と呼ばれしその前のよる。」も併せた四首が並べられて、「旅中草稿」とタイトルのようなものが付され、いずれも三文字下げて書かれている。これよりも前には「伊勢」「比叡」「法隆寺」「奈良公園」などが収められていることもあって、『新校本全集』の年譜にも「第六日、車中に赭ら顔、黒装束の若者を見る」とあり、小倉豊文（後掲）も大角修（後掲A、B）も関西からの帰路で詠まれたと認識しているようだ。しかし杉浦静（後掲）が「東京を離れる汽車の中の属目を歌った」と書くように、関西への往路で詠まれた短歌であろう。804で品川（文語詩では大森に書き換えられているが、どちらも東海道本線の駅名で品川駅は現在の港区にあり大森駅は現在の大田区にある）とあり、803には「夜の穹窿」とあることを考えれば、品川や大森に至る直前は夜であったことになる。愛知県名古屋市にも品川や大森という地名があるようだが、

東海道本線からは離れており、また文語詩に「街覆ふ」とあること、初期形態にある「汽車天竜をすぐるころ」についても説明が付けられないことなどからも、東京を発して東海道を西に進む夜行列車だとすべきだろう。歌稿に記されている順序と実際の時間の経過が一致するということは大前提だが、801からは三文字下げで書かれ、賢治自身も特別に扱おうとしていた形跡のあることから、関西旅行の歌をまとめ終わった段階での拾遺的な位置にあるのだろう。

さて、賢治が政次郎と旅に出たのは大正十年四月初旬（特定できていない）。『新校本全集』によれば二人が乗った列車は列車番号一一（東京発神戸行急行・二十時発）、一二（東京発糸崎行急行・二十時二十分発）、一三（東京発神戸行急行・二十一時発）ではないかという。初期形態に「山山に白雲かゝり夜は明けて／汽車天竜をすぐるころ」とあったが、大正十年四月の静岡県の日の出は五時半頃なので、もう少し遅い時間に出発していたようにも思われる。大正十年八月にダイヤ改正されてしまった後の、大正十年八月号の時刻表によれば、大きくダイヤが変わっていないのだとすれば列車番号二三（東京発明石行・二十二時三十発）か列車番号一五（東京発下関行・二十三時発）なら、天竜川を渡った直後の駅である浜松に、前者は五時四十五分、後者は六時四十七分に到着しているので、どちらかだったようにも思う。

一八六八（慶応四・明治元）年五月、薩長新政府に対抗する奥羽越列藩同盟が組織されたが、七月に長岡藩、九月に米沢藩と仙台藩が降伏して列藩同盟は崩壊。続いて会津藩、盛岡藩、庄内藩が降伏すると東北での戦争は終結した。この後、薩摩・長州・土佐・肥前といった西南雄藩の出身者を中心にした明治新体制が確立されるが、その中で「白河以北一山百文」と侮蔑する言説が広まったと言われる（それを逆手にとって仙台に本拠地を置く地方紙は「河北新報」と命名され、また盛岡出身の原敬は「一山」を号としたともいう）。

ただ、西南雄藩の側の鹿児島県も、「南九州諸県や東北諸県は、維新以降はひたすらに衰頽の一途をたどっていった。鹿児島県がもっともよいその一例であり」、「全国下位の低所得、はなはだしい過疎化が、維新運動の先頭に立った鹿児島県への報酬であった」（原口虎雄「斜陽のあゆみ」『鹿児島県の歴史』山川出版社 昭和四十八年十月）とも言われており、近代以降の両県は、東京から遠く離れた地方ということで、案外共通する点も多かったようである。

この列車には賢治と父・政次郎が乗っていたが、小倉豊文（後掲）によれば、「この車中の「黒装束のそのわかもの」が何者であるかわからない。父君に尋ねてみても気がつかなかったといふ。そして「何しろ感のするどい奴でしたから……」といふばかりである」という。政次郎が覚えていなかった可能性もあるし、賢治父子とは少し離れた席にいたので、賢治だけが隼人の言動に気づいていたのかもしれない。晩年の文語詩と違って、短歌にも痕跡があることから虚構であるとは考えにくい。

この「若者」が「隼人」、すなわち鹿児島県人であることを賢治が確信できたのは「田原坂」という西南戦争の激戦地について相手が語っていたからであるが、泣き通した若者が、突然、独り言で身の上を語り始めたという可能性は、まずないだろう。

W・シヴェルブシュ（「仕切った車室」『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局 昭和五十七年）は、フランスの経済学者であったコンスタンチン・ペクールの次の言葉を引用する。「鉄道や汽船で皆で一緒にする旅行と、多数の労働者が工場に集まることが、自由と平等の感情とその習慣づけを異常なほどに促進する。鉄道は、驚くばかりに真に博愛的で社交的な関係樹立のために働き、平等のために、民主主義のアジ演説家の過激な言辞以上のことを果たすであろう。鉄道には、社会のあらゆる階層が集り、相異なる運命、社会的地位、性格、態度、習慣、衣服からなる、いわばモザイクがここで形成されることになるので、上述のすべてが、やがて可能となるだろう。かくして、場所間の距離が縮小するばかりでなく、人間間の隔たりも同程度になくなることだろう」。

夏目漱石の『三四郎』（春陽堂 明治四十二年五月）では、京都から乗車した女が乗り合わせた老人と話を始め、大連に出稼ぎに出た夫から音信も不通となり、仕送りも来なくなったので実家に戻るのだといった事情を話しており、三四郎はそれをしっかりと聞き取っている。その後、三四郎は女と話をすることになり、名古屋では同室で一夜を過ごすことになるのはよく知られているところだろう。

「隼人」の初期段階を見ると、「隣れる老いし商人の／こと問ふまゝに息まきて／田原の坂の地形を説けり」とあるが、まさしく三四郎において女が身の上話を始めたのと同じ状況である。もし、これが事実のとおりであれば、賢治の父が隼人の若者のことを覚えていなくても不思議ではない。老商人に問われるままに若者が身の上話をするのを、賢治は聞き入っていたのであろう。

賢治作品において、同じ客車に乗り合わせた者同士が話を始めるというシーンは頻出しており、たとえば童話「銀

河鉄道の夜」において家庭教師の青年が、旅客たちに向かって船が氷山にぶつかった事故について語り始め、散文「化物丁場」では、賢治と思われる視点人物が鉄道工夫に化物丁場という綽名のある鉄道工事現場について話を聞くシーンが登場する。また、「隼人」のように、賢治が直接に身の上話を聞きだしたのではなく、散文「氷と後光」のように、車中に乗り合わせた若い夫婦の会話を再録したようなものもある。

賢治は鉄道を愛しただけでなく、鉄道を建設する人々、鉄道が見せる景色、そして鉄道によって人々が交流することにも大いなる関心を持ち、それゆえに文語詩だけでも「流氷」、「車中〔一〕」（「五十篇」）、「保線工手」、「コバルト山地。」、「化物丁場」、「〔鶯宿はこの月の夜を雪降るらし〕」、「車中〔二〕」（「一百篇」）などの鉄道にまつわる多くの詩があるが、「隼人」も、まずその一連の鉄道詩の仲間に加えることができそうだ。

ただ、語注にも書いたとおり、西南戦争は明治十年のできごとであり、賢治は生まれていないどころか政次郎もまだ三歳。隼人の「若者」も人伝てに聞いただけの話であろう。ただ「若者」の祖父が出陣した可能性はあり、その時の写真を大事にしていたのかもしれない。また彼は「黒装束」だったと書いてあるが、これも語注に書いたように喪服であったとすれば、西南戦争に従軍した祖父の葬儀に向かう車中のできごとだったのだとすれば辻褄が合う。先祖を大事にする若者は、賢治にも好感を以て受け取られたようで、おそらくそれが「赭ら顔」の純朴そうな青年が、夜通し泣いていたはずなのに、朝になると慎ましく歯磨きをしているといった姿を描くあたりに察することができそうだ。

とは言え岩手県平民の賢治としては、ひどく時代錯誤な感じを持ったかもしれない。先に原口虎雄が『鹿児島県の歴史』で鹿児島の近代を「斜陽のあゆみ」として書いていたことを紹介したが、同書に鹿児島では滑稽なほどに士族意識の優越感が残存していたとあり、鹿児島県の盈進高等尋常小学校で校長を務めた本富安四郎（ほんぶ）「薩摩見聞記」が次のように書いていたことを紹介している。

一体に西南地方は士族の勢力何れも盛んなるが、薩摩は実に其極点にて、公共の事業其大小に係らず悉く士族の掌中に在り、国会議員、県会議員、市会並に村会議員、県庁・郡役所・警察・裁判・登記・山林諸役所の吏員より、高等中学・師範学校の生徒、小学校の教員に至る迄、其九分九厘までは実に士族を以て充たされたり。現

に国会議員七人の内一人の平民もなく、又勿論一人の初めより競争だにせんとしたる者なし。

本富は明治二十二年から二十五年ごろの県会議員について岩手県では士族七に対して平民六十。宮城県では士族八、平民五十六、山形県では士族八、平民二十三と挙げる中で、鹿児島では士族が三十七で平民は三人であったことを示し、鹿児島の封建制を書く。原口によれば「おおまかにいえば、終戦後の〝農地解放〟〝漁業改革〟が鹿児島県における〝明治維新〟であった。昭和初期の経済変動からじょじょに〝鹿児島県封建社会？〟は変わりつつあったが、終戦後の土地改革などでようやく他府県なみになったといえよう」という。

士族が強くなり、明治に入ってからも、それが保ち続けられた理由として「古代ギリシアやローマの共和制も、凱旋兵士の政治的発言権が強まって達成されたといわれるが、戊辰戦争後の薩摩藩でも、門閥家老が握っていた藩政への弊風を打破し、全面的な改革を要求して藩庁へ迫り、下級士族による藩政参加が実現」（原口泉「明治維新と鹿児島県」『鹿児島県の近現代』山川出版社 平成二十七年五月）し、こうした雰囲気が地租改正以後になって士族が寄生地主化する力になり、また士族の反乱である西南戦争にも影響していった、とのことである。

賢治が、こうした事情を詳しく知っていたとは考えにくいにしても、大正時代になっても西南戦争の話をする「若者」の存在が強く印象に残ったのも不思議ではない。ことに、この数日後に花巻川口町の町会議員選挙に出馬した岩手県平民の宮沢政次郎が議員に選ばれることになるが、悪びれずに士族意識を丸出しにした若者に対して複雑な気持ちを抱いた可能性はあるだろう。

東海道本線の車内で出会った薩摩隼人の若者は、賢治にとって是非とも記録に残しておきたいことだったようだが、それは鉄道趣味によるものであっただけでなく、薩摩隼人の不思議な黒装束姿、写真を前に泣く姿、自然すぎる士族意識（エリート意識）等々の、これまで書物でしか知らなかった「薩摩」を目の前で感じたエキゾティシズムこそが、最大の要素だったのではないか、とも思えるのである。

賢治が共感したのか反感を持ったのか、ここからだけでは本音は窺いにくいが、文語詩化は途中で放棄されてしまったのも、本作の取材地が岩手県外だったためだったのかもしれない。

先行研究

小倉豊文「旅に於ける賢治 大正十年の上京と関西旅行」（「四次元16」宮沢賢治友の会 昭和二十六年二月）

大角修A「黒装束の男」（『「宮沢賢治」の誕生』河出書房新社 平成二十二年五月）

杉浦静「宮沢賢治 短篇「電車」考（1） メフィストの〈なり〉」（「大妻国文53」大妻女子大学国文学会 令和四年三月）

大角修B「父とふたりいそぎて伊勢に詣るなり、」（『「評釈」宮沢賢治短歌百選』地人館 令和五年八月）

89 「せなうち痛み息熱く」

せなうち痛み息熱く
待合室をわが得るや
白き羽せし淫れめの
おごりてまなこうちつむり
かなためぐれるベンチには
かって獅子とも虎とも呼ばれ
いま歯を謝せし村長の
頬明き孫の学生（がくしょう）を
侍童のさまに従へて
手袋の手をかさねつゝ
いとつゝましく汽車待てる
外の面俥の往来して
雪もさびしくよごれたる
二月の末のくれちかみ
十貫二十五戔にて
いかんぞ工場立たんなど
そのかみのシャツそのかみの
外套を着て物思ふは
こゝろ形をおしなべて
今日落魄のはてなれや
とは云へなんぞ人人の
なかより来り炉に立てば
遠き海見るさまなして
ひとみやさしくうるめるや
ロイドめがねにはし折りて
丈なすせなの荷をおろし
しばしさびしくつぶやける
その人なにの商人ぞ
はた軍服に剣欠きて
みふゆはややにうら寒き

黄なるりんごの一籠と
布のかばんをたづさえし
この人なにの司ぞや
見よかの美しき淫(たわ)れめの
いまはかなげにめひらける
その瞳くらくよどみつゝ
かすかに肩のもだゆるは
あはれたまゆらひらめきて
朽ちなんいのちかしこにも
われとひとしくうちなやみ
さびしく汽車を待つなるを

大意

背中が痛み息も熱く
駅の待合室に私が入ってみると
白い羽のような服を着た戯れ女が
思いあがっているような風に目をつぶっている
その向こう側に置かれている長椅子には
かつては獅子とも虎とも呼ばれたが
今は歯の抜けた村長が
頬も明るい孫の学生を
小姓ででもあるかのように従えて
手袋をしたままの手を重ねながら
たいへん慎ましく汽車を待っている
部屋の外には人力車が行き来して
雪もさびしげに汚れており
二月も末の夕暮れ近くになると
十貫で二十五銭などで
どうして工場がやっていけるものなのだろうなどと
いつものシャツにいつもの
外套を着ながらものを思うに
心も姿も両方が
今は落ちぶれ果てた末の姿なのだな
とは言ってもどうして人々が
雪の中から出て来て暖炉に立つと
遠くの海をでも見ているような有様で
瞳がやさしく潤んでくるのだろう
ロイド眼鏡をたたんでは
一丈にもなろうかという背中の荷物を降ろして
しばらく寂しいつぶやきをしているのは
何の商人なのだろう
あるいは軍服を着ながら剣をつけていない人は
この厳冬期にはなんとも寒いのではないかと思われる
黄色いリンゴ一籠分と

布製のカバンを携えているのは
この人はどこの役人なのだろうかとも考える
見よ　あの美しい戯れ女は
今はかなげに目を開いたが
その瞳は暗く淀んでおり
かすかに肩を動かしたのは
あぁほんのわずかな時間のみ閃いて
朽ち果てようとする命があそこにもあって
私と同じように悩みながら
さびしく汽車を待っていたのであったのに

モチーフ

精神的にも肉体的にも辛い状況にあった東北砕石工場時代の経験に基づくものと考えられる。駅の待合室で「淫れめ」を見て、「われ」は、その高慢なそぶりをいぶかしく思うが、やがて、それが病気によるものであったことに気づくという内容。ただ、その後の「われ」に何ができたかといえば、言葉を交わすこともせず、結果として他の客と同じく視線の交錯だけで関係が終了している。賢治の心身の衰弱を物語るものかと思うが、昭和的空間における淡白な人間関係を描こうとしていたのかもしれない。

語注

歯を謝せし村長　佐藤隆房（「阿部晁先生という人（2）」『宮沢賢治 素顔のわが友』桜地人館 平成八年三月）には「「かつて獅子とも虎とも呼ばれ、いま歯を謝せし村長の」と賢治さんが詩の中に表現した、その人」として、阿部晁を指すのだとしている。阿部は明治四年生まれの浄土真宗の篤信者で政次郎とも懇意で、大正十三年から昭和九年まで湯口村村長を務めている。栗原敦・杉浦静「阿部晁「家政日記」による宮沢賢治周辺資料」（「宮沢賢治研究Annual 15」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十七年三月）では大正七年から昭和十一年までの十九冊に渉る日記の賢治関係資料が紹介されているが、昭和六年二月前後に賢治との関係を思わせる記述は見出せない。駅の待合室で「村長」と書いていることから賢治の知人であったことが推察できるので、佐藤の書いたとおり阿部晁であった可能性は高い。阿部の息子は岩手県知事となった阿部千一で、賢治と面識があり、盛岡中学校で賢治たちが舎監排斥のストライキを起こした際、ただ一人だけ退学処分となった。賢治の友人だった村井久太郎によれば阿部を復学させるためのストライキを決行し、「その策源地は桐下倶楽部です」として、そこに賢治の名前もあげている（森荘已池「盛岡中

学校を歌った文語詩」「イーハトーヴォ復刊6」宮沢賢治の会 昭和三十年八月）。その阿部千一の子、つまり阿部晁の孫にあたるのが阿部博で、後年、岩手のリンゴ栽培に多大な貢献をしたとのことで顕彰碑まで建てられている人物である。高村光太郎とも交流があり、「阿部のたいしょ」とも詠み込まれたこともあるが、顕彰碑に彫られた略歴によれば大正四年花巻市石神に生まれ、昭和八年三月に花巻農学校を卒業しているという。「頬も明るい孫の学生」とあるが、取材時は東北砕石工場時代の二月、つまり昭和六年二月となるが、花巻農学校の修業年限が三年だったことを考えれば、ちょうど一年生であったことになる。ただ、賢治は大正十五年三月に退職しているので教え子ではない。

俥　人力車のこと。なお、「外の面」は音数から考えて「とのも」、「往来して」は「いききして」と読むのであろう。

なかより来り　列車の「なか」からやって来て炉にあたっているのだとも考えられるが、下書稿㈠には「ストウブの火にあたる若者／なにとて人人／雪のなかより入り来れば」とあったことから、雪の「なか」からやってきて、炉のそばでほっと一息ついているところなのだろう。

ロイドめがね　アメリカの喜劇俳優ハロルド・ロイド（一八九三（明治二十六）年～一九七一（昭和四十六）年）がかけていたことで知られる丸眼鏡のこと。『大辞泉』には「《ロイドが用いていたところから》セルロイド製の円形で縁の太い眼鏡」とある。「はし折りて」は、眼鏡をたたんで、の意かと思われるが「ロイドめがねにはし折りて」はおかしいし、次の行の「丈なすせなの荷をおろし」にどう接続するのかわかりにくい。

評釈

東北砕石工場の辞令を受けた昭和六年二月十七日前後から五月末頃までに使われた「王冠印手帳」の三一～四〇頁までに書かれた下書稿㈠、黄罫（22　0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（右肩に鉛筆でⅠ）の二種が現存。

栗原敦（後掲）は次のように書いている。

はじめ「おごりてまなこうちつむ」れると見た、かの「淫れめ」の姿が、実は病に苦しむさまであったと気づいたその時、心の中で自分の誤解を謝するいとまもなく、一瞬のうちに「われ」は「淫れめ」となり「淫れめ」は「われ」となって、「ひとしくうちなや」む存在として、いわば、「ひとし」き「われ」、〈共なる「わ

れ〉の位置に重なるのである。この日の仕事に疲れはてて待合室にたどりついた自分を、「淫れめ」よりも価値高いものと思う無意識の目のせいで、はじめに彼女を正しく見ることが出来なかった。誤解の訂正は、自らの位置の訂正でもあったはずである。

これは島田隆輔（後掲）にも継続され、ここから文語詩稿全体を展望しようともしているが、「王冠印手帳」に書かれた下書稿㈠では

セキセイ丶ンコわが側に来る
◎あまりにぶくみつめたる
ひるの瞳こそあやしけれ

とあるのみで、「われ」の方にしなだれかかってきた困惑が描かれているようにも読める。下書稿㈡の手入段階になって、ようやく

かの衣青き淫れめも
亜鉛のごとき　して
はかなきさまにめひらくは
おごるにあらず病みたるを
あゝいざみうちと丶のへて
あらたにすべをもとむべき

と書かれるが、「われ」の境遇との比較については、さらなる手入れの段階で、ようやく「われとひとしくなやめるを」が挿入されている。もちろん、だからと言って、これが虚構であったのだと即断するわけにはいかないし、重要ではなかったと言えるわけでもない。ただ初期の段階ではっきりしていなかったものが、推敲を重ねるうちに「淫れめ」の境遇について思い至ったという可能性もないわけではない。

ところで、気になるのは「一百篇」所収の「歯科医院」と本作の設定や語句に近いものがあることだ。

①ま夏は梅の枝青く、　風なき窓を往く蟻や、
碧空（そら）の反射のなかにして、うつつにめぐる鑿ぐるま。

②浄き衣せしたはれめの、　ソーファによりてまどろめる、
はてもしらねば磁気嵐、　かぼそき肩ををののかす。

「歯科医院」で「浄き衣せしたはれめ」がまどろむ姿は、「〔せなうち痛み息熱く〕」における「白き羽せし淫れめの／おごりてまなこうちつむり」に似ており、「歯科医院」の下書稿には「しばし擦じて村長は」という語句もあった。そもそも歯科医院でも駅でも、順番を待つ様子が描かれていること自体に共通性がある。

『新校本全集』において「歯科医院」について先行詩篇の指摘はないが、島田によれば㋐が付された下書稿㈠は昭和六年頃に書かれたものだというので、同じ昭和六年二月に「王冠印手帳」に書かれた「〔せなうち痛み息熱く〕」と、同じアイディアの元にできたものであったとしても不自然ではない。いや、「〔せなうち痛み息熱く〕」の下書稿㈡には㋐が付されているものの未定稿に終わったことを思えば、「王冠印手帳」に書かれた駅舎でのできごとが、複雑な改稿過程を経て「歯科医院」に編成されたのだとすることもできるかもしれない。

『一百篇評釈』では、「歯科医院」における「たはれめ」について、「たしかに下書稿㈠の段階から登場しているが（厳密に言えば、下書稿㈠の手入れ段階から）、下書稿㈡の手入れ段階では「たはれめ」が登場せず、「今日は非番の機関手の／ソーファによりてまどろめる」に改められる段階があった」とし、「さまざまな立場の人間が「歯科医院」に集まることを描こうとしていた、ということにならないだろうか」とした。

逆に「〔せなうち痛み息熱く〕」の方では「歯科医院」とは違って、さまざまな人間が駅の待合室に集まっていることを描いているのは確かであるにしても、あくまでそれは背景で、「われ」が「淫れめ」を描こうとしていることは明白である。

さまざまな人が集まるところとして、賢治は列車内を舞台に多くの作品を書いたことは、何度も論じてきたところで、「隼人」（「未定稿」）についても、列車内で西南戦争における田原坂の戦いについて語る青年が登場し、W・シヴェルブシュ（「仕切った車室」『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局 昭和五十七年）におけるフランスの経済学者コンスタンチン・ペクールの「鉄道は、驚くばかりに真に博愛的で社交的な関係樹立のために働き、平等のために、民主主義のアジ演説家の過激な言辞以上のことを果たすであろう。鉄道には、社会のあらゆる階層が集り、相異なる運命、社会的地位、性格、態度、習慣、衣服からなる、いわばモザイクがここで形成されることになるので、上述のすべてが、やがて可能となるだろう。かくして、場所間の距離が縮小するばかりでなく、人間間の隔たりも同程度になくなることだろう」といった言葉を引き、夏目漱石の『三

四郎』をはじめ、賢治の長編「銀河鉄道の夜」や散文「化物丁場」など、列車内で見知らぬ者同士が会話を始める作品が少なくないことに言及した。

ただ、賢治は待合室で、顔見知りの村長にも声をかけたそぶりがないし、「淫れめ」が「われとひとしくなやめるを」という事実を発見できても、共有しようとはしていない。「いかんぞ工場立たんなど／そのかみのシャツそのかみの／外套を着て物思ふは／こゝろ形をおしなべて／今日落魄のはてなれや」と、身も心も病み疲れていたために、もはやその気力もなかったということなのだろうか。

もちろん宮沢家の長男で元農学校教師であった賢治が、一目で「淫れめ」だとわかる女性に話しかけるわけにもいかなかったとは思うが、柳田国男は、「世間を見る眼」（『明治大正史 世相篇』朝日新聞社 昭和六年一月）で、大正八年からアメリカに渡って俳優となり、昭和四年に帰国した上山草人が「久しぶりに日本へ戻つた時、何だか東京人の眼が大へんに怖くなつて居ると謂つた」と書いている。昭和になって岩手でも交通機関が発達して利便性が高まり、乗客も多くなってきたが、そのために会話を交わすことが少なくなり、視線だけを交わすことが増えてきた、ということなのかもしれない。

拙論「鉄道ファン・宮沢賢治 再説」（「宮沢賢治研究 Annual 32」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 令和四年三月）で、「昭和初年になって「我田引鉄」の側面がいっそう目立ってきた頃には、賢治の鉄道に対する意識も変わっているようで、「文語詩稿 五十篇」の冒頭にある「〔いたつきてゆめみなやみし〕」では、「その線の工事了りて、あるものはみちにさらばひ、／あるものは火をはなつてふ、かくてまた冬はきたりぬ、」と鉄道路線の工事が終わると朝鮮人労働者たちは仕事にあぶれ、行き場を失った者の中には、やけになって放火事件を起こす者もあったと書いている」とした。もしかしたら賢治自身の鉄道観の変化、昭和の待合室らしい風景というものを描こうとしていたのかもしれない。

先行研究

草野心平「賢治文学の一つの背景」（『近代文学鑑賞講座 16 高村光太郎・宮沢賢治』角川書店 昭和三十四年六月）
栗原敦「うられしをみなごのうた」（『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月）
佐藤通雅「二冊の手帖」（『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』洋々社平成十二年二月）

伊藤良治「東北砕石工場技師宮沢賢治」（「かがやく宇宙の微塵」宮沢賢治学会イーハトーブセンター地方セミナーin岩手・東山記念実行委員会 平成十五年十月）
島田隆輔「〈歌ひめ〉の詩系譜を読む」（『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月）
小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月）
信時哲郎「25 歯科医院」（『宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈』和泉書院 平成三十一年二月）

90 「ひとひははかなく ことばをくだし」

ひとひははかなくことばをくだし
ゆふべはいづちの組合にても
一車を送らんすべなどおもふ
さこそはこゝろのうらぶれぬると
たそがれさびしく車窓によれば
外の面は磐井の沖積層を
草火のけぶりぞ青みてながる

屈撓余りに大なるときは
挫折の域にも至りぬべきを
いままた怪しくせなうち熱り
胸さへ痛むはかっての病
ふたゝび来しやとひそかに経れば
芽ばえぬ柳と残りの雪の
なかばはいとしくなかばはかなし

あるひは二列の波ともおぼえ
さらには二列の雲とも見ゆる
山なみへだてしかしこの峡に
なほかもモートルとゞろにひゞき
はがねのもろ歯の石噛むま下
そこにてひとびとあしたのごとく
けじろき石粉をうち浴ぶらんを

あしたはいづこの店にも行きて
一車をすゝめんすべをしおもふ
かはたれはかなく車窓によれば
野の面かしこははや霧なく
雲のみ平らに山地に垂るゝ

大意

一日中へつらったような言葉を発し
夕方になってどこの組合に行っても
一車分の肥料を送る方法はないかと考える
それほどまでに心が落ちぶれたのかと
夕刻に寂しい思いを抱いて車窓に寄りかかると
車窓には磐井の沖積層に
草を焼く火の煙が青く流れている

先方の意を汲みすぎて反り曲げることは度を超すと
折れてしまう域にも至りそうだが
いままた背中に奇妙なほてりを感じ
胸さえが痛いように感じるのはかつて罹った病が
再発したのではないかと恐れながら安静にしていると
まだ芽の出ていない柳や残った雪とが
半ば愛おしく半ば悲しく思われた

あるいは二列の波のようにも見え
さらには二列の雲にも見える
山なみを隔てた彼方にある峡谷では
今もなおなモーターが轟いて音が反響し
鋼製の両側に歯の付いた機械が石を噛み砕く真下に
そこで人々は朝のように
真っ白い石の粉をうち浴びているのだろう

あしたはどこの店に行って
貨車一車分の肥料を推める方法を考えながら
夕刻によわよわしく車窓に体を寄せると
平野の表面の霧はもはや消えて
雲のみが平らに山地に垂れている

モチーフ

東北砕石工場で仕事を始めた頃に「王冠印手帳」に書きつけた詩句から文語詩化が試みられたもの。昭和六年三月二十九日に一関での商談の後、賢治は夕方まで商談で町をまわったようで、当時の時刻表と手帳に残した記録等から行程が推測できる。定稿にならなかったのは自伝的要素を省こうとしたため、そして「〔打ち身の床をいできたり〕」（「五十篇」）や「〔商人ら　やみていぶせきわれをあざみ〕」（「一百篇」）で、すでに類似のテーマについて定稿化を済ませていたからであろう。

語注

ひとひ　田口昭典（後掲）は、「ある日は、先日はとすると意味が通じやすい」とするが、次の行にある「ゆふべ」と対比させるつもりがあったと思われることから、『日本国語大辞典』にあげられていた「いちにちの間。一日中。終日。日一日。」とする方がふさわしいように思う。

ことばをくだし　田口（後掲）は「説明をして」とニュートラルにとらえているが、下書稿㈡には、最初「ひとひを卑しく身をへりくだし」とあり、その「くだし」のニュアンスを考えると、相手の機嫌を取ろうとして媚びへつらった言葉を吐く、といった意味にとるべきかと思う。

磐井の沖積層　岩手県最南端部が磐井であり、平泉町などを含む西磐井郡と東北砕石工場のあった東山村などを含む東磐井郡があった。沖積層とは、「沖積低地を構成する軟弱な砕屑（さいせつ）物の総称。本来の意味は現在の河川活動によって形成された一連の堆積（たいせき）物のことをさす。日本では、最終氷期に刻まれた谷を埋めて現在の地表面までを形成する一連の地層をさし、沿岸湖沼、浅海の堆積物も含む」（『日本大百科全書』）とのこと。『定本語彙辞典』には「主に河流によって運ばれて堆積した砂礫や泥土の層、扇状地、三角州等、その層を「沖積層」、その地帯を「沖積地」と言う」とある。米地（後掲）は、花巻周辺は洪積層からなるために酸性の火山灰土であったが、窓外の西磐井は肥沃な泥土地帯であったため、酸性土壌の改良のために炭酸石灰の販売を売っていた賢治には特別の感慨があっただろう、とする。

草火　田口（後掲）は「山焼きの火、早春まだ草が芽を出す前に、枯草を焼き、家畜の飼料とする草を萌え出させること。野焼き、野火ともいう」とするが、米地（後掲）は「田起こし前の水田に藁を持ち込み、火を放つのである。藁を焼いた灰は肥料となる」とさらに具体化している。『定本語彙辞典』には「火をつけて草を焼く、野や畑の枯れ草を焼いて新芽を促進し、肥料にもする草焼き。あるいは害虫やけものの害を防ぐためにも昔から草を焼いた」とある。下書稿㈡の手入れ段階で「草火」が登場し、「王冠印手帳」には「たそがれさびしく汽車にて行けば／あゝいま北上沖積層を／けむりはほのかに青みてながれ」とあった。初期の段階では汽車の煙が流れていく様子を描くつもりだったのかもしれない。

屈撓　『日本国語大辞典』によれば「しなうように曲がること。力を加え、そり曲がった状態にすること。転じて、屈服すること。服従すること」とある。状況から考

えると、交渉相手の言うに任せて媚びへつらったように振舞うことを指すのだろう。本作の下書稿は「王冠印手帳」の七九～八八頁に書かれていたが、この二行の詩句は見当たらない。「王冠印手帳」の六三・六四頁に書かれ、補遺詩篇Ⅱとして『新校本全集』に収められた「〔そゝり立つ江釣子森の岩頸と〕」に「余りに大なる屈撓性は／無節操とぞそしられぬ」とあるものを使用したのだろう。また補遺詩篇Ⅱの「〔朝は北海道の拓殖博覧会へ送るとて〕」にも「余りに大なる屈たう性は／むしろ脆弱といふべきこと」とあり、これは「孔雀印手帳」（昭和三年に使われ始めたが、しばらく放置され、昭和六年になって再度使用されることになった）に書かれているが、内容から昭和六年七月一日の盛岡での経験を詠んだものだということがわかっている。言葉は少しずつ違っているものの、当時の実感が込められたものなのだろう。

二列の波　次行の「二列の雲」も含めて北上山地の山並みのこと。米地文夫（後掲）は「北上山地はその大部分が、いわゆる準平原の高原的な地域で、平らといってもよいほどに緩やかな山頂をもつ山地であり、そのなかに、いわゆるモナドノック（残丘）がそびえ立つ、という形が一般的である。／北上山地南部も、基本的には、この形態であったと思われるが、東磐井から宮城県北部にかけての山地は、河谷が複雑に入り込んで侵食が進んでおり、高原的な部分はほとんどなく、起伏する低い山並みになっている。また侵食してそそり立つカルスト山地、すなわち石灰岩からなる卓状の低いが急な山地も、溶食をうけながらも残されている」とする。

かしこの峡　賢治は一関での用事を済ませ、東北本線の下り列車の右側（東側）の車窓を眺めているのだろう。二列の波とも雲とも思えた山並の奥の砂鉄川（北上川の支流。さらに上流には名勝として名高い猊鼻渓（げいびけい）がある）の岸に東北砕石工場があった。

モートル　東北砕石工場で使われた機械のモーターのこと。

評釈

「王冠印手帳」の七九～八八頁に書かれていた下書稿㈠、黄罫（22　0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（右肩に藍インクでⓉ）の二種が現存。

「王冠印手帳」は東北砕石工場の辞令を受けた昭和六年二月十七日前後から五月末頃に使われていた手帳。賢治は充実した日を送れると期待していたが、肥料を必要とする農民や、得意先である肥料店の意を汲もうとしながらも、

砕石工場の経費や労働者のことも無視できないという板挟みの状況におかれ「あらたなる／よきみちを得しといふことは／ただあらたなる／なやみの道を得しといふのみ」（「王冠印手帳」四三頁）と書くような状況であった。

下書稿㈠から見ていきたい。

◎あしたはいづこの組合へ
一車を向けんなど思ふ
さこそはこゝろうらぶれたりと
たそがれさびしく汽車にて行けば
あゝいま北上沖積層を
けぶりはほのかに青みてながる
あるひは二列の雲とも見ゆる
山なみ越えたるかしこの下に
なほかもモートルとゞろにめぐり
はがねのもろ歯の石噛むひゞき
ひとびとましろき石粉にまみれ
シャベルを叺をうちうちまもるらんを
あゝげに恥なく生きんはいつぞ
妻なく家なくたゞなるむくろ
生くべくなほかつこの世はけはし
柱は行きすぐたそがるゝ草
野の面はこゝにははや霧なくて
雲のみ平らに山地に垂れぬ

◎卑しくもみをへりくだし
ひとひつかれしとて
夜汽車のなかにまどろめば
せなまた怪しく熱くして
病ふたゝび来しやと思ひ
たそがれて行く川べりの
柳のむらや消えのこる
野の面の雪をなつかしみ見る
そのとき黒ずめる暮のほこ杉
一列をなして窓を過ぎたり

最終形態（下書稿㈡の手入れ形）と比べても、内容にあまり違いはないように感じられるが、最終形態のうちの第二連の前半にあたる部分が、ここには欠落している。この「屈撓余りに大なるときは／挫折の域にも至りぬべきを」については「王冠印手帳」の六三・六四頁にあった「余りに大なる屈撓性は／無節操とぞそしられぬ」が持ちこまれたのであろう。

『新校本全集』の年譜篇の昭和六年三月二十九日の項には「午前中一関へ出、萩荘村の肥料商加賀長商店より四月一〇日迄に三車引受の約をとる」とある。賢治は二十九日に東北砕石工場の鈴木東蔵に宛て封緘葉書を一関から出しているが、消印に「后0‐4」とあるとのことなので、加賀長との商談は午前中に済ませたということのようだ。

「王冠印手帳」の七六頁には左のようなメモがある。

12. 30 ）
3. 00 ）
5 30

沢
泉
関

）前
）平
）一

10 59
1 33
4 15
~~6 37~~

復刻版の『汽車時間表』（日本旅行協会 昭和五年十月）によれば、東北本線の上り時刻表であったとしてほぼ間違いない。左側の数字は花巻発の東北本線上り列車の出発時刻で、十時五十九分、一時三十三分、四時十五分、六時三十七分にあたる（手元にある復刻版では一時三十四分となっており、ここだけが異なる。ただ当時の時刻表では月によって一分～二分の時刻が変更されることは珍しくなかったので、そのためであろう）。六時三十七分が二重線で消されているのは、これではとても一関で一仕事はできないと判断したためだろう。

右側に書かれているのは、おそらく到着予定時刻で、十二時三十分、三時、五時三十分を意味するのだろう。手元の時刻表とは一致しないが、差は最大でも十分ほど。花巻発の時刻と違って、こちらにキリのよい数字が並んでいるのは、おそらく手元に時刻表がなく、記憶していた花巻発の時刻を元にして一関駅への到着時間を予想して書いたのであろう。賢治は何度も砕石工場を訪ねたため、このメモが取材日のためのものであったと限定するわけにはいかないが、一関で加賀長商店で用事を済ませて葉書を書き、正午から四時までの間に郵便局で消印を押されるには、メモにあった十時五十九分発の汽車に乗れば一関着は十二時十八分なので、ギリギリ間に合っただろう。あるいはメモにはないが、花巻駅を八時五十分に発して一関に十時十一分に到着する汽車に乗ったのかもしれない。

帰路については、時刻めいたものが書かれていないが、手帳には「夜汽車」と書かれながら、車窓に「北上沖積層を／けぶりはほのかに青みてながる」とも書かれている。

この両方を成立させるためには、夕暮れ時に乗車したということになりそうだ。Keisan（https://keisan.casio.jp/）のサイトで昭和六年三月二十九日の一関市の日没時刻を算出すると十七時五十五分五十六秒であるとのことなので、五時四十六分に一関を発した汽車だろう。中央気象台月報によれば水沢の十四時の降水量は〇、雲量は二ということなので、ここに記録された通りの景色が見えていたはずである。

ところで『新校本全集』の年譜に、賢治が訪ねた加賀長商店は萩荘村にあったと書いてあるが、「いちのせき市民活動センター」（https://www.center-i.org/）には次のように書かれていた。

加賀家は江戸時代から続く商人一族で、もともとは一関市地主町で古着屋（着物屋）を営んでいました。その後、唐桑町（気仙沼市）からお嫁さんを迎え入れ、浜から直接仕入れた魚を売る鮮魚店を経て、魚の粕が農作物の肥料に適していたことから、明治時代から大正時代に移り変わるころ、当時の店主（現店主の曾祖父）である加賀長吉さんが肥料の専門店として「加賀長商店」を起業しました。昭和47年からは、萩荘地区に移り住み、肥料の他、農薬、各種苗・種、農業備品などを販売しています。

一関市の萩荘地区（一関駅から三キロほど西）に移ったのは昭和になってからだとのことなので、もし、この立場を取るのなら、賢治は一関の街中にあった加賀長商店を訪ねたことになるが、もし萩荘地区を訪ねたのだとすると、もっと早い汽車に乗っていたことになるだろう。

ともあれ賢治は鈴木東蔵に宛て、加賀長商店との商談の結果についての報告の後、次のように書いている。

次に他の肥料店にくは仲買人より注文有之候共目今の肥料店には随分やり操りにて悪手段のみ講ずるもの有之私方にて信用調査書有之候間必ず一応御通知願置候
最后に水沢及川氏前沢附近にて可成高価に卸売致され居り一寸将来困る処あるかと存候間その方の価格等解決迫は暫時御取引御休止願上候。帰花後正式に注文書送上候。
呉々も今回の水沢一ノ関二車は入念に御包装願上候

賢治はつくづくと「屈撓余りに大なるときは／挫折の域にも至りぬべきを」と実感し、「こゝろうらぶれたりと／

たそがれさびしく汽車に」乗ったということのようだが、そのきっかけとなったのは、どうもこの日の、生き馬の目を抜くような商売人たちとのやりとりであったようである。

『新校本全集』の年譜によれば、翌日の三十日も、賢治は一関を経て松川駅前の東北砕石工場に鈴木を訪ねて行ったようだが、三月三十一日の鈴木東蔵への書簡には「昨日はまことに失礼いたしました　お蔭で今朝はすっかり元気を恢復し只今石鳥谷へ出る所です」と書いているので、二十九日に、賢治は心身ともに疲れ果て、翌日になっても鈴木の眼にも明らかなくらいに憔悴し切って現れたようである。そんな状況がすぐに回復するわけもないのに、三十一日には、また石鳥谷まで出かけていたようだ。

ただでさえ体と心とを痛める仕事であったのに、賢治はよりわが身を苦しめるかのように仕事をしていたことがわかるが、そんな文語詩を、賢治は未定稿に留めたままにしたようである。

当初は自伝的なものにするはずだった文語詩が、徐々に自伝的な要素を消し、自己を英雄視するかのような要素を消そうとしていたのは知られるところだが、悲劇のヒーローめいた自己像を書くのをためらう気持ちがあったのかもしれない。

また「五十篇」の「〔打ち身の床をいできたり〕」と、「一百篇」の「〔商人ら　やみていぶせきわれをあざみ〕」は、ともにこの時期の経験に基づく「王冠印手帳」に発する文語詩だが、それらを定稿化したことも、本作をはじめとした砕石工場時代の詩篇を未定稿のままに留めた理由であるようにも思えるのである。

先行研究

小田邦雄「東北砕石工場」（『宮沢賢治の生涯　雨ニモマケズ』酪農学園出版部　昭和二十五年七月）
草野心平「賢治文学の一つの背景」（『近代文学鑑賞講座16　高村光太郎・宮沢賢治』角川書店　昭和三十四年六月）
谷川徹三「もろともにかがやく宇宙の微塵となりて」（『宮沢賢治の世界』講談社　昭和四十五年八月）
中村稔「鑑賞」（『日本の詩歌18　宮沢賢治』中央公論社昭和四十九年十月）
吉見正信「石灰普及への辛酸」（『宮沢賢治の道程』八重岳書房　昭和五十七年二月）
中村稔「「疾中」「文語詩篇」その他」（『宮沢賢治ふたたび』思潮社　平成六年四月）

村井紀「産業資本家宮沢賢治の誕生」（「現代詩手帳39－11」思潮社 平成八年十一月）
宮城一男「基調講演「自然科学者・宮沢賢治」」（「シンポジウム宮沢賢治の中の自然報告書」群馬県立自然史博物館 平成九年十一月）
田口昭典「「ひとひははかなくことばをくだし」」（『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）
佐藤通雅「「山なみ越えたるかしこの下に」「二冊の手帖」」（『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』洋々社 平成十三年二月）
伊藤良治A「東北砕石工場技師宮沢賢治」（「かがやく宇宙の微塵」宮沢賢治学会イーハトーブセンター地方セミナーin岩手・東山記念実行委員会 平成十五年十月）
斎藤文一「高木仁三郎と宮沢賢治 二人の科学者」（『高木仁三郎著作集第9巻 市民科学者として生きる』七つ森書館 平成十六年一月）
伊藤良治B「賢治「王冠印手帳」はこうして作られた」（『宮沢賢治と東北砕石工場の人々』国文社 平成十七年三月）
米地文夫「宮沢賢治の憂愁の詩「ひとひははかなく…」と磐井の景観 「塔建つるもの」セールスエンジニア賢治を想う」（「イーハトヴ自然学研究3」イーハトヴ自然学研究グループ 平成十八年三月）
佐藤通雅「冬季セミナー講演（要旨）」（「賢治と東山」（「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報32 こけも」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十八年三月）
小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月）
中村稔「東北砕石工場」（『宮沢賢治論』青土社 令和元年五月）

91 スタンレー探検隊に対する二人のコンゴー土人の演説

演説者
白人　白人　いづくへ行くや
こゝを溯らば毒の滝
がまは汝を膨らまし
鰐は汝の手を食はん

証明者
ちがひなしちがひなし
がまは汝の舌を抜き
鰐は汝の手を食はん

白人　白人　いづくへ行くや
こゝより奥は　暗の森
藪は汝の足をとり
蕈は汝を腐らさん

ちがひなしちがひなし
藪は汝の足をとり
蕈は汝を腐らさん

白人白人　いづくへ行くや
こゝを昇らば熱の丘
赤は汝をえぼ立たせ
黒は　汝を乾かさん

ちがひなしちがひなし
赤は汝をえぼ立たせ
黒は汝を乾かさん

白人　白人　いづくへ行くや
こゝを過ぐれば　化の原
蛇はまとはん　なんぢのせなか
猫はあそばんなんぢのあたま

ちがひなしちがひなし
蛇はまとはん　なんぢのせなか
猫はあそばんなんぢのあたま

白人　白人いづくへ行くや
原のかなたはアラヴ泥
どどどどどうと押し寄せて
汝らすべて殺されん

ちがひなしちがひなし
どどどどどうと押し寄せて
汝らすべて殺されん

（このときスタンレー〔数文字不明〕こらへかねて
噴き出し土人は叫びて遁げ去る）

大意

演説者
白人よ　白人よ　どこに行くのか
ここを溯っていくと毒の滝があるぞ
ガマガエルはお前を膨らませ
ワニはお前の手に食いつくぞ

証明者
ちがいないちがいない
ガマガエルはお前の舌を抜き
ワニはお前の手に食いつくぞ

白人よ　白人よ　どこに行くのか
ここから奥は　闇の森だ
ヤブはお前の足に絡みつき
キノコはお前を腐らせてしまうぞ

ちがいないちがいない
ヤブはお前の足に絡みつき
キノコはお前を腐らせてしまうぞ

白人白人　どこに行くのか
ここを登っていくと熱い火山になるぞ
赤い溶岩はお前を怖気づかさせ
黒い溶岩は　お前を乾かすぞ

ちがいないちがいない
赤い溶岩はお前を怖気づかさせ
黒い溶岩は　お前を乾かすぞ

白人よ　白人よ　どこに行くのか
ここを過ぎると　化け物だらけの草原だぞ
蛇はお前の背中にまといつくだろうし
ライオンはお前の頭で遊ぼうとするぞ

ちがいないちがいない
蛇はお前の背中にまといつくだろうし
ライオンはお前の頭で遊ぼうとするぞ

白人よ　白人よどこに行くのか
草原の彼方のアラブ砂漠では泥洪水が
どどどどどうと押し寄せてきては
お前たちすべてを殺し尽くしてしまうぞ

ちがいないちがいない
どどどどどうと押し寄せてきては
お前たちすべてを殺し尽くしてしまうぞ

（この時スタンレー探検隊は堪え切れなくなって
噴き出してしまうと土人たちは叫びながら逃げ
去っていった）

モチーフ

探検家ヘンリー・スタンレーの著書『スタンレー探険実記一名闇黒亜弗利加』の中の逸話に基づいて書かれた文語詩。今日の人権意識からは受け入れにくい部分もあるが、賢治としてはアフリカ人のコミュニケーションのユニークさと詩的レトリックの斬新さを取り入れようとしたとも考えられそうだ。

語注

スタンレー探検隊　イギリス出身の探検家ヘンリー・モートン・スタンレーの組織した探検隊のこと。スタンレーは北ウェールズで私生児として生まれ、救貧院で育てられるが、脱走してアメリカに渡って南北戦争に従軍。戦後は新聞記者として活躍し、ナイル川の水源地探検に出たまま消息を絶ったリビングストン捜査のため、一八六九年にアフリカに向かって一八七一年にリビングストンを発見。その時の言葉である「リビングストン博士でいらっしゃいますか？（Dr. Livingstone, I presume?）」は、今日でもよく知られている。一八七四年からインド洋岸からコンゴを経て大西洋岸まで九九九日をかけて横断。三五六人で出発したが生き残ったのは一一四人。欧米人はスタンリーだけであったという。植民地獲得競争に出遅れたベルギーの国王・レオポルト二世は、スタンレーの活躍を知って一八七九年にスタンレーをコンゴに派遣し、コンゴ川左岸の全地域を確保。ベルギーは地歩を固め、コンゴ独立国（コンゴ自由国）を作った。

コンゴー土人　コンゴはアフリカ中西部、コンゴ川流域のコンゴ盆地を中心とする地域で、ここには十四世紀からコンゴ王国が栄えた。ヨーロッパ人がやってくると奴隷貿易の拠点にさせられた。十九世紀になってスタンレーの探検からベルギー王が植民地化に意欲を示すと、一八八四・一八八五年のベルリン会議の結果、フランス、ポルトガル、ベルギーで三分割され、コンゴ王国は一九一四年に滅亡した。現在は旧フランス領がコンゴ共和国、旧ポルトガル領がアンゴラ、旧ベルギー領がコンゴ民主共和国となっている。ここに住んでいた人を賢治は「土

人」と呼んでいるが、『デジタル大辞泉』によれば、「土人」とは「1 その土地で生まれ育った人。土着の人。土地の人。／2 未開地域の原始的な生活をしている住民を侮蔑していった語」とあり、今日の人権意識からは使用しにくい語となっている。

熱の丘　中谷俊雄（後掲）が書いているように火山のことであろう。コンゴ民主共和国の東部にあるニーラゴンゴ山（三四七〇m）やニアムラギラ山（三〇五六m）はともにアフリカを代表する活発な火山で、粘性の低い溶岩が速く流れるために非常に危険な山だという。赤と黒はともに溶岩の色であると考えたい。

化の原　化け物のような動物のいる草原（サバンナ）ということか。コンゴにはアフリカニシキヘビのような巨大な蛇、また多くの毒ヘビも生息している。猫とは、おそらくライオンやヒョウのことを指すのだろう。

アラヴ泥　昭和十五年九月発行の『宮沢賢治全集2』の藤原嘉藤治による「語註」では「不詳」とあり、『定本語彙辞典』には言及がない。中谷（後掲）は「意味不明。賢治の創作か。当時はアフリカの部落を襲って奴隷を狩り集めるアラブ商人が活躍した時代である。悪い事はなんでもアラブという形容詞をつければそれらしくなる。湿地帯、土砂崩れ、涸れ川に突然現れる濁流等、さまざまに想像できる」とするが、「どどどどどうと押し寄せて／汝らすべて殺されん」と書かれていることから洪水の際の泥流とするのがふさわしいかと思われる。近年、中東の砂漠地帯で洪水が頻発し、令和五年九月にはリビアで八千人もの人が亡くなったという洪水が、令和六年四月にはオマーンで鉄砲水、アラブ首長国連邦のドバイでも洪水が発生して大きな被害を出した。これらは近年の気候変動のためだと指摘されるものだが、それ以前にも砂漠は基本的に雨は少ないものの、年に一度ほどは半日で年間降水量と同じになるような大雨が降り、轟音と共に鉄砲水が押し寄せることがあったという。

評釈

黄罫（22 22行）詩稿用紙に書かれた下書稿が一種現存。

「コンゴー土人」というだけで、今日の人権意識からは、なかなか取り上げにくくなった賢治作品の一つである。藤田みどり（後掲）も、「探検といえば聞こえがいいが、探検される側の身になれば不法侵入以外のなにものでもない。この事実に賢治は着目し、ここから先は魑魅魍魎の世界で、一歩踏みいれば死だけが待っていると探検隊に威嚇することで、一刻も早い退散を願うアフリカ人の気持

ちを込めている」と書くように、残念ながら「土人」や「探検」という言葉をためらいなく使っていることからして、賢治が今日的な人権意識を持っていたとは考えにくく、スタンレー探検隊と同じ視線で「コンゴー土人」を笑い飛ばすようなスタンスで書かれているのは間違いない。

種本になったのはスタンレーの訳本である『スタンレー探険実記 一名闇黒亜弗利加 上・下』(矢部新作訳 博文館 明治二十九年一月)だが、浜垣誠司(「スタンレー探検隊とコンゴー人」「宮沢賢治の詩の世界」平成二十七年二月十一日 https://ihatov.cc/blog/)が書くように、『定本語彙辞典』に「Through the Dark Continent (1871)」の訳本だと書いているのは間違いで、「In Darkest Africa or the Quest Rescue and Retreat of Emin Governor of Equatoria (1890)」の訳本であるらしい。また藤田の指摘によれば大正十一年八月十日封切りの「スタンレーの阿弗利加探検」が公開されていたので、賢治はこれを見ていたかもしれない、とする。

『スタンレー探険実記 一名闇黒亜弗利加』の第七章「バンガの滝に向ふ」には、次のようなやり取りがある。

此朝暁方より凡そ三時間前に於て、舎営は土人の怒号と角笛の声とに由て、一同平和の夢を攪破されたり。暫らくにして此声は止めり。時に二人の土人、遙かの高所に在つて余等に對し、演説を始めたり、其声明かに余等の耳に達せり。

第一人は曰く― 外人共、外人共、何処へ行くのだ、何処へ行くのだ。

第二人は之れに応じて―何処へ行くのだ、何処へ行くのだ。

第一人―此國は外人を容れない、外人を容れない。

第二人―容れない、容れない、相違ない。

第一人―一同皆汝等を敵とすべし。

第二人―汝等を敵とすべし、帰れ〳〵。

第一人―汝等は必ず殺さるべし。

第二人―必ず殺さるべし、必ず。

第一人―ア、ア、ア、ア、ア―。

第二人―ア、ア、ア―。

第一人―ウ、ウ、ウ、ウ、ウ―。

第二人―ウ、ウ、ウ、ウ―。

此二人は実に能く調子を揃へて応演せり、此奇妙なる亜弗利加スタイルの演説法は、思はず、余等をして喝采せしめたり。次で諸方より一同に笑声起れり、彼の演説者は此声に驚きけん、匆〳〵に逃げ去りぬ。

このエピソードが、当時どれくらい知られていたのかはわからないが、「発動機船 第二」（「春と修羅 第二集補遺」）にも「スタンレーの探険隊に／丘の上から演説した／二人のコンゴー土人のやう」という詩句が登場するので、少なくとも賢治にはお気に入りのものだったようである。

藤田（後掲）は「おそらく、これが一般的なアフリカ人のスタンレー隊に対する受けとめ方であったといえよう。原著によると、この「演説」を聞いたスタンレー隊はどっと笑っている。数人の従者をつれた白人旅行者ではなく、最新式武器を携えた、探検隊という軍隊が地域に緊張を巻き起こすのは必至である。スタンレーは発明されたばかりの機関銃も持っていた。彼らがいかにスタンレー一行を危険視していたかを汲み取ることが出来る。この一見他愛のない「演説」は政治や外交の存在を示唆しており、彼らが決してスタンレーをはじめとする探検家や宣教師達が報告するような蒙昧野蛮な民ではないことを物語っている」とする。

また藤田はベルギー国王をバックに持つスタンレー探検隊が重装備であったことについて、「彼がリビングストンの遺志をついでナイル河源流調査を行った第二次探検では総勢356人、物資の総量8トン、第四次探検では人数は倍の約700人に膨れあがった。武器としてレミントン・ライフル銃510丁、十万発の弾丸、ウィンチェスター連発銃50丁、5万個の弾薬筒、発明者から進呈されたマキシム機関銃1丁、アフリカ人との交易用として27,262ヤードの布地、3,600ポンド分のビーズ、さらに石鹸やバスタブ等の身の回り品からスタンレー愛用のフォートナム・メイスン社製の紅茶、コーヒー等が用意され、これらの運搬用に驢馬40頭があてられた」と書いている。

人権意識が欠如していることに加え、贈答品はともかくとして、武器をこれほどに持ち込んでいるのは探検というより侵略に近いようにも思われる。後年の歴史を考えても、スタンレー探検隊は植民地獲得のための先兵で、賢治の時代ならば、中谷（後掲）が書くように「文明人が原始的なアフリカ人とぶつかった、ユーモラスな一場面」として捉えることができたかもしれないが、現代の視点から見れば、本作は賢治の汚点であるとさえ思われそうだ。

このあたりに賢治自身の弱さ、時代的な限界を見出すことはできるにしても、また、新しい可能性もあるように思える。

というのは、たとえば「アラヴ泥」が「どどどどどうと押し寄せて」くるという詩句である。スタンレーの著書に、こうした表現はないので、賢治オリジナルのもののよ

うだが、賢治がこうした文語詩を書いている頃、ちょうど童話「風の又三郎」も書いていた。その冒頭には、次のような詞が掲げられている。

どっどど　どどうど　どどうど　どどう
青いくるみも吹きとばせ
すっぱいかりんも吹きとばせ
どっどど　どどうど　どどうど　どどう

類似性は明らかだろう。「コンゴー土人」と又三郎ではイメージが違い過ぎるとも思われそうだが、賢治が昭和元年二月に羅須地人協会の集会で「地人芸術概論」を講じた際の伊藤忠一による「労農詩論三講」には、次のように書かれている。

アフリカ土人の詩
　アー何故彼はハラコをたべたらう
　アー何故彼はハラコをたべたらう
　ハラコ　ハラコ　ハラコ　、、、
　ハラ　、、、　ハラ　、、、　、、、　、、、
――

そして土人は泣いてつぶやきながらとう〳〵眠ってしまつた。（或る探検家は空腹のため禁断のハラコなるも聞かず、たべてしまつた）
　ハラコ（貝類の一種と云ふ）

おそらくこれもスタンレーの著書のどこかに書かれたエピソードなのであろう。出典はまだ探し出せていないが、内容の素朴さとともに、メッセージを二度繰り返すというレトリックも本作に共通する。賢治が講義中に「アフリカ土人の詩」を引用したのは、彼等の詩やコミュニケーション手法を軽蔑する意図でなかったのは確かであろう。というのも、この詩を引用する直前に、伊藤の講義録に次のようにも書き留められていたからだ。

○真の詩とは…人間の魂の記録で有る。
○詩人とは…常に来たるべき文化の先陣に立つものにして、個人によりて理想異るもので有る。
○新時代の詩の特徴…健全でなければいけない。
（希望、勃興の気持、不正に対する反抗、社会的にして生産的で有ること。）

○真の詩…生産の原動力であり、これに拠りて勢力をもりかえし労働を完うする事の出来るものでなければならない。

賢治は、真の詩、真の詩人として、「アフリカ土人の詩」について感銘を受ける点があり、講義で、それを強調したのだろう。

そして、やはり「風の又三郎」に、川べりを歩く専売局の役人だとも思われる男に向かって一郎が子どもたち全員に自分の言葉を復唱させるシーンがある。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶこだ。いいか。
あんまり川を濁すなよ、
いつでも先生云ふでないか。一、二ぃ、三。」
「あんまり川を濁すなよ、
いつでも先生云ふでないか。」

また、川で遊んでいた際に三郎と子どもたちが対立し、そこで雷雨となるシーンでも復唱が登場する。

「雨はざっこざっこ雨三郎、
風はどっこどっこ又三郎」と叫んだものがありました、みんなもすぐ声をそろへて叫びました。
「雨はざっこざっこ雨三郎、
風はどっこどっこ又三郎」

特徴ある登場人物に下級生のペ吉がいるが、人の言った言葉をすぐに繰り返して言うキャラクターである。このやり取りの直後にも登場する。

「いま叫んだのはおまえらだちかい。」とききました。
「そでない、そでない。」みんないっしょに叫びました。ペ吉がまた一人出て来て、「そでない。」と云ひました。

ペ吉は、川べりで魚を捕るシーンでもキャラクター通りの仕事をしている。

「さっぱり魚、浮かばないな。」耕助が叫びました。佐太郎はびくっとしましたけれども、まだ一しんに水を見てゐました。

「魚（さかな）さっぱり浮かばないな。」ぺ吉がまた向ふの木の下で云ひました。

藤田（後掲）は、賢治の「スタンレー探検隊に対する二人のコンゴー土人の演説」について「35行からなる長い詩で、アフリカ人の交渉伝統によく見られる繰り返しと掛合いの手法がうまく取り入れられている」とコメントしているが、賢治はスタンレーの著書から学び、再現しようとしたのは、ただユーモアだけでなく、「アフリカ土人」の詩的レトリックの素朴さと真摯さであり、同じ言葉を繰り返すという方法も、ここから学んだのではないかとも思えるのである。

岩手国民高等学校における農民芸術でも、類似した内容が、受講生であった伊藤清一の講義録から窺うことができる。

詩とは
われわれの魂の内奥から
　ひとりで湧き出るところの
　　節奏あることば、
斯くありたい者（ゐ）のである、
音響も節も調も語も独りでに出て来るのである、

万葉集は我吾（ぞ）国の歌の先生である、
何時の世でも遂に万葉にかへるのである、
其の万葉の代表歌人柿本人麿は
　淡路の野島ヶ崎のしほ風に
　　妹がむすびし紐吹きかへす、
　家にあればけにもる飯をくさまくら
　　旅にしあれば椎の葉に盛る
之れ等実に天衣無縫、野心が一つもなく其儘である之れが真実の、楽しい歌なのである、

そして賢治は岩手県の童歌（民謡）として次の二つを挙げている。

風どうど吹いて来
　海のすみから風どうど吹いて来
豆けら風吹いて来（たこ上の歌）

かた雪かんこ凍み雪しんこ
　しもどの子ぁ嫁いほしいほしい（堅雪渡）

前者は「風の又三郎」に、後者は「雪渡り」の下敷きになっているのは明らかだ。もちろん賢治詩のすべ

てが、こうした傾向のものばかりではないが、賢治が技巧に走ったものより、素朴に真意を伝える詩を好もしく思っていたことは確かであろう。

本作は「コンゴー土人」を未開で素朴な人種として描こうとしたという意味で、ステレオタイプに満ちた作品であるということは事実だ。しかし、文語詩を書き始めた昭和六年頃の、賢治の詩についての思いが託されたものであった可能性についても考えておくべきだと思われる。

先行研究

中谷俊雄「スタンレー探検隊に対する二人のコンゴー土人の演説」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月)

藤田みどり「イメージの檻 大衆文化にみるアフリカ」(『アフリカ「発見」 日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店 平成十七年五月)

三田誠広「小説家の読む宮沢賢治」(「宮沢賢治を読む、読む、読む。」武蔵野大学 平成三十年十一月)

92 敗れし少年の歌へる

大意

ひかりわななくあけぞらに
清廉サフィアのさまなして
きみにたぐへるかの惑星(ほし)の
いま融け行くぞかなしけれ

雪をかぶれるびやくしんや
百の海岬いま明けて
あをうなばらは万葉の
古きしらべにひかれるを

夜はあやしき積雲の
なかより生れてかの星ぞ
さながらきみのことばもて
われをことひ燃えけるを

よきロダイトのさまなして
ひかりわなゝくかのそらに
溶け行くとしてひるがへる
きみが星こそかなしけれ

ひかりが瞬く夜明け空に
清浄なサファイア色を呈しながら
きみに匹敵するくらいの麗しい惑星が
いま空に溶け込んでいこうとするのは悲しいことだ

雪をかぶった柏槇（ビャクシン）の木や
百の岬もいま夜が明けて
青い海も萬葉集に詠まれた
古い歌を伴って光っているのに

夜には雪を降らせそうな積雲の
中から生れたかのようなあの惑星は
きみが言葉でもって
私に向かって問いかけて燃えているようだ

美しい薔薇輝石（ロダイト）のように
ひかりが瞬くあの空に
溶け行こうとして光っている
きみの星はどうしてこう悲しいのだろうか

モチーフ

先行する「暁穹への嫉妬」（「春と修羅 第二集」）では三陸旅行の途上で明け空に見た土星に対する恋歌であったが、文語詩では、少年が土星の美しさと「きみ」の美しさを述べるものに変わっている。「未定稿」には、月への恋とも人間への恋とも読める「セレナーデ　恋歌」があるが、「対」の関係を持たせようとしたため、本作でも文語詩の段階で新しい要素を加えたのかもしれない。

語注

サフィア　先行作品である「三四三 暁穹への嫉妬 一九二五、一、六、」（「春と修羅 第二集」）によれば「その清麗なサファイア風の惑星」とあることから青い宝石のサファイア色のことを七五調に整えるために「サフィア」と縮めたのだろう。

惑星　先行作品である「暁穹への嫉妬」（「春と修羅 第二集」）には「リングもあれば月も七つもってゐる」とあることからも土星を指していることがわかる。土星は木星に次いで大きな惑星で、「リング」とされる環は氷塊であるという。土星の衛星（月）の数は、近年の研究によれば大幅に増えており、令和五年五月の国際天文学連合小惑星センターの小惑星電子回報では一四六個に及ぶことが発表されたという（「AstroArts」 https://

www.astroarts.co.jp/)。加倉井厚夫（後掲）は、先行作品の制作日付である大正十四年一月六日午前五時の三陸海岸（旅行中での作品）の空をシミュレーションした結果、南東の空に土星が見えただろうことを確認している。ただし「しばらくすると、さそり座のアンタレスの左手、水平線からマイナス三・九等の金星が昇ります。済んだ透明感ある輝きで、むしろ土星よりも「清麗なサファイア風」の輝きを放って見えたはずです」としている。

びゃくしん　ヒノキ科の常緑低木。漢字では柏槇（びゃくしん）。伊吹（いぶき）と呼ばれることもある。先行作品には「はひびゃくしん」とあったが、這柏槇のことで、ソナレ（磯馴（そなれ））とも呼ばれる。磯に生えて、海風にあおられて丈低く育つことからの名称だという。中谷俊雄（「ハイビャクシン」『宮沢賢治の樹木園』中谷俊雄 平成二十四年十二月）によれば、ハイビャクシンは壱岐、対馬、朝鮮の海岸に分布するため、三陸海岸を舞台にした本作に登場するのはミヤマビャクシンではないかとし「ハイビャクシンのごとく這っていて、やや海にせり出した状態かもしれない」とする。

万葉　万葉集のこと。具体的にどの歌をイメージしたのかはわからないが、遥か昔から変わらない姿で、ということから持ち出されたのであろう。

生れて　「うまれて」と読めるが小沢俊郎（後掲）は「あれて」とルビを振っている。浜垣誠司はブログ「宮沢賢治の詩の世界」（「生れて（あれて）」という読み」平成十七年九月二十八日 http://ihatov.cc/）で、『岩波古語辞典』において「あれ【生れ】」について「神や人が形をなして（忽然と）出現して、存在する」と書かれていること、そして音数が七音となることから「あれて」と読んでいるが、本稿もそれに従いたい。

ロダイト　先行作品である「暁穹への嫉妬」（「春と修羅第二集」）には冒頭に「薔薇輝石」とあるが、この英名がロードナイト。文字通り、バラ色の輝きを持った宝石で、明け方の空の色をたとえている。七五調に整えるため縮めて書いたのだろう。もっとも「よきロダイトの」を「ロードナイトの」に置き換えても七音のまま。「清廉サフィア」とバランスを保つために「日本語＋英語」で七音を構成したかったのだろう。加倉井厚夫（後掲）や浜垣誠司がブログ「宮沢賢治の詩の世界」（「普代村へ（3）　平成十七年十月九日 https://ihatov.cc/）で書いているように、賢治が先行作品を書いた三陸海岸の近

く、九戸郡野田村にある日本有数のマンガン鉱床である野田玉川鉱山から薔薇輝石（地元の愛称はマリンローズ）が産出され、賢治も意識して使ったのだろうとする。

きみが星　きみの所属する惑星、と、慌てて読むと土星人と恋愛関係にあるようにも思えてしまうが、「明け方の美しい土星と見まがうような美しいきみ」ということを縮めて表現しているのであろう。

評釈

口語詩「三四三　暁穹への嫉妬　一九二五、一、六、」（「春と修羅　第二集」）を文語詩化したもの。黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿（右肩に鉛筆で㊀）が一種現存。野村美月のライトノベル『〝文学少女〟と慟哭の巡礼者【パルミエーレ】』（KADOKAWA　平成十九年八月）で取り上げられたこともあって、原稿に書かれたイラストともに知名度が高い。

先行作品は花巻農学校の教員時代の冬休みに三陸海岸に一人旅をしたときの取材に基づく。まずは「三四三　暁穹への嫉妬」から見てみたい。

薔薇輝石や雪のエッセンスを集めて、

ひかりけだかくかゞやきながら
その清麗なサファイア風の惑星を
溶かさうとするあけがたのそら
さっきはみちは渚をつたひ
波もねむたくゆれてゐたとき
星はあやしく澄みわたり
過冷な天の水そこで
青い合図（WLINK）をいくたびいくつも投げてゐた
それなのにいま
（ところがあいつはまん円なもんで
リングもあれば月も七っつもってゐる
第一あんなもの生きてもゐないし
まあ行って見ろごそごそだぞ）と
草刈が云ったとしても
ぼくがあいつを恋するために
このうつくしいあけぞらを
変な顔して　見てゐることは変らない
変らないどこかそんなことなど云はれると
いよいよぼくはどうしていゝかわからなくなる
……雪をかぶったはひびゃくしんと
　百の岬がいま明ける
　万葉風の青海原よ……

滅びる鳥の種族のやうに
星はもいちどひるがへる

文語詩は明け方に見えた土星が消えて行こうとするのを見ながら、同じように美しかった「きみ」への思いを述べるという内容だが、口語詩では美しい土星に対する恋心のようなものを述べており、その、叶うことのない思いを「嫉妬」と呼んでいたように思える。

「あんなもの生きてもゐないし」とあるように、惑星に恋するなどということが一般的に考えればおかしなことだということなど、賢治は十分に認識している。ただ『春と修羅（第一集）』の「一本木野」で、「こんなあかるい穹窿と草を／はんにちゆつくりあるくことは／いつたいなんといふおんけいだらう／わたくしはそれをはりつけとでもとりかへる／こひびととひとめみることでさへさうでないか」とも書いていることからも、ただ詩的レトリックで書いているというより、そのように思えてしまう感性を賢治は持ち合わせていたとすべきであろう。

また、「雨ニモマケズ手帳」に書かれた「月天子」では、月に対して、それが無機的なモノであるといった科学的知識は十分にあるとしながら

わたくしがその天体を月天子と称しうやまふことに
遂に何等の障りもない
もしそれ人とは人のからだのことであると
さういふならば誤りであるやうに
さりとて人は
からだと心であるといふならば
これも誤りであるやうに
さりとて人は心であるといふならば
また誤りであるやうに

しかればわたくしが月を月天子と称するとも
これは単なる擬人でない

と書いている。

では、これがなぜ文語詩では恋の歌になったのだろう。小沢俊郎（後掲）は、「惑星に託して賢治が思い浮べた女性への思慕が、おそらく敢て「異途」を選び、三陸行を思い立たせた一因であったと、三陸行の奥にある動機を想像することも許されよう」とする。

signaless のブログ「りんご通信」（「『敗れし少年の歌へる』［妄想］」平成二十四年九月十六日 https://ringotu-shin.blog.ss-blog.jp/）では、口語詩の段階で

は、美しい星を溶かしてしまう空に対する嫉妬をうたっていたとする一方、文語詩については、沢口たまみが主張する大畠ヤス子への恋心を詠んだものだと解し、「賢治が「異途への出発」を書いたのは、ヤス子がアメリカに渡った後です。／三陸の海岸から東を望み、他の男性に奪われ遠く離れた彼の地に住むヤス子の面影を消えゆく星にたとえたのではないか。／美しい金星を溶かしてしまう暁の空は、恋人をさらっていった男性への嫉妬ではないか。／そんなふうにも思えるのです」とする。

栗原敦（「「校本全集」で発表できなかったこと・小沢俊郎さんからうかがった話」『宮沢賢治探究 上 思想と信仰』蒼丘書林 令和三年七月）が書くように、宮沢清六の直接の言葉などから、大正十年秋に賢治が花巻に戻ってから交際を始めた女性がいたのは確かなようである。しかし小沢やsignalessは、賢治の恋人について、あまりにも実体的に考えすぎているように感じられる。というのも文語詩は、当初は自伝的な部分があっても、推敲が進むにつれて虚構化されていくことが多いということを忘れているかのように思えるからだ。

「三四三 暁穹への嫉妬」については、心象スケッチであることから「厳密に事実のとほり記録したもの」（岩波茂雄宛書簡 大正十四年十二月二十日）と自身が書いているように、「多少の再度の内省と分析とはあつても」（「広告ちらし」）、基本的に事実に基づいたものなのだと考えてよいように思う。ただ、文語詩になると虚構化の度合いが増大することは、多くの例があることからも明白で、だとすれば文語詩に改作された際に新しい要素が盛り込まれたとしても、そこに文学的真実を追究する可能性こそあっても、伝記的事実を追究することについては慎重な態度で臨む必要があると思われる。

では、なぜこのような改作がなされたのだろうか。

「未定稿」の「セレナーデ　恋歌」に、「ルーノの君」として、月への恋心を詠んでいるようでありながら（ルーノはエスペラント語で月の意）、実体としての人間の恋人を詠んでいるようにも思える詩がある。清廉サフィアやロダイトといった外来語も交え、惑星への思いと人間への恋を併存させようとするロマンティックな手法には、似通ったところがあるとは言えないだろうか。

江釣子森の右肩に
雪ぞあやしくひらめけど
きみはいまさず
ルーノの君は見えまさず

夜をつまれし枕木黒く
群あちこちに安けれど
きみはいまさず

機関車の列湯気吐きて
とゞろにしばし行きかへど
きみはいまさず
ポイントの灯はけむれども
ルーノのきみの影はなき

あゝきみにびしひかりもて
わが青じろき額を射ば
わが悩あるは癒えなんに

「五十篇」と「一百篇」に「対」とも呼ぶべきペアがあることを指摘した（信時哲郎「「五十篇」と「一百篇」賢治は「一百篇」を七日で書いたか」『一百篇評釈』）。賢治は文語詩のタイトルを同一にしたり、用語やイメージ、語句などに共通性を持たせ、楽曲の一番と二番のように思わせる手法だ。例えば「汗馬〔一〕」と「汗馬〔二〕」では（〔一〕は、タイトルが同じであるため便宜的に全集編者が補ったもの）、「汗馬〔一〕」を定稿に書き写す直前に付された（写）稿の段階で、タイトルを「牧人」から「汗馬図」に、そして定稿で「汗馬〔一〕」に変えている。また「汗馬〔二〕」にあった「叩きそだたく」というフレーズに触発されてか、「汗馬〔一〕」には「おとしけおとし」という音調の似た詩句を書き加えているなどの跡が確認できる。

また「〔秘事念仏の大師匠〕」（タイトルがなかったため全集編集者が最初の一行を仮タイトルにして〔　〕に括って表記している）も、同タイトルの詩が「五十篇」と「一百篇」にあるが、その第一連は

秘事念仏の大師匠　　元真斉は妻子して、
北上岸にいそしみつ、　　いまぞ昼餉をしたゝむる。
「〔秘事念仏の大師匠〕〔一〕」

秘事念仏の大師匠、　　元信斉は妻子もて、
北上ぎしの南風、　　けふぞ陸稲を播きつくる。
「〔秘事念仏の大師匠〕〔二〕」

といった具合で、いかなる効果を狙おうとしたのかはわからないものの、賢治が意図的に似せていることは明らかだ。

「セレナーデ　恋歌」と「敗れし少年の歌へる」でも、「対」を意識し、もともと違った場所での、違ったテーマの詩であったが、推敲の段階で両方の詩の語句やテーマ、設定などを近寄せていったということがあったのかもしれない。この二作については、どちらも未定稿であり、しかも原稿には㊁ではなく㊀の文字しか記されていないが、「対くずれ」とも言うべき詩群も少なくなく、たとえば「五十篇」の「〔氷雨虹すれば〕」と「一百篇」の「〔燈を紅き町の家から〕」は「対」に到達することがなかったが、どちらも農学校を舞台にした詩で、どちらのタイトルも下書き段階では「僚友」とあり、ともに賢治が密かに嫌っていた同僚を書いたものだが、その類似を使って、賢治は両者の内容を近づけるといった操作を行っていたようである。

二限わがなさん、　公（きみ）　五時を補ひてんや、
火をあらぬひのきづくりは、　神祝（かむほぎ）にどよもすべけれ。

「〔氷雨虹すれば〕」の定稿にはこのようにあるが、「〔燈を紅き町の家から〕」の下書稿㈠の最終形態には、両詩の関連性がはっきり指摘できる詩句が書かれていた。

高書記よ簿はわがなさん
なれは去れ五時に間もなき

視点人物は農学校の同僚に向かって、帳簿を付けるのは「わがなさん」と言い、そして「五時」という語を使っている。このあとの下書稿㈡ではこうした詩句を削除しているが、下書稿㈠の原稿には藍インクによる㊀が付され、下書稿㈡には㊁が付され、そのあと定稿となっている。

賢治が「対」の構想をいつ練り始め、いつ整理し始めたのかは不明だが、「セレナーデ　恋歌」には藍インクによる㊀、「敗れし少年の歌へる」には鉛筆による㊀が付されているので、「〔燈を紅き町の家から〕」の下書稿㈠が書かれたのと、ほぼ同時期であろう。

「未定稿」には月と恋心を並立させて詠んだ詩篇が、この他にも「〔まひるつとめにまぎらひて〕」や「〔ゆがみつゝ月は出で〕」があり、こちらとの「対」についても考える必要があるかもしれない。また「未定稿」の「月天讃歌（擬古調）」では、「月天子」を人（神？）に擬し、敬愛しながら詠んでいるが、これも関連するところがないとは言えない。

文語詩における「対」について考えていくことは、文語詩の方法や構想について考える際に極めて重要であるよう

に思うが、このように文語詩には、まだまだ解明できない謎が眠っているように思われる。今は、ひとつひとつに向き合って考えていくしかないようだ。

先行研究

草下英明「賢治文学と天体」（『宮沢賢治研究叢書１ 宮沢賢治と星』学芸書林 昭和五十年七月）
須川力「流星と隕石」（『星の世界 宮沢賢治とともに』そしえて 昭和五十四年八月）
佐藤勝治「〝水いろのうれひ〟の恋人」（「宮沢賢治１」洋々社 昭和五十六年十月）
小沢俊郎「義理を欠いてまで」（『小沢俊郎宮沢賢治論集２』有精堂 昭和六十二年四月）
斎藤文一『『敗れし少年の歌へる』』（『宮沢賢治星の図誌』平凡社 昭和六十三年八月）
中川真平「宮沢賢治と三陸海岸（５）」（「こーひーかっぷ236」太陽企画 平成十四年四月）
加倉井厚夫「宮沢賢治のプラネタリウム８ 宮沢賢治の土星」（「ワルトラワラ20」ワルトラワラの会 平成十六年五月）
小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月）
平沢信一「賢治原稿の秘密 ≪落書き／花壇設計／肖像画≫」（「言語文化34」明治学院大学言語文化研究所 平成二十九年三月）
加藤碩一「輝石たちこゝろせわしく別れをば言ひかはすらん函根のうすひ。」（『「評釈」宮沢賢治短歌百選』地人館 令和五年八月）
大島丈志「野村美月「〝文学少女〟」シリーズ 「銀河鉄道の夜から」飛躍する文学少女」（『現代文化の中の〈宮沢賢治〉』新典社 令和五年九月）

93 「くもにつらなるでゝこぼゝこがらす」

くもにつらなるでこぼこがらす
杜のかなたを赤き電車のせはしき往来
べつ甲めがねのメフェスト

大意

雲にまで繋がっているようなデコボコのガラスを透して
杜の向こうに赤い電車がせわしく行き来するのが見える
べっ甲縁の眼鏡をかけたメフェストがいる

モチーフ

大正十年の家出上京中の取材に基づくもの。断片的だが、散文「電車」を参考に考えれば、東京の大学生に対する憧れと反発とが封じ込められたものということになりそうだ。

語注

べっ甲めがね　ウミガメの一種であるタイマイの甲羅を使って作られたメガネのこと。古くは徳川家康も使用していたと言われる。現在はタイマイが捕獲禁止されているが、天然素材であるためにアレルギー反応が少なく、使えば使うほど顔に馴染むということから人気は高く、禁止以前に捕獲されたべっ甲で作られた眼鏡は、今も高値で取引されているという。

メフェスト　ゲーテの代表作である『ファウスト』（元はドイツの伝説）に登場する悪魔・メフィストフェレス（Mephistopheles）のこと。ファウスト博士を誘惑して魂を渡す契約をさせる。関連作品である散文「電車」と下書稿㈠にあたる「「東京」ノート」にはメフィストと書かれているが、文語詩になるとメフェストと書かれている。

評釈

「「東京」ノート」に書かれた下書稿㈠、黄罫（22　0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（右肩に鉛筆で①とあるが、同一紙上に書かれた「〔たそがれ思量惑くして〕」に付されたものだと『新校本全集』は判断している）の二種が現存。なお、『新校本全集16上 補遺・資料』では、校異に関して「また、「初期短篇綴等」の「電車」（第十二巻所収）は本篇の関連作品である」を補うとの指示が書かれている。

散文「電車」から触れることにしたい。登場人物は二人。「（むしゃくしゃした若い古物商。紋付と黄の風呂敷）」と説明される「第一双の眼の所有者」、そして「（大学生。制服制帽。大きなめがね。灰色ヅックの提鞄）」と説明される「第二双の眼の所有者」である。

「第一双の眼の所有者」と「第二双の眼の所有者」とあるのは気になるところだが、赤田秀子（後掲）が「眼が二双あると解釈できないか。二双の眼とは何か。めがねもまた双の眼ともいえようか」と書くように、眼鏡のない古物商と眼鏡をかけた大学生のことではないかと思われる。

舞台は東京と思われる場所の電車の中。「第一双の眼の所有者」である古物商が、飛び乗りをしてきた大学生に向

かって「えゝと、あなたさまはメフィストさんのご子息さん。今日はどちらへ」と問いかけるところから始まる。大学生は「何だ失敬な」と怒って返事する。すると古物商は「あなたはメフィストさんとはアウエルバッハ以来お仲がよろしくないのですな。ついおなりがそっくりなもんですから」、「いや、どうもまことに失礼いたしました」と詫びると、これが火に油を注ぐことになって、大学生は「気を付けろ。間抜けめ」と言い放つ。古物商はあやまりつつも「お若いのにそのまん円な赤い硝子のべっ甲めがねはいかがでせうか」と、大学生の眼鏡について意見すると、大学生は「おれは乱視だから仕方ないさ」と答え、「それならば仕方ござんせん」と引き下がる。が、今度は大学生の尖った帽子について意見を言い始める。大学生は怒って「Was für ein Gesicht du hast!」(君は何ていう顔をしているんだ)とドイツ語で言い放つと、古物商も怒り出し「Nein, mein Jüngling, sage moch einmal, was für ein Gesicht du machst!」(いや、若者よ、もう一度言ってみたまえ。君はなんて顔をしているんだい)、「おまへのやうな人道主義者は斯う云ふもんだ。hast では落第だよ」と罵る。二人はさらに悪口を言い合いながら、「さよなら。ひよっこさん。大きなまちの挨の中だ。くるくる廻ってへたばらないやう御用心」、「えい。勝手にしろ。お別れにたゞ一言ご忠告いたします。電車がとまってからお降りなさいだ」「プイ」といって終わる。

まずメフィストとアウエルバッハについては説明が必要かもしれない。どちらもドイツの文豪ゲーテの代表作『ファウスト』が下敷きになっている。メフィストは悪魔の名前で、アウエルバッハはライプツィヒで今も営業を続ける酒場の名前。ゲーテはもちろん森鴎外も利用したとされる。『ファウスト』にはメフィストが、ここで学生たちをからかうシーンがある。杉浦静によれば、メフィストは「行脚学生の如き服装」(高橋五郎訳 東京文栄閣 明治三十七年八月)、「漫遊学生の扮装」(町井正路訳 東京堂 明治四十五年七月)、「旅の書生の装い」(森鴎外訳 冨山房 大正二年一月・三月)、「行旅の修行学生」(森田草平・東新共訳 文武堂 大正七年七月)とあったことから、賢治が手に取ったのが誰の本であったかはわからないが、大学生のことをメフィストと呼んだのはそのためで、またアウエルバッハ以来仲が悪いというのは、酒場で酔っ払った学生たちと悶着があったことを指すものと考えられる。

『宮沢賢治大事典』で、野々宮紀子は「ブラックユーモアも感じられるが、冷笑的喧嘩問答と言う方がより適切か。目や言葉で相手を痛烈に痛罵する、その読後感は決して快くはない」と書いているとおりで、自意識過剰な若者

同士の口喧嘩であって、あまり賢治的ではないし、面白みも感じにくい。

恩田逸夫（「宮沢賢治「初期作品」攷」「四次元20」宮沢賢治友の会 昭和二十六年七月）は、「おそらく賢治と思われる若い古物商と、若い大学生との対話風の目の斬り合いは面白い趣向である。彼は大学生という階級（クラス）に一種の羨望の念の交った「むしゃくしゃ」した反感と、「ひよつこ」どもに何でまけるものかという気持とを抱いていたのではないかと思われる」としたが、今でも説得力のある言葉であるように感じられる。

さて文語詩の下書稿㈠は「「東京」ノート」の冒頭「一九二一年一月より八月に至るうち」と書かれたすぐ後に書かれている。

くもにつらなる　でこぼこがらす
はるかかなたを　赤き狐のせわしきゆきき
べつかうめがねの　メフィスト

「「東京」ノート」は、賢治が東京に滞在した際の創作メモともいうべきものだが、この二つ後には「赫ら顔／黒装束のそのわかもの／急ぎて席に帰り来しかな」と「未定稿」の「隼人」に関連するメモが書かれているが、これは大正十年四月に、賢治が父・政次郎と関西旅行をした際のものであることから、下書稿㈠に関する経験は大正十年の一月から四月頃のものだということになるかと思われる。上京したのが一月二十三日だとのことなので、上京直後といってもいい時期だろう。関連作品である散文「電車」の原稿には「2011.6-」とあるが、取材が六月だということではなく、散文化が六月だったということに解しておきたい。

杉浦静（後掲）は、次のように書いている。

この短章は、どこかの室内から、「でこぼこがらす」を通して、はるかかなたの「赤き狐のせわしきゆきき」と、「べつかうめがねのメフィスト」が見えている情景を切り取ったものかと思われる。

ここでは、赤き狐やメフィストに見立てられた人々が、さらに「でこぼこがらす」によって歪んで見えている。賢治童話に始めて登場する狐は、「貝の火」の、残忍でずる賢い狐であるが、「けだもの運動会」や「土神ときつね」に登場するきつねも、いずれも、「せわしくゆきき」して嘘をつくような動物として登場する。「せわしくゆききする」人々の物腰や振る舞いに、狐に通じるものを感じ取ったのであろうか。

下書稿㈡では、二行目が「杜のかなたを赤き電車のせはしき往来」に書き直されるが、それはつまり「赤き狐」と「赤き電車」が、ほぼ同じ内容だということを示しているのだろう。大正時代の東京の街中に狐が出没することは、さすがになかったと思うので、これは電車のことを狐のような信用できない人々が乗っている、ということから狐にたとえたのではないかとも思われる。この頃の東京市電は赤かったようで、昭和六年二月十二日の「朝日新聞」（朝刊）の記事には、「電車はもとオレンヂ色であつたが去る大正十二年の大震災後、全都が灰色に化し街路樹も姿を消してすつかり緑と絶縁した時若々しい復興を象徴して市内に生気と色彩を与へるため、あのグリーンに変へられた」とのことなので、大正十年に上京中の賢治は電車をオレンヂ（⇖赤）ととらえていこととなる。

くもにつらなるでこぼこがらす
杜のかなたを赤き電車のせはしき往来
べつ甲めがねのメフェスト

狐も電車も「赤き」と書かれていたが、三行目の「べつ甲めがね」も、短篇「電車」に登場した際「まん円の赤い硝子のべっ甲めがね」と書かれていたことを思うと、赤色と認識されており、やはり信用のできない都会の大学生ということから「赤」が維持されていたのだろう。

恩田逸夫（「宮沢賢治における大正十年の出郷と帰宅」『宮沢賢治論１　人と芸術』東京書籍　昭和五十六年十月）は、「電車」において学生は古物商に対して「きさまの眼玉は黄いろできょろきょろまるで支那の犬のやうだ」と言い、また「黄の風呂敷」を持っていることを指摘。童話「かしはばやしの夜」でも、都会風の画家が「赤いしゃっぽ」をかぶり、清作が「鬱金（⇖黄）しゃっぽ」をかぶっていることから都会と農村が赤と黄に書き分けられていることを指摘している。

賢治は質・古着商の見習いをさせられていたことからも「むしゃくしゃした若い古物商」とあるのは賢治自身であるとも感じられるが、大正九年六月～七月に保阪嘉内に宛てて書かれた書簡には次のようにも書かれていた。

私なんかこのごろはブリブリ憤ってばかりゐます。何もしやくにさわる筈がさっぱりないのですがどうした訳やら人のぼんやりした顔を見ると、「えゝぐづぐづするない。」いかりがかっと燃えて身体は酒精に入った様な気がします。机へ座って誰かの物を言ふのを思ひだしなが

ら急に身体全体で机をなぐりつけさうになります。いかりは赤く見えます。あまり強いときはいかりの光が滋くなって却て水の様に感ぜられます。遂には真青に見えます。

上京した時とは、時代も状況も少しズレてはいるが、むしゃくしゃした賢治が、赤い電車に乗ってオシャレな赤いべっ甲眼鏡をかけ、尖った学生帽をかぶって、しかし肝心の勉強の方はドイツ語の誤りを古物商に指摘されるようなレベルであれば、「ぐづぐづするない」となぐりつけそうな勢いで怒りの色である「赤」で描きたくなったというのも納得できないこともない。

また、上京中の大正十年七月十三日には、関徳弥に向かってこのような書簡も送っていた。

図書館へ行つ見ると毎日百人位の人が「小説の作り方」或は「創作への道」といふやうな本を借りやうとしてゐます。なるほど書く丈けなら小説ぐらゐ雑作ないものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎氏のやうに七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴ぢたりしてゐるとお思いですか。どんな顔もして居りません。

これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。いくら字を並べても心にないものはてんで音の工合からちがふ。頭が痛くなる。同じ痛くなるにしても無用に痛くなる。

今日の手紙は調子が変でせう。

斯う云ふ調子ですよ、近頃の私は。

図書館に行っても安直に一攫千金を狙うような若者ばかり。自分は宗教のために尽くそうと上京してきたというのに… 賢治にとって東京の大学生はなんとも羨ましく、しかしなんとも恨めしい存在に見えたのではないだろうか。

浜垣誠司（宮沢賢治共同討議（Ⅲ） 宮沢賢治と想像力「童話「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」を読む」『宮沢賢治の体験世界 幻想・空想・夢想』文教大学出版事業部 令和六年三月）は、賢治の性格について、父がそばにいる時などは「おとなしく自己抑制が強い優等生」である一方、「ハイテンションなお調子者であったり、剽軽者であったりします。時に怒りを秘めていたりもします」と指摘するが、父親もいない東京に出た際に、眠っていた火山が爆発したようなテンションの高さがこうした作品を生んだのではないかというようにも思える。

たしかに野々宮が『宮沢賢治大事典』に書いていたように「電車」は、快い読後感には浸れそうにない作品かもしれないが、抑圧されていた火山が爆発し、真偽のほどはともかく一ヶ月に三千枚もの原稿を書く原動力になる体験の一つであったのだと考えれば、貴重な記録であったようにも思える。賢治は童話集『注文の多い料理店』の表題作について、広告ちらしで「都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です」と書いたが、その言葉は、ここにも適用することができるかもしれない。

先行研究

佐藤栄二「短編「電車」の〈鼠の天ぷら〉考」（「宮沢賢治研究 Annual 8」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月）
赤田秀子「電車」（「雲の信号9」千葉賢治の会 平成二十四年十二月）
杉浦静「宮沢賢治 短篇「電車」考（1） メフィストの〈なり〉」（「大妻国文53」大妻女子大学国文学会 令和四年三月）

94 「土をも掘らん汗もせん」

土をも掘らん汗もせん
まれには時に食まざらん
さあれわれらはわれらなり
ながともがらといと遠し

にくみいかりしこのことば
いくそたびきゝいまもきゝ
やがてはさのみたゞさのみ
わが生き得んと
うしなへるこゝろと
くらきいたつきの
さなかにわれもうなづきなんや

大意

土を掘ることもあるだろうし汗をかくこともあるだろう
たまには食事をしないこともあるだろう
それでも私たちは私たちだ
あなたの仲間たちとの距離はとても遠いのだ

憎しみと怒りのこもったこの言葉を
何十回も聞き今も聞いて

すぐにそのとおり本当にそのとおりにしか
私は生きていくことができないのだと
失った心と
暗い病の
その中で納得するしかないのである

モチーフ

羅須地人協会時代の体験を詠んだ口語詩を文語詩化したもの。口語詩から無理に文語詩化しているとの批判もあるが、納得できるところもある。ただ賢治をいわゆる近代詩人と同列に扱うのは危険だろう。本作が定稿化から漏れたのは、農村との和解の側面が見出しにくく、また賢治個人を語りすぎていたと判断されたからかとも思われる。

語注

ともがら　同類の人たちのこと。ここでは「な＝賢治」の同類である町に住む人々の意味だろう。

いくそたび　漢字で書けば「幾十度」。何度も、の意。

評釈

先行作品である「春と修羅 第三集」の口語詩「一〇〇八〔土も掘るだらう〕一九二七、三、一六、」の下書稿㈡が書かれた黄罫（22 0行）詩稿用紙の上部余白に書かれた下書稿一種が現存。

羅須地人協会時代に書かれた先行作品から見てみたい。

土も掘るだらう
ときどきは食はないこともあるだらう
それだからといって
やっぱりおまへらはおまへらだし
われわれはわれわれだと
……山は吹雪のうす明り……
なんべんもきき
いまもきゝ
やがてはまったくその通り
まったくさうしかできないと
……林は淡い吹雪のコロナ……
あらゆる失意や病気の底で
わたくしもまたうなづくことだ

文語詩化はストレートになされたことが想像できるが、中村稔（後掲）は次のように書く。

改作された作品の貧しさは目を覆いたいほどである。「まれには時に食まざらん」と「ときどきは食はないこともあるだらう」とはまるで違う。口語詩には、賢治と向かいあって彼を罵る農民の肉声を聞くかの感があるのに、その声音が文語詩で定型化されて弱められている。「うしなへるこゝろと／くらきいたつきの」も同じである。「あらゆる失意や病気の底で」という直接的な言葉が雅語のひびきでうすめられている。そして、口語詩で「山は吹雪のうす明かり」、「林は淡い吹雪のコロナ」という二行が農民と賢治との環境を立体的に造型していたのに、文語詩ではこれらが削除されている。文語詩では表現の自在さを失い、彫塑の立体性を失っているのである。

田口昭典（後掲）はこれに応えて「文語詩の方が「目を覆いたい」ほどの貧しい作品だという考えには首肯することは出来ない。文語詩には文語詩の良さがあり、それを肯定する読者も居る」とするが、たしかに「花巻町　Ｉ子」が「女性岩手２」（昭和七年九月）に、

はじめて発表された「春と修羅」時代には、私共いかにその一々を繰りかへしても、先生の作意と情緒とをつかむことが出来ないで、たゞその中の「無声慟哭」や「獅子踊」に琴線の響を感じ得たにすぎませんでしたが、その後十年、すつかり洗練され切つたこの二篇を口誦して見るとき、この田園詩の物語る世界が、空間に再現されるばかりでなく、其の発声さへもがはつきりきゝ取れる感じがいたします。

と書いたことを思えば、賢治が文語詩を「なっても（何もかも）駄目でも、これがあるもや」と語るほどに大切にしていたことも思い起こされ、個人的な好悪で論じることは避けるべきだろう。

中村（後掲）は、「一百篇」所収の「夜」についても、口語詩の文語詩化の視点から次のように言及している。

掌がほてって寝つけないときは
手拭をまるめて握ったり
黒い硅板岩礫を持ったりして
みんな昔からねむったのだ

これが口語詩の最終形態だが、文語詩になるとほぼ同内容ながら、次のようなものに改変される。

はたらきまたはいたつきて、もろ手ほてりに耐えざるは、
おほかた黒の硅板岩礫を、　にぎりてこそはまどろみき。

両者を並べて、中村は

読みくらべてはっきりすることだが、「もろ手」というよりは「掌」という方が現実感にとんでいるということであり、「おほかた」は不要だということである。これらの語句は七五調の音数をそろえるために変えられ、加えられているのである。

と書いている。中村の指摘は十分にあたっているように思う。七五（五七）調にあてはめるために冗長な語句が出てきており、中村いうところの「農民の肉声を聞くかの感」といったものが感じられにくくなっており、これは文語詩に慣れ親しんでいるかどうかという問題ではない。

ただ、賢治の文語詩は日本の近代口語詩の歴史とは必ずしも同調しておらず、「賢治の体験に基づくさまざまな事実を、個人的な思い入れを排除しながら定型表現の中に閉じ込め、それによって誰もが覚えやすく、口にしやすい形式に整えた」（信時哲郎「11 夜」『一百篇評釈』）という側面に着目すれば、中村の指摘は見当はずれのものであるように思われる。

しかし、文語詩「夜」の生成過程と、未定稿に留まった「〔土をも掘らん汗もせん〕」を比べてみると、事情は少しだけ異なっているようでもある。

栗原敦（「春と修羅 詩稿補遺」『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月）は、口語詩「夜」（初期形態のタイトルは「昼と夜」）の改稿過程を追いながら、「かつて見た「あれ」、その時は解らなかった働く人の営みや仕種が今になって腑におちた、という発見・納得」が描かれ、最終的に「「みんな」と同じ一人に自分がなったことの認識の方に力点は移されるのである」と読み解いた。

「〔土をも掘らん汗もせん〕」でも、農民たちが自分に向かって漏らす「やっぱりおまへらはおまへらだし／われわれはわれわれだ」という言葉について、「わたくしもまたうなづくことだ」と自分自身の認識に変わったことを自覚しているという意味で、同じ構造であるということができる。文語詩になってからでも、「さあれわれらはわれらなり／ながともがらといと遠し」が「さなかにわれもうなづきなんや」と結ばれることからすれば、同じである。

ただ、農民たちの考えと賢治の考えが同じになったとしても、「〔土をも掘らん汗もせん〕」では「やっぱりおまへらはおまへらだし／われわれはわれわれだ」という内容、つまり、農民と賢治を分断するという内容であり、「「みんな」と同じ一人に自分がなった」わけではない。

しかも、その認識は「あらゆる失意や病気の底で／わたくしもまたうなづくことだ」とされている（文語詩でも「うしなへるこゝろと／くらきいたつきの／さなかにわれもうなづきなんや」としっかり書かれている）。

賢治が農民と自分たちとが水と油のような存在で、交り合うことがないと悟らざるを得なかったというのは、明日の農村社会を考える上では、ありがたくない事実であった。また、そうした自分自身を悲劇のヒーローめいて演出してしまうことも、望ましいことであるとは思わなかったのではないだろうか。

だとすれば、文語詩「夜」に対する拙論で「賢治の体験に基づくさまざまな事実を、個人的な思い入れを排除しながら定型表現の中に閉じ込め、それによって誰もが覚えやすく、口にしやすい形式に整えた」というのは、本作に限っては、あまり人口に膾炙されたくない部類のもの、すなわち多くの人に記憶され、吟誦されたいものではない部類のものだったのかもしれない。

このように見てくると、羅須地人協会時代の口語詩を文語詩化した二作品で、どちらも中村稔から文語詩化への批判をされていたが、似た部分はありながら、賢治にとっては少し事情が違っていたという可能性もあるかもしれない。もしかしたら、一方が「一百篇」に収録されて定稿化され、もう一方が未定稿のままにとどまったのも、こうした事情が影響していたのかもしれない。

先行研究

中村稔「「疾中」「文語詩篇」その他」（『宮沢賢治ふたたび』思潮社 平成六年四月）

田口昭典「〔土をも掘らん汗もせん〕」（『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月）

倉橋健一「水族館の窓」（『宮沢賢治 二度生まれの子』未来社 令和五年十一月）

95 「あくたうかべる朝の水」

あくたうかべる朝の水
ひらととびかふつばくらめ
苗のはこびの遅ければ

熊ははぎしり雲を見る
苗つけ馬を引ききたり
露のすぎなの畔に立ち
権は朱塗の盃を
ましろきそらにあふぐなり

大意

ゴミの浮かんだ朝の水面
燕がひらりと飛び交う中を
苗を持ってくるのが遅いので
熊は歯ぎしりをしながら雲を見上げている

苗を運ぶ馬を引き
露のおりたスギナの生える畔道に立って
権は朱塗りの盃を
白い空を仰ぐようにして飲み干した

モチーフ

先行する口語詩を見ると、「熊」は「おれ」や「権」に農作業を手伝わせようとしていたようだが、あちこちに視線を泳がせるだけで、きちんとコミュニケーションを取ろうとしていない。一方で、熊の「お袋」（文語詩には姿を現していない）は、「おれ」や「権」に労に報いようと精一杯にふるまっている。自信に満ち溢れているようにも見える熊は、実際は誰かに助けられていることを自覚したくないだけの、弱さを抱えた人物である、ということを描こうとしていたのかもしれない。

語注

あくた　水田に浮かんだゴミのこと。先行作品である口語詩「〔熊はしきりにもどかしがって〕」には「燕もとび／ブリキいろの水にごみもうかぶ／田植の朝にすっかりなった」とある。

熊　農夫の名前。おそらく『新校本全集5』所収の口語詩「憎むべき「隈」辨当を食ふ」や「春と修羅 第三集補遺」の口語詩「〔みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで〕」などにも登場するのと同一人物で、伊藤博美（「饗宴」の舞台」「賢治研究42」宮沢賢治研究会 昭和六十二年一月）によれば、羅須地人協会の近くに住んでいた伊藤克己の父・伊藤熊蔵のことかと思われる。熊と隈が併用されているが、伊藤は宮沢清六と昭和五十八年三月十二日に面談した際「あまりにもあからさまなので…。いろいろ差し障りもあるので、スミともクマとも読めるように

かえておぎあんした」と聞いたとのこと。ただ、賢治全集の編纂等にも携わった入沢康夫はTwitter（現・X）において「またまた念の為に申しあげますが、「隈」・「熊」に関連するどの詩稿にも、賢治以外の人の手による改変の跡は一切存在しておりません」（「ロゴス古書」https://blog.goo.ne.jp/rogosu123/ 平成二十五年十一月九日による。入沢の投稿日は平成二十五年十一月三日だとのことだが現時点では確認できない）と書いている。確かなところはわからない。また「ロゴス古書」（前掲）によれば、「「憎むべき『隈』辨当を食ふ」と「隈」田を植ゑる」や（隈はしきりにもどかしがって）は、詠んでいる場所と人物が異なることにおよんだ。辨当を食ふの処は外台の川原での出来事で熊さんであるが、しきりにもどかしがっての最後から五行目の「城あとのまっ黒なほこ杉の上には」は小舟渡辺りから花巻城跡を観た作ではないかと云う事になった」という指摘もある。ただ、賢治がこの熊（隈）に対して、おおむね否定的な感情を持っていることでは共通している。例えば口語詩「憎むべき「隈」辨当を食ふ」では、「およそあすこの廃屋に／おれがひとりで移ってから／林の中から幽霊が出ると云ったり／毎晩女が来るといったり／町の方まで云ひふらした／あの憎むべき「隈」である」と書かれ、口語詩「〔みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで〕」では、賦役に出なかった家々から集めた酒を呑む農民の一人として「立って宰領する熊氏の顔はひげ一杯だ」として登場している。本作においても熊が好感を持たれていないのは確かだろう。

苗つけ馬　国語辞典にも「苗つけ馬」は見当たらない。水田での作業で馬の助けを借りるのは、よく知られているところでは田起こしや代掻きであろう。ただ先行作品である口語詩「〔熊はしきりにもどかしがって〕」には「権治が馬をひいてくる／苗をぎっしりつけてゐる」とあるので、熊の水田まで苗を持ってくる役に権の馬が借り出されたということなのだろう。ただ、「〔熊はしきりにもどかしがって〕」に先行する下書稿「〔「隈」田を植えゐる〕」には、「がぶがぶ代を掻いてゐる馬」ともあるので、そのイメージがあったのかもしれない。

権　馬を所有していることから熊の手助けをすることになった農民。先行作品の初期段階では「いとこの権治」ともある。「〔ひとびと酸き胡瓜を噛み〕」（「未定稿」）で、熊と一緒に権左エ門という人物が登場するが、下書き段階では権右エ門とあることから伊藤博美（「饗宴」の舞台」前掲）は、伊藤の父の権右衛門であろうという。ただ、同一の人物かどうかは不明。

あふぐなり　先行する口語詩「〔熊はしきりにもどかしがって〕」には「両手でとって拝むやうにしてのんでゐる」ともあることから、朱塗りの盃には権をもてなすための酒が入っており、権はそれを飲んだようだ。「あふぐ」は、ただ空を見上げたというだけでなく、酒を飲みほして空を仰いだという意味であると取りたい。

評釈

『新校本全集5』に収められた口語詩「〔熊はしきりにもどかしがって〕」を文語詩化したもの。黄罫（22 22行）詩稿用紙に書かれた先行作品と同じ紙面に書かれた下書稿が一種現存。

先行作品に日付はないが、内容から羅須地人協会時代の作品であろう。

熊はしきりにもどかしがって
権治と馬を待ってゐる
麻もも引のすねを二とこ藁でくくって
小束な苗をにぎりながら
里道のへりにつっ立って
ほとんどはぎしりしないばかり、
水のなかではみんなが苗をぐんぐん植える
権治が苗つけ馬をひいて
だんだんゆらゆら近づいたので
隈はすばやく眼をそらし
じっと向ふのお城の上のそらを見る
そのあしもとのすぎなの上に
けらが四五枚ひろげられ
上には赤い飯びつや椀
二三歩向ふへふみだして、
大きな朱塗の盃をさゝげ
権治をまって立ってゐるのは隈のお袋
半分白髪で腰もまがり
泥で膝までぬれてゐる
権治がすっかり前へくると
もうやうやしくそれを出す
権治はたづなをわきにはさみ
両手でとって拝むやうにしてのんでゐる
隈はもどかしいのをじっとこらえ、
ふし眼にブリキの水を見る
城あとのまっ黒なほこ杉の上には
雲の白髪がはげしく立って
燕もとび
ブリキいろの水にごみもうかぶ

田植の朝にすっかりなった

田植えの際、熊は馬をもっていなかったようで、権治の助けを借りなくてはならない。しかし熊のコミュニケーション能力は無骨に過ぎ、「隈はすばやく眼をそらし／じっと向ふのお城の上のそらを見る」のみ。文語詩には登場しない熊の「お袋」が、権治に対して最大級の接待をし、朱塗りの盃で酒を提供しているが、その脇でも熊は感謝の意を表することもなく、しきりと視線をそらしている…

口語詩には、この前の段階があり、タイトルは「「隈」田を植える」と付けられている。『新校本全集』には黄罫（24 24行）詩稿用紙に鉛筆できれいに書かれているとあるが、やはり作品番号や日付は書かれていない。初期形態を示しておく。

亜鉛いろの水を渉って
四五人苗を植えてゐる
遠くには霧
がぶがぶ代を掻いてゐる馬
楢の林の影と波
ところが「隈」が立ってゐる
麻もも引のすねを二とこ藁でくくって
小束な苗をにぎりながら
水にははいらず際に立って
まあ宰領といふかたち
ちらっと横眼でおれを見る
それからこんどは途方もなくつめたい眼をして
じっと向ふのお城の上のそらを見る
ゆふべ酒を呑みに来いといって
行かないもんだから怒ってゐる
呑まないのを知ってゐながら
呑みに来いといふのは　ずゐぶん失敬なはなしだし
今日の田植に手伝ひさせる魂胆もある
恩に着せておいて稼がせやうと考へたって
誰にもうまくはまらない
おれにはおれの仕事がある
「隈」の横っ面はひげでいっぱい
もう酔ってゐて赤黒い
みちばたのすぎなの露の上に
けらが四五枚ひろげられ
上には赤い飯びつや椀
おれは大事によけて行く
こはくはなくてもそれは当然

盃をもって立ってゐるのは熊のお袋
半分白髪で腰もまがり
もう泥へはいってぬれてゐる
おれはていねいに
挨拶する

隈が横眼でじっと見てゐる
おれはまさしく通り過ぎる
さっき熊も見てゐた
お城の上には雲の白髪
おれの方は
今日も一日どんづきだ

賢治を思わせる「おれ」が「熊（隈）」から酒の接待をした代わりに田植えを手伝えと、言葉ではなく、視線で暗に示され、しかし「熊のお袋」は、もう農作業もはじめているようで、「おれ」が手伝いに来てくれたと錯覚して応接しようともしてくれている。そんな場面であろう。

手入れの段階で、熊の母親について「ほんたうに何の悪意もなく」「一人づつ胸像につくられてもい」い、「無名の村の主婦である」といった言葉もあるように、不愛想な熊と、その親の態度や性格の違いを対比させる意図があったように思える。

ただ、権治も馬も、この段階では登場しておらず、手入れ段階になってようやく登場するのも気になるところだ。この後、「〔熊はしきりにもどかしがって〕」への改稿、さらに文語詩になると、中心的な位置にいた「おれ」はすっかり背景に隠れ、また熊の母親も隠れ、その代わりに権治と馬がクローズアップされている。虚構化したのだとも考えられそうだが、書かれている事実に大きな矛盾がないことから、重点を置く場所が変わっただけだということかもしれない。

一方、一貫して描かれ続けているのは熊である。「「隈」田を植える」には「ゆふべ酒を呑みに来いといって／行かないもんだから怒ってゐる／呑まないのを知ってゐながら／呑みに来いといふ」ともあるので、会話ができないというわけではない。「〔熊はしきりにもどかしがって〕」では、「権治が苗つけ馬をひいて／だんだんゆらゆら近づいたので／隈はすばやく眼をそらし／じっと向ふのお城の上のそらを見る」なので、やはり会話をしようともしていない。「お袋」の態度から推察すれば、権治は頼まれて農作業を手伝いに来て居る存在なのに、この仕打ちだ。

『新校本全集5』に口語詩として収められ、「〔秘事念仏の大師匠〕〔一〕」（「五十篇」）で文語詩化された「憎むべき「隈」辨当を食ふ」には、次のようにある。

きらきら光る川に臨んで
ひとりで辨当を食ってゐるのは
まさしく　あいつ「隈」である
およそあすこの廃屋に
おれがひとりで移ってから
林の中から幽霊が出ると云ったり
毎晩女が来るといったり
町の方まで云ひふらした
あの憎むべき「隈」である
ところがやつは今日はすっかり負けてゐる
第一　草に腰掛けて
一生けん命食ってゐるとき
まだ一ぺんも復讐されない
敵にうしろを通られること
第二にいつもの向ふの強味
こっちの邪魔たる群集心理が今日はない
青天の下まさしく一人と一人のこと
第三　やつはもういゝ加減腹いせをして
憎悪の念が稀薄である
そこでこっちもかあいさうなので
避けてやらうと思ふけれども
するとこんどはおれが遁げたと向ふが思ふ
こゝにおいてかおれはどうにも
今日は勝つより仕方ない
川がきらきら光ってゐて
下流では舟も鳴ってゐる
熊は小さな卓のかたちの
松の横ちょに座ってゐる
ぢろっと一つこっちを見る
それからじつにあわてたあわてた
黄いろな箸を二本びっこにもってゐて
四十度ぐらゐの角度にひろげ
その一本で
熊はもぐもぐ口中の飯を押してゐる
おれはたしかにうしろを通る
こんどはおれのうしろの方で
大将おそらく興奮して
味もわからずつゞけて飯を食ってゐる
然るにかうきっぱりと勝ってしまふと
あとが青黒くてどうもいけない

とは云ふものの別段おれは
何をしたといふ訳でない
向ふで勝手で播いたのを
向ふが勝手に刈ったのだ

ここでも「おれがひとりで移ってから／林の中から幽霊が出ると云ったり／毎晩女が来るといったり／町の方まで云ひふらした」りもするので口がきけない人物ではない。そして気の弱い人物ということでもないのだろう。ただ、賢治とは視線のみで戦っていることが述べられている。

文語詩「〔秘事念仏の大師匠〕〔一〕」の「姉妹篇関係にある」として『新校本全集7』に提示されている「春と修羅 第三集」の口語詩「一〇二五 〔燕麦（オート）の種子をこぼせば〕 一九二七、四、四、」や「一〇二八 酒買船 一九二七、四、五、」にも視線の戦いが描かれ、これらが発展的に融合された「心象スケッチ、退耕」にも熊は登場する。賢治が同じような体験を数回経験したのか、それとも一回の出来事をパラフレーズしたのかはわからないが、賢治にとっては重要なテーマだと認識されていたのだろう。

本作が未定稿に留め置かれたのは「〔秘事念仏の大師匠〕〔一〕」で、同じ人物による視線のドラマが既に描かれてしまっていたためかとも思われるが、それ以上に気になるのは、賢治が熊という敵について、なぜこれほど執拗に追及しようとしたのかということだ。

熊は気弱どころか、むしろ横柄な人物なのに、自分の考えをきちんと示すことができず、視線でわずかに表現しようとするだけだ。自分のいらだちや不安、謝意を示すことさえも自分の弱みを見せるような気がしてしまい、物言いや態度とは裏腹に、むしろ自分に自信を持てない存在であり、そうした人間の存在に関心をもったということではないだろうか。

中村稔（後掲）は「熊、権はいずれも農民の略称であろう。苗つけ時の農村風景を作者は正確にみているわけだが、熊に同情しているわけでもなく、権を非難しているわけでもない。あくまで傍観者として二人の農民のいる風景を描いているのである」と書いていたが、下書稿から追いかけていくと、もう少し事情は複雑だったのではないかというようにも思えるのである。

先行研究

中村稔「『文語詩稿』」（『宮沢賢治論』青土社 令和元年五月）

96 中尊寺〔一一〕

白きそらいと近くして
みねの方鐘さらに鳴り
青葉もて埋もる堂の
ひそけくも暮れにまぢかし

僧ひとり縁にうちゐて
ふくれたるうなじめぐらし
義経の彩ある像を
ゆびさしてそらごとを云ふ

大意

白い空がたいへんに近くに見え
峰の方向からは鐘が鳴って
青葉で埋もれた堂には
しずかに夕暮れ時も近づいてきているようだ

一人の僧が縁先に座って
膨れたうなじを回しながら
彩色された義経像を
指さしながら虚言を言っている

モチーフ

盛岡中学校時代の修学旅行で平泉の中尊寺を訪ねた際の経験を書いたもの。義経像は高館にある義経堂のものとされることが多いが、中尊寺境内にある弁慶堂のものであるようだ。「一百篇」には「中尊寺〔一一〕」があるが、『一百篇評釈』では「盗む」という行為を悪だと決めつけない読みを提案した。本作も「対」を意識して推敲が重ねられていたとも考えられることから、「そらごと」という悪いイメージのする語について、単純に悪には結びつけない読まれ方を望んでいたようにも思われる。

語注

中尊寺　平安初期の八五〇年に慈覚大師（円仁）が開創した弘台寿院を始まりとする天台宗の寺院。八五九年に清和天皇の命によって中尊寺と改称され、一一〇五年に藤原清衡が堀河天皇の命を受けて再興した。一一二六年には落慶供養を大々的に行い、その発願文では平和を祈念し、奥州に仏国土を作ろうという意図が記されている。奥州藤原氏による華やかな文化の中心地として栄え、堂塔四十、僧坊は三百を下らなかったとされる。初代清衡により上棟された総金箔貼りの国宝・金色堂は有名。し

かし一一八九年には源頼朝により藤原泰衡が殺されて奥州藤原氏は滅亡。平泉は焼かれたが、頼朝は仏教を重んじてもいたため、中尊寺は庇護された。高館にある判官館（義経堂）は、この地に身を寄せていた源義経が滞在していたところだが、義経はここで泰衡に誅されたとされる。江戸時代には松尾芭蕉がここを訪ねて「夏草や兵どもが夢のあと」の句を詠んだことで知られている。ちなみに盛岡中学校四年の修学旅行で、賢治は中尊寺と共に芭蕉の句碑のある毛越寺（中尊寺より一・五キロほど南）にも足を運んでいたようである。

鐘　中尊寺の鐘楼にある康永二（一三四三）年、金色堂別当頼栄によって鋳造された梵鐘のこと。長い年月にわたって撞かれたために窪んで、今は撞かれることはめったにないという。中尊寺仏教文化研究所長の佐々木邦世（「平泉中尊寺と宮沢賢治」「第11回グスコーブドリの大学校報告書」石と賢治のミュージアム 平成二十二年三月）によれば、「この鐘は、音もやわらかい、質もやわらかいんですね。撞座を何百年も撞いていると、丸い撞座が窪んでへっこんじゃった。それで四方に撞座がありますので、45度ずつ廻すわけですね。またそれも窪んでくる。また45度廻すと一廻りしてしまったんです」とのこと。

青葉もて埋もる堂　中尊寺境内にある弁慶堂のこと。中尊寺の表参道（月見坂）に沿ってあり、文政十（一八二七）年に建てられたという。古くは愛宕堂と呼んだが、近代以降は弁慶堂の名が定着している。本作の舞台は高館にある義経堂だとされることが多いが、義経堂は毛越寺の飛び地境内であり、島田隆輔（後掲）も書いているように、この地で経験したことに「中尊寺」のタイトルを付けるのはおかしい。また、浜垣誠司（「1912年修学旅行の平泉」「宮沢賢治の詩の世界」平成十九年八月十九日 https://ihatov.cc/blog/）が、本作の下書稿㈠に「義経の経笈を守る」とあるが、義経の経笈（書物や衣類などを入れる竹製の背負い箱）は、宝物として義経堂ではなく中尊寺境内にある弁慶堂に保管されていたということから、こちらがモデルだったのではないかとしている。

義経の彩ある像　彩色された義経像のことで、これは賢治の時代から現在に至るまで義経堂と弁慶堂に、それぞれ置かれていた。

評釈

「歌稿〔B〕」の短歌8・9から発展したもの。短歌と同じ紙面に書かれた下書稿㈠、既使用の黄罫（22 22行）

詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは「中尊寺」）の二種が現存。「「文語詩篇」ノート」の「17　1912」の「五月」の項に赤インクで左のように書かれ、藍インクで×印が付されている。文語詩化が完了した印と解される。

中尊寺、偽ヲ云フ僧、義経像　　青キ鐘

盛岡中学四年生の明治四十五年五月二十七日～二十九日まで、賢治は石巻、松島、仙台、平泉をめぐる修学旅行に行っている。一関から船で石巻に向かい、下船して鹿島御児神社での経験を書いたのが「〔われらひとしく丘に立ち〕」（「未定稿」）。平泉の中尊寺では「中尊寺〔一〕」（「一百篇」）、「中尊寺〔二〕」（「未定稿」）が書かれている。また、修学旅行の際の経験かどうかは未定ながら「未定稿評釈」では「僧園」も平泉の毛越寺での経験を詠んだものだとしている。

「歌稿」から見ていこう

8　中尊寺／青葉に曇る夕暮れの／そらふるはして青き鐘鳴る。

9　桃青の／夏草の碑はみな月の／青き反射のなかにねむりき。

9に関しては、桃青（松尾芭蕉）の「夏草や兵どもが夢の跡」の碑のことを指すのだと思われるが、句碑があるのは同じ平泉でも毛越寺。ただこの二種を赤インクでかこって「中尊寺」のタイトルのもとに下書稿㈠を書いていることから、『新校本全集』でも両首を先行作品だと判断しているのだろう。

次に下書稿㈠の手入れ後の形態をあげる。

みねのかた
青き鐘なり
白きそらいとも近きに
この堂は青葉めぐらし
義経の経笈を守る
僧ひとり縁にうちねて
膨れたるうなじめぐらし
にせものの像を指し
さりげなくそらごと云へば
白きそらいよよさびしき

この後に紙面を変えて改稿されて下書稿㈡になるが、大きな変更はされていない。ただ僧が「そらごと」を言うと

いうだけでなく、下書稿㈠では「にせもの」の語まであり、中学時代の賢治が中尊寺に抱いたイメージが悪いものだったように感じられてしまう。

賢治が「ほんたう」を愛し「にせもの」を嫌ったことは、「銀河鉄道の夜」における「ほんたうの神さま」と「うその神さま」、「ほんたうの考」と「うその考」の対立をはじめ、「ほんたうの幸い」「ほんとうの精神」「本統の世界」、また「にせ医者」「にせ学者」「にせ教師」「にせ巡礼」など多くの言葉を登場させたことにも明らかだろう。

小川達夫（後掲）は盛岡高等農林学校時代の修学旅行で箱根を歩いていた時のエピソードとして、大谷良之（「賢治君を思う」『宮沢賢治とその周辺』川原仁左ェ門 昭和四十七年五月）の書いた文章との類似性を指摘している（小川よりも記事を長く引用する）。

関所跡も近づいて土地も広く開け畑地が右側に見える所にさしかかった。「関所跡までどれ位ありますか」と農夫に聞いたところ「そうじやのー、あと二里あるで」と返答があつた。ところが大きな声で「馬鹿野郎。嘘つくなツ」と宮沢君が叫んだ。私は農夫が怒つて追いかけて来はしないかと恐ろしかつたが、彼は平気な顔をしておる。あの温厚な悪い言葉一つ言つたことのない彼が、あんなに叫んだのは彼の鋭どい感覚で農夫が大嘘をついたのを見破り、純情の彼としては我慢できなかつたのであろう。

これに類したことが、中学校時代の修学旅行でもあったということなのかもしれない。ただ、僧が嘘をつくとは、普通は考えられない。まして修学旅行の生徒を前にして、おそらくは引率教員もいたはずなのに、中学生だった賢治にも見抜かれるような「そらごと」を言うものだろうか？同じ修学旅行中のできごとであっても、箱根の農夫のような「そらごと」を言ったとは、考えにくいのではないだろうか。

中尊寺の弁慶堂を訪ねた坪谷水哉（「東北見物記（上）」『新山水行脚』博文館 大正元年八月）は、「先づ弁慶堂に着て待てば、案内者は近き辺りの管理所に往き、各自の為に参観券を求め来ると、其後は一堂ごとに異なる監守僧が、一一鍵で扉を開いて案内す」と書いている。刊行年の大正元年八月と言えば、大正に改元されてすぐであることから、弁慶堂に行ったのは明治末年ということになり、盛岡中学校の修学旅行の時期と近く、状況はほぼ同じだっただろう。つまり賢治が「僧ひとり縁にうちゐて」と書いていたのは、たまたまそこに僧が座っていたということでは

なく、中尊寺が来訪者対応をきちんと管理しており、職務としてそこに僧を置いていた、ということのようである。いわば中尊寺公認の案内人であったことになるが、そうした僧が「そらごと」を話し出すというようなことがあったとは、なおさらに考えにくい。

佐々木邦世（「平泉中尊寺と宮沢賢治」「第11回グスコーブドリの大学校報告書」石と賢治のミュージアム 平成二十二年三月）は、「中尊寺の『日誌』がありまして、明治45年5月29日のところに、こう記録してある。当番が法泉院。これは62歳の澄應という人でございまして」、そこに「金2円也。盛岡中学生60名」と書いてあったとしている。こうした記録が八十年後にもきちんと残って閲覧できていることからも、中尊寺の管理がかなり行き届いたもので、中学校の生徒に「そらごと」を言うことはますます考えにくい。

小川（後掲）は、「そらごと」に関係したかもしれないとして、賢治たちが平泉に向かう二十日ほど前に電翁と名乗る人物が義経堂を訪ねた際の「中尊寺参詣（上）」（「岩手日報」明治四十五年五月十日（朝））を紹介している（ここでも小川より記事を長く引用する）。

此処に白旗大明神と云ふ片額の掲げて在る堂がある。今しも扉を明けて在る坊さんがある。（略）予は此坊さんに乞ふて此木造の画姿を頂かして貰つた、坊主曰く
『ズツと前に窃盗にヘイられヤシて竜頭の兜と、ズエー（采配のことならん）は取られヤシテガス、其取れたのは余程是よりはジエーのでガシタと云ふ

たしかにあまり史実に忠実そうな、あるいは信仰心に篤そうな感じは受けないが、方言が多少きついということがあったにしても、「そらごと」を言ったというわけではない（ただしこれは義経堂についての記述なので、管轄は中尊寺ではなく毛越寺。しかし、やはりここにも僧は配されていたようである）。

ところで、「一百篇」の「中尊寺〔一〕」で、賢治は盗人を描いていた。賢治は「五十篇」と「一百篇」に同名の詩を収録するなどによって、歌詞の一番と二番のように、語句や状況などを対句的とも言えるような使い方をしており、その組み合わせを「対」と呼んでおいた（信時哲郎「「五十篇」と「一百篇」 賢治は「一百篇」を七日で書いたか」『一百篇評釈』）。本作は未定稿なので「中尊寺〔一〕」と厳密な意味で「対」の関係にあるとは言えないが、「対」とさせるべく、ある程度の準備をしておきなが

ら、最終的に断念された、という作品だったように思われる。

ことに興味深いのは、中尊寺〔一〕の成立過程だ。

「〔冬のスケッチ〕」に書かれた下書稿㈠にも、晩年に使われた「雨ニモマケズ手帳」に書かれた下書稿㈡にも、中尊寺の名前も、それにちなんだと思われる文字が全く登場しない。しかし下書稿㈢になると、突然タイトルに中尊寺が登場して㈣が付され、それを生かして定稿が成立している。

当初のタイトルや取材地、モチーフ等が推敲が進むうちに、もう一方の「対」の詩に引き寄せられるかのようにして改変されるのは、「五十篇」と「一百篇」にまたがる三つの対の詩群「悍馬」「〔秘事念仏の大師匠〕」「車中」の全てに共通していることを思うと、「中尊寺」も、「対」を目指して推敲が進んだものの、一方だけが定稿になった例だと考えることができそうだ。

しかし、タイトルこそ「対」であっても、その他に語句や表現方法で似通ったところが見られないのも事実である。ただ、「中尊寺〔一〕」には「盗み」というマイナスイメージの漂う言葉が登場し、「中尊寺〔二〕」にも、やはりマイナスイメージの漂う言葉として「にせもの」や「そらごと」が登場している。賢治は、このあたりを「対」として提示するつもりがあったのではないだろうか。

「中尊寺〔一〕」を挙げてみよう。

七重の舎利の小塔に
蓋なすや緑の燐光
大盗は銀のかたびら
おろがむとまづ膝だてば
赭のまなこたゞつぶらにて
もろの肱映えかゞやけり
手触れ得ね舎利の宝塔
大盗は礼して没ゆる

「中尊寺〔一〕」は、七重の舎利塔に「大盗」がやってくるが、あまりの神々しさのためか手を触れることができず、礼をして立ち去ったという内容だ。『一百篇評釈』では、単純に盗みをする者のことを悪人だと断罪するだけでなく、人間が本質的に他者から何かをとる（盗る／取る／奪る／摂る）存在であることを詠み込もうとしたのだ、と解したが、「中尊寺〔二〕」においても、「にせもの」や「そらごと」といういかにもマイナスなイメージのある言

葉を置きながら、それらを悪いものであると、単純に言い切っていないあたりが似ているように思う。

下書稿㈠にあった「にせものの像」とあるのは、手入れの段階では「あらたな像」とも書いていたことから、彩色された姿が不自然に新しく感じられたということを言おうとしていたのかもしれないが、鎌倉時代以降に流行した「似絵」と呼ばれる肖像画のことを思い浮かべた可能性もありそうだ。

似絵とは、架空の人物像や、礼拝の対象となるようなものではなく、写実性や記録性が重視された肖像画のことで、代表的な絵が、奇しくも源頼朝を描いたとされる神護寺所蔵の肖像画（今日では頼朝像ではなく足利直義像だとする説が有力になっている）であるが、義経に似せて作ったという意味で「にせもの」と使ったのかもしれない。別に悪いもの、というわけではない。ちなみに「一百篇」にも斎藤宗次郎をモデルにしたとされる「暁眠」があり、ここでは「贋物師」を登場させていたが、やはり悪という印象を与えてはいない。

「そらごと」についても、末期ガンの患者に敢えて事実を伝えないようにするといった「そらごと」の効用についてはよく知られるところであろうし、文学では、真実を伝えるために、敢えてフィクションというウソを書くことを数千年も続けている。賢治の文語詩も、自分の経験した事実そのまま伝えようとする心象スケッチから、フィクションもまじえた方法を取るようになっているのだが、つまり、時と場合によって、人は「にせもの」や「そらごと」を使い分けているのであり、賢治としては、ここで「にせもの」や「そらごと」という言葉の両義性を使おうとしているようにも思えるのである。

では、寺からも信頼された僧が、教師も含めた中学校生徒を前にして、本当に「そらごと」を言ったのか、また、もし言ったとしたならば、いったい、どのような「そらごと」を言ったのだろうか。

源義経は軍事的な天才であったとされているが、実兄の頼朝から命を狙われる悲劇の人物で、判官贔屓と呼ばれるファン心理で有名だ。この言葉は室町時代の頃から使われていたらしいが、悲劇の天才というのは、いつの時代でも大衆的な人気を得やすいようだ。

先に引用した「岩手日報」に訪問記を寄せた電翁も、義経堂を訪問した際に「扉を開いた中には即ち予が日頃お眼に掛りたいと恋に憧憬れて在た義経公の木像が在すのだ、甲冑姿の右手に采配を握られ雄姿が、今も尚歴然として遺って在る」と書いているので、判官贔屓の義経ファンだったと言ってよいだろう。

また、少し時代は下るが日本大学中学校の一生徒による「東北地方修学旅行記」（「校友会誌11」日本大学中学校校友会 大正十五年三月）にも、「弁慶堂を見たが例の七つ道具を背に負ひ、いかめしい装飾をした弁慶の立像と失意轗軻の英雄源義経の像と並び立つを見ては主従最後の奮戦の状景が眼前に浮んで暫し無量の感慨に打たれた」と書かれており、義経ファンだ。

もちろん同時代の参詣者全てが同じ気持ちで中尊寺を訪ねたわけではないだろうが、賢治たち盛岡中学生の中にも判官贔屓は多かったように思われる。いや、古代東北の栄華を代表する平泉文化が頼朝によって滅ぼされたことを意識していたとすれば、盛岡中学生たちは、日本大学中学生よりも判官贔屓の度が強く、義経像を見た時の感銘はさらに深かったかもしれない。

自身を「熱心な判官贔屓である」としている玉井紅葩（広平）（『山河拾四州』春陽堂 明治四十五年二月）は、中尊寺を訪ねた際に、次のようなことを書いている。「彼等（信時注：義経と弁慶）は蝦夷、樺太へ逃げたか、但しは満州地方へ落ちたか其処までは知らないが、文治五年以後は此の日本国に於ては見る事の出来ない人となつた、茲に於いてか紅葩は涙下らざるを得なかつた」。

義経が平泉で命を落とすことなく、蝦夷に逃れ、さらにモンゴルに渡ってジンギス・ハンになったといった伝説は、今日、広く伝わっているように思うが、これはジャーナリストの末松謙澄が明治十二年に英語で書いた論文に発したもので、明治十八年には内田弥八が『義経再興記』が翻訳してベストセラーになったことからも、当時既に多くの人に知られていたようである（相原康二「館長室から」https://www.esashi-iwate.gr.jp/bunka/column/100/ えさし郷土文化館 令和四年七月）。とはいえ、これは伝説であって、さすがに真剣に信じる者は少なかっただろう。ただ判官贔屓の義経ファンたちの中には、こうして義経の不滅を思って、溜飲を下げる者もあったのではないだろうか。

さて、では、もし中尊寺の僧が、こうした伝説を語ったのだとしたらどうだろう。これならば盛岡中学校の教員や生徒たちも「いつわり」であることはわかりながら、心情的に十分に理解できる類のものだったのではないだろうか。また、中尊寺としても、寺の権威に傷をつけるとか、史実をゆがめたといったことで、この「そらごと」を罰したとは考えにくい…

とはいえ賢治の評伝にも文献にも、このような話は一切載っておらず。同時代資料から推理したに過ぎない。ただ

下書稿㈠の手入れ形の末尾三行を「そらごと」を語る破戒僧の話だと解するのと、判官贔屓の心情を前面に出しながら僧が語り、盛岡中学校の生徒たちも、密かに納得していた場面であったとして読めば、賢治が晩年に至っても、この経験を書き残したい思いがあったのも頷けるように思うのだが、いかがであろうか。

にせものの像を指し
さりげなくそらごと云へば
白きそらいよよさびしき

新しい資料、新しい視点が登場する日を待ちたい。

先行研究

小倉豊文「山上の堂のくらやみ」(『「雨ニモマケズ手帳」新考』東京創元社 昭和五十三年十二月)
宮城一男・対馬美香A「文語詩「中尊寺」考」(「弘前・宮沢賢治研究会会誌4」弘前・宮沢賢治研究会 昭和六十一年五月)
宮城一男・対馬美香B「平泉の奇蹟 文語詩「中尊寺〔一〕〔二〕」考」(「宮沢賢治7」洋々社 昭和六十二年十一月)
原子朗「賢治と中尊寺」(「関山3」中尊寺 平成八年十月)
小川達雄「中尊寺の鐘」(『盛岡中学生宮沢賢治』河出書房新社 平成十六年二月)
森義真「宮沢賢治と平泉 「大盗」に新説」(「宮沢賢治センター通信16」宮沢賢治センター 平成二十四年十一月)
島田隆輔「《賢治自伝》詩譜の試み 中学時代篇(中)」(「論攷宮沢賢治18」中四国宮沢賢治研究会 令和元年八月)